

平成26年度
ゼミ学生地域貢献推進事業成果報告書

平成27年2月
一般社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム

目次

1. 静岡英和学院大学 短期大学部 安ゼミ
若者の視点による焼津の観光魅力の発掘
ー現地聞き取り調査と学生企画モニタツアーを通じてー 1
2. 静岡県立大学 経営情報学部 西野ゼミ
「人口減少の要因と定住人口の拡大策」の調査・研究・提案 5
3. 静岡県立大学 経営情報学部 尹ゼミ
(連携ゼミ：静岡産業大学 情報学部 金ゼミ)
藤枝らしい特徴あるお茶を強みとする産地づくり 9
4. 静岡県立大学 経営情報学部 金川ゼミ
公民館活動への若者の参加と地域の活性化に関する研究 13
5. 静岡福祉大学 社会福祉学部 西尾敦史ゼミ
若者が若者を支える体制づくり 18
6. 静岡文化芸術大学 文化政策学部 船戸ゼミ
浜松市天竜区龍山地区における地域づくりの方策の研究 22
7. 常葉大学 経営学部 村本研究室
(連携ゼミ：常葉大学 健康科学部 栗田研究室)
「すその健康増進プラン」の中間評価と計画書の見直し 26
8. 静岡英和学院大学 人間社会学部 蔡ゼミ
地域の伝承文化に関する研究——しずおか昔話の系譜—— 30
9. 静岡県立大学 国際関係学部 津富ゼミ
北欧発「デモクラシー・カフェ」の静岡市における実践：
若者による、市民と政治家の対話の場の創出のもたらす効果について 34
10. 静岡県立大学 国際関係学部 小針ゼミ
県内韓国語標識・印刷物における研究と提案
ー鳥取県西部を中心とした調査との比較ー 37
11. 静岡産業大学 情報学部 堀川ゼミ
中山間集落に残る古民家、古茶樹などの地域資源を活用した交流人口拡大策に
関する研究 42
12. 静岡大学 情報学部 杉山岳弘研究室
浜松市に残る徳川家康公に関する物語の資産化プロジェクト 46
13. 静岡大学 理学部 徳岡研究室
旧湯ヶ島小学校を利用した天城山周辺における自然環境資源の有効活用の研究
. 50

14. 静岡福祉大学 社会福祉学部 前川ゼミ
 障害者の就労を支える地域づくり
 ー就労支援事業所が運営するカフェの地域社会とのインクルージョンのあり方を考えるー
 ・ ・ ・ ・ ・ 53
15. 静岡理工科大学 総合情報学部 三原研究室
 リーフ茶拡売のためのマーケティング策
 ～高級茶を用いた新商品、新流通、新プロセスの研究～ ・ ・ ・ ・ ・ 57
16. 東海大学 海洋学部 落合研究室
 (連携ゼミ：静岡理工科大学 理工学部 吉川ゼミ)
 機能性成分を活用した冷凍マグロ廃棄部分の高度有効利用に関する研究 ・ ・ ・ ・ 62
17. 常葉大学 健康科学部 杉井ゼミ
 (連携ゼミ：渡部ゼミ・青田ゼミ)
 参加型世代間交流による高齢者・学生の相互効果と過疎地域活性化に及ぼす影響の検討
 ・ ・ ・ ・ ・ 66
18. 常葉大学 経営学部 大久保ゼミ
 富士ブランド認定品を活用した観光振興プランの策定 ・ ・ ・ ・ ・ 71
19. 日本大学 国際関係学部 福井ゼミ
 地域社会と南米日系人の連携による地域活性化と多文化共生の推進 ・ ・ ・ ・ ・ 77
20. 浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 土倉ゼミ
 ワークショップ型学習における「学びのきっかけ」の探索的検討
 ー学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究ー ・ ・ ・ ・ ・ 81

本報告書は、静岡県から「平成26年度大学間等連携推進事業費補助金」を受けて一般社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムが実施した「平成26年度ゼミ学生地域貢献推進事業」の成果報告を取りまとめたものです。

若者の視点による焼津の観光魅力の発掘 ー現地聞き取り調査と学生企画モニタツアーを通じてー

静岡英和学院大学 短期大学部 安ゼミ

指導教員：講師 安 哉宣

参加学生：秋定杏奈、石原羽純、風岡七海、片平圭、櫻井佳菜、島本高子、永島沙紀、
西村里咲、原田郁美、松下彩、吉田智花

1. 要約

観光をテーマとする安ゼミでは、焼津市における観光振興事業に必要な要素や条件を見出すために、学生企画のツアーを実施した。当初、若者（本学女子学生）の間では、焼津といえば魚のまち、港のまちとしてのイメージが強く、その他の魅力や観光施設に対する認知度が低かった。そこで、ツアーに先立ち、地元のガイドさんによるまち歩きに参加し、イベント主催団体とまち案内人の会のキーパーソンに聞き取り調査を行った。その際に収集した地域情報を踏まえ、学生に若者をターゲットにした焼津観光を企画・実施させ、観光地としての魅力や若者集客への可能性について検討した。

2. 研究の目的

本研究では、焼津市における魅力ある観光地を創出するために、案内人によるまち歩きと学生企画ツアーを実施し、若者集客に向けた課題について提言することを目的とした。

3. 研究の内容

（1）地元のガイドとまち歩き

- ・焼津市民活動団体「焼津まち案内人の会」案内ガイドによるまち歩きに参加
- ・2014年10月24日（金）9:00～12:00 参加学生5名、教員1名

焼津市では、焼津まち案内人が活動しており、依頼を受け、まち歩きツアーを行っている。今回参加したまち歩きコースは、浜通りを中心として総13カ所が含まれていた。ガイド内容は、焼津の歴史、伝統、文化に関する解説に重点が置かれていた。小泉八雲像、小泉八雲滞在の家跡、罪切地藏、船玉浦神社（通称・ふなだまさん）、護信寺・弁天宮、北の御旅所（通称・北のおやすみさん）、波除け堰跡などでは主に写真を用いた説明がなされた。そして、焼津の老舗鯉節店、多数多様なマグロ包丁が置かれている刃物店、漁民に愛され地域に定着してきた味噌まんじゅう和菓子屋に訪れ、お店の方々が語る地域の文化やエピソードに触れ合うことができた。深層水ミュージアムへの案内も行われ、漁業、水産加工業の町としての焼津ならではの魅力や地域文化、地域資源を知るきっかけとなり、普段なら何気なく通り過ぎてしまう場所も、案内人が介在することで新たな発見が生まれてくることの再確認ができた。また、観光資源が「点」化している焼津の場合、ストーリー性を強調することができれば、より回遊性を確保することができると考えられる。



(2) イベント主催団体とまち案内人の会へのインタビュー調査

- ・商店街振興組合「焼津市昭和通り発展会」増田信吾氏
- ・焼津市民活動団体「焼津まち案内人の会」関 幸彦氏
- ・2014年11月14日(金) 9:30～12:00 参加学生4名、教員1名

該当団体が行っている活動内容及び観光振興についてインタビューを行った。

【昭和通り発展会の活動】

地域活性化に向けた取り組みは、焼津市昭和通り発展会の場合、毎年4つのイベント(フリーマーケット祭、七夕祭り、ハロウィンカーニバル、イルミネーションフェアなど)を主導して開催している。年々、イベント規模を大きくすることで、関わる人が増え、集客力も強くなったという。2010年に比べて集客は倍以上となっているが、来街者のほとんどは焼津市の住民であり、大井川、藤枝の一部を除いて、市外への広告活動はほとんど行っていない。これらイベントの主な目的は、まず、住民の方々に昭和通り商店街を知ってもらうことにある。昭和通り発展会には25の方が活動している。会員には男性の年配の方が多いが、最近では若い世代も地域活動に関わるようになっており、イベントによっては、地元の中学校や高校の学生が準備段階から関わっている。

【焼津まち案内人の会の活動】

焼津まち案内人の会は、焼津まちづくり推進委員会のエコミュージアム部会として、まち歩きや案内活動を行っている。13の方が活動しているが、来街者からの依頼は少ない。焼津まち案内人の会の中心メンバーは、焼津特有なものを生かそうという基本的な考えから子供たちに焼津の誇りを語り継ごうということで歴史、食文化、生活文化を育み、様々な活動を実施してきた。例えば、皮が付いたカツオの刺身を食べる習慣や黒はんぺんとへそ(カツオの心臓)が必ず入っているおでん、味噌まんじゅうなど、漁業の町としての食文化をテーマにして取り組んだ活動である。すでに、おでん探検隊、ふるさと探訪ウォーキング、味噌まんじゅう学会が結成されており、おでんマップの作成や10店舗の味噌まんじゅうの食べ比べができる商品開発・販売、全国で開かれる各種フェアへの出店が行われてきた。なお、住民からは、魚だけではなく、富士山の絶景、漁船がずらっと並んでいる町の風景、水揚げの様子、高草山の夜景、豊かな植生と生物(昆虫、鳥)、四季折々の自然の変化などを焼津の魅力として挙げた。住民は自然の豊かな町であることへの誇りや認識が強いようである。



(3) 学生企画によるモニタツアー

・若者の視点からの焼津の魅力と集客の可能性を探るため、学生企画によるツアーを実施し、ツアー参加後にアンケート調査を行った。

・2014年11月22日(土) 10:00～15:00(約5時間の半日観光) 参加学生11名、教員1名
 ここでは、ツアー企画メンバーと参加メンバーが異なるように設定し、4つのグループに分けて調査を行った。各グループ女子学生2～3名で構成されている。若者をターゲットにしたツアープランは第1表の通りである。

【第1表】 若者をターゲットにした焼津ツアープラン

テーマ	①見て、聞いて、 学んで、焼津の意 外な魅力	②自然と浜通り散 策ツアー	③現在に息づく 歴史の町並み	④海に触れて、食を楽し しみ、港町焼津を楽し もう
場所	焼津駅→西焼津駅→ かしはる西焼津総本 店→かっぱ館→食事 →焼津ディスカバリ ーパーク→焼津駅	焼津駅→ビオトー プ園→石原水産マ リンステーション →焼津観光協会(レ ンタサイクル)→食 事→浜通り→焼津 駅	焼津駅→花沢の里 →食事→焼津文化 センタ(花沢の写真 展)→味噌饅頭めぐ り→焼津駅	焼津駅→深層水ミュ ージアム→うみえる→ 食事→イルミネーショ ンフェア→焼津駅
交通手段	電車、タクシー、 バス	バス、タクシー	バス、タクシー	歩き
食事	魚料理	魚料理	ハンバーグ	魚料理
焼津内交通費	1100円	470円	1220円	0円
入場料・ 体験費など	900円	500円 レンタルサイクル	230円	200円
費用 (焼津までの 交通費は除く)	約3700円	約2000円	約2500円	約1200円

そして、企画通りのツアーを実施した後、ツアーの満足度や内容のバリエーション(訪問先数)、費用、改善点などについてアンケートを取り、全体的な評価を行った。その結果をまとめたものが第2表である。

ツアーに参加した学生の約82%は、焼津での観光は「楽しかった(うち、非常に楽しかった=55%)」と答えており、食事への満足度も高く「また訪れたい」と回答した。一方、目的地へのアクセスの不便さ(バス停の場所、本数など)や交通費がかかるといった指摘も聞かれた。観光案内板等の整備、分かりやすい情報の発信、観光資源をまとめた冊子、若者向けの観光情報内容の検討、市外へのPR・広告を求める意見も聞かれた。

【第2表】若者をターゲットにした焼津ツアーの評価

テーマ	①見て、聞いて、学んで、焼津の意外な魅力	②自然と浜通り散策ツアー	③現在に息づく歴史の町並み	④海に触れて、食を楽しみ、港町焼津を楽しもう
楽しさ	◎	○	△	◎
訪問先数	◎	△	△	○
満足度	◎	△	△	○
友達へのお勧め	◎	▲	△	○
食事	◎	◎	◎	◎
費用	△	△	▲	◎
評点	28点	20点	19点	27点

注：◎5点、○4点、△3点、▲2点、×1点

4. 研究の成果

今回の現地調査を通じ、若者の視点による焼津の魅力を探り、集客に向けての課題や可能性を見出すことができた。若者の間に定着していた「魚だけというイメージ」が、今回のまち歩きへの参加やツアーの企画・実施を通じ、「焼津には見て、遊べる場所が多い」、「焼津で行ってみたい場所が増えた」、「新しい焼津の魅力、観光スポットを知った」、「焼津の人の温かさを感じた」といった形に変化した。また、ゼミ学生は地元の人々と交流を図りつつ、焼津に対する知見を広めることができた。

5. 地域への提言

以上の調査内容を踏まえ、焼津の観光振興への提言を以下のようにまとめた。

- ・体験交流型観光の推進：地域そのものを五感によって感じ、学べる体験ジャンルを増やす。
(自然観察体験、生活文化体験、地域産業体験、農林漁業体験、歴史文化体験など)
- ・観光案内ボランティア、語り部、体験観光ガイドの育成と支援。
- ・観光案内機能の充実：観光施設の看板や案内サイン、情報内容と発信方法の工夫
- ・市内移動手段の充実、利便性の向上。

「人口減少の要因と定住人口の拡大策」の調査・研究・提案

静岡県立大学経営情報学部 西野ゼミ（研究室）

指導教員：教授 西野 勝明

参加学生：石川結加里、板倉彰彦、梅本洋佑、
下山聡葉、高柳茉以、森松美保子
井熊良、杉本美奈、重野友見、
高橋望、仁藤大晴、柳いくみ

1. 要約

島田市は、20～39歳の若者・壮年層の人口減少率が大きく、若者が定住する街になることが大きな課題となっており、地域資源を活かした交流客の増大、雇用機会の創出などが課題となっている。若者の視点からの地域づくりを、静岡県立大学西野ゼミと島田市がワークショップやフィールドワークによる共同研究を行い、市長に5つのプロジェクトの提案を行った。

2. 研究の目的

島田市は人口101,159人（平成25年度）の大井川を挟んで315.9平方キロメートルの市である。人口は、平成21年度の103,367人から25年度の101,159人へと2.1%、2,208人の減少となり、特に20～39歳の若者・壮年層の減少率が10.1%と大きく、若者が定住する街になることが大きな課題となっている。対策としては、地域資源を活かした交流客の増大、雇用機会の創出などが挙げられる。特に若者の視点から地域づくりが必要という観点から、静岡県立大学経営情報学部西野ゼミが島田市企画部企画課とワークショップ、フィールドワーク等による共同研究を行い、地域づくりについて政策提言を行う。それにより島田市の今後の発展の一助とする。

3. 研究の内容

ワークショップは以下のとおり開催した。

第1回 ワークショップ（島田市役所、現地視察）

6月30日 テーマ「島田市の地域資源の確認」（説明&フィールドワーク）

島田市の概要説明（人口、面積、主要産業、特産物、）

島田市の成り立ち、人口動態

地域資源の視察（ばらの丘公園、お茶の郷、リバティ、蓬萊橋）



第2回 ワークショップ（島田市役所）

7月14日 テーマ「自分が住んでいるまちと比較」

島田市プロモーションビデオ上映

人口動態分析

ワークショップ＝「若い人が行ってみたいくなるまちとは」を3チーム（A、B、C）に分かれて実施

同 　　　＝「島田市にほしいもの（統計データの分析やフィールドワークの結果、何が足りないか）」

第3回 ワークショップ（島田市山村都市交流センターささま）

8月26日～27日（合宿）

26日

島田市地域資源視察（こども館おびりあ、島田市図書館、島田市博物館、川越遺跡

講演：講師 花井孝（地域活性化戦略研究所所長）「島田市活性化のための視点とは」

北島亨（山村都市交流センターささま館長）「中山間地のまちづくり」

地元代表と学生との懇談会（「企業組合くれば」の組合員、岡村さん、根岸さん、大下さん）

27日

ワークショップ：「島田市の魅力を再発見」

プロジェクトの提案作成

地域資源視察（川根温泉ホテル、茶室「杉風庵」東京家政大学生と一緒に茶道体験）



第4回 ワークショップ（島田市役所）

10月27日

ワークショップ：「若い人を惹きつける島田市の新しい魅力の創設」

3チームごとに花井孝氏の4つの要件（新鮮さ、地域特性、知的感動、社会性）を満たす政策提案をアイデアフラッシュで出した後で、絞りこみを実施

第5回 大井川鉄道を訪問調査（株式会社大井川鉄道）

12月8日

伊藤秀夫氏（代表取締役社長）と本田吉広氏（代表取締役常務）と学生との討議
本田氏から同社の現状説明の後、学生側から大井川鉄道を活かした地域づくりのプロジェクト案を説明、質疑応答を行った。



第6回 染谷島田市長へのプロジェクト提案のプレゼンテーション

12月15日

染谷島田市長、副市長、教育長、各部長など幹部職員にA、B、Cチームごとに共同研究による提案のプレゼンテーションを行った後、質疑応答を行った。
学生代表から市長に提案書を渡した。



4. 研究の成果

5つのプロジェクト提案は以下のとおりである（詳しくは別添、提案書参照）。

- ① 川越遺跡の整備・活用―「川留め文化の宿場町・島田」
- ② 大井川鉄道の整備・活用―「SLの聖地・大井川」
- ③ 中山間地の整備・活用―「研修道場のまち・ささま」
- ④ 「おびりあ」の活用―「仕事と育児の両立できるまち・島田」
- ⑤ アウトレットモールの誘致―「広域商業拠点・島田・金谷」

藤枝らしい特徴あるお茶を強みとする産地づくり

- ・ 静岡県立大学 経営情報学部 尹ゼミ
指導教員：教授 尹大榮
参加学生：飯塚俊介、熊田由紀、白石勇太、豊長慶行、水野綾乃
- ・ 静岡産業大学 情報学部 金ゼミ
指導教員：准教授 金炯中
参加学生：大須賀拓海、石上翔大、若杉慧

1. 研究の背景及び目的

「藤枝かおり」は、藤枝市に在住していた故森菌市二氏が、香りの強い品種「印雑131」と優良品種「やぶきた」を交配させ誕生した藤枝市独自のお茶である。ジャスミンの花のような香りとまろやかなうま味に加えたやさしい渋味が特徴である。平成8年に「藤かおり」として品種登録され、平成14年、藤枝市の名前をとり「藤枝かおり」を商品名として発売された。その後順調に生産を増やし、平成19年にはペットボトル茶の販売を開始した。初年度は72,000本、平成25年度には94,000本を販売した。

これまで「藤枝かおり」の振興を図るため、イベントなどによる試飲、出前講座や手揉茶体験学習など市内外や県外でPR活動を行ってきた。さらなる「藤枝かおり」のPRと認知度アップのため、これからの取り組みとしてペットボトル茶製造販売事業の推進が挙げられる。しかし、ペットボトル茶の推進を図っていくにあたり、認知度の低さや販売経路の拡大などの課題が指摘されている。

本研究は、大学生を対象としたアンケート調査を行い、「藤枝かおり」に対する課題を把握するとともに、今後とるべきマーケティング戦略の提案を目的とする。

2. 研究の内容

本研究では、「藤枝かおり」の新たなマーケティング戦略を提示することを目的として、まず、「藤枝かおり」の生産・販売状況などを把握するために、藤枝市「お茶のまち推進室」と藤枝茶商工業協同組合への聞き取り調査を実施した。

これらのヒアリング調査を踏まえたうえで、本研究では大学生（静岡県立大学部生、静岡産業大学部生）を対象に「藤枝かおり」に対する試飲テスト及びアンケート調査を行った。以下、その2つの内容について簡単に述べる。

(1) 藤枝市産業振興部農林課「お茶のまち推進室」での概要説明会

藤枝市の茶産業（産地）に現状や課題、「藤枝かおり」について概要説明を受けた。

(2) 藤枝市茶商工業協同組合への聞き取り調査

「藤枝かおり」の生産および流通に関する情報を収集することができた。



藤枝市「お茶のまち推進室」での概要説明会



藤枝市茶商工業協同組合への聞き取り調査

(3) 県内の大学生へのアンケート調査

試飲テスト及びアンケート調査は、2014年12月16日・17日に静岡県立大学経営情報学部と静岡産業大学情報学部キャンパスで実施した。主な被験者は両大学の在学生合計122名であった。調査方法は、「藤枝かおり」のペットボトルを飲んでもらい、アンケートの設問に回答してもらった。主な設問内容としては、藤枝かおりの認知度、味、商品名、パッケージデザイン、価格、今後の購入意向などに関する質問であった。

3. 研究の成果

「藤枝かおり」に対する試飲テスト及びアンケート調査を実施することで、県内の大学生が当該製品に対してどのような認識を持っているかを明らかにすることができた。具体的な調査結果は以下のとおりである。

(1) アンケート調査の結果

まず「藤枝かおりを知っているか」という質問に「知らない」と回答した人が全体の約9割(112人中102人)であった。このことから、この商品自体の知名度が極めて低いことがわかる。一方、約1割の「知っている」、「聞いたことはある」と回答した人に「どこで藤枝かおりを知ったか」を尋ねたところ、「ネットや新聞記事で」が2人、「知人から聞いた」が3人、「サンプルを貰った」が4人だった。

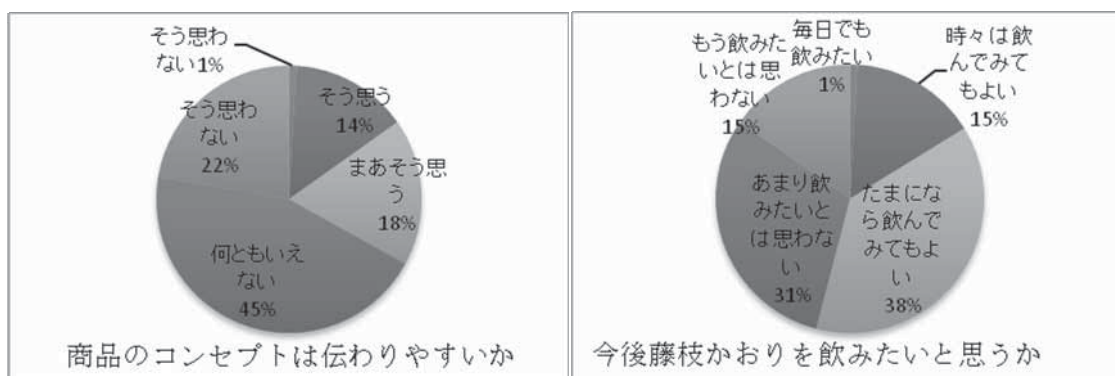
次に、試飲をしてもらった上で「味はどうだったか」「藤枝かおり特有のジャスミンの香りが感じられたか」「また飲みたいと思うか」「今後買いたいと思うか」などの質問をしたところ、味の評価は平均的な結果が得られた。そして、「また飲みたいと思うか」の質問には半数近く(111人中51人)が「あまり飲みたくない」「もう飲みたくない」と回答した。「今後買いたいと思うか」に対しては、半数以上(112人中79人)が「あまり買いたくない」「全く買いたくない」と回答した。

「ジャスミンの香りを感じたか」という質問には、約3割(112人中36人)が「そう思う」「まあそう思う」と回答し、50人が「何とも言えない」、残りの26人は「あまりそう思わ

ない」「そう思わない」と回答している。この結果は、同茶にジャスミンの香りがすることを伝えた上での回答なので「何とも言えない」「そう思わない」という回答が多かったのは、学生らの舌にはほとんどジャスミンの香りが伝わっていないということの意味する。

その他にも「パッケージデザインは良いか」「124円という値段はどうか」「いくらなら買うか」「どんな食べ物に合うと思うか」という質問をした。デザインに関しては「良いと思う」「まあ良いと思う」が半数弱（112人中52人）、何とも言えないが25人、「あまり良くない」「良くない」が約3割（112人中35人）という結果になった。デザインについてはバラツキがあり、賛否が分かれた。124円という値段に対しては、「非常に高い」「やや高い」が半数強（112人中61人）、ちょうど良いが48人、残りの3人が「安い」「非常に安い」と回答している。そして、いくらなら買うかという質問については、回答を平均値化すると、103.8円となった。価格面に関してはこれらの結果からもわかるように、少し高いと感じている人が多い。「どんな食べ物なら合うと思うか」の質問については、和菓子や洋菓子、特にクッキーやマカロンなどのパサパサしたものに合う、という声が多かった。

以下は、アンケート結果の一部を表したものである。



さらに、本アンケート結果の重回帰分析を行ったが(再飲用希望度に、味、商品名、ジャスミンのかおり、パッケージデザインが影響を与えるかどうか)、R2の値(寄与率)は0.42と低かったため、統計的な説明力は十分ではなかった。

(2) アンケート調査で明らかになった課題

上記のアンケート調査の結果、いくつかの課題が明らかになった。第1に、「藤枝かおり」に対する若者の認知度が非常に低いこと。第2に、商品の特徴が試飲後にも十分伝わらないこと。第3に、ターゲットの再設定が必要である、ということなどである。

4. 課題解決のための提言

本研究で浮き彫りになった課題について、ここでは「知名度の向上」と「顧客のターゲット」に焦点を当て、解決方法を提案したい。

まず、知名度を向上させる方法としては、インターネットやマスメディアの活用、学校での特別授業、お茶の製造体験などによる宣伝を行うことが考えられる。総務省の「ICT分野の革新が我が国社会経済システムに及ぼすインパクトに係る調査研究」（平25年）によれば、インターネットを利用した自社サイトの宣伝方法により、商品の認知度の向上が5割強、実店舗への来客数及び売上増加が2割強となっていることが報告されている。そして、学校での特別授業やお茶の製造体験からは、若い世代もしくはお茶に興味のある人を宣伝ターゲットにできるので、学校で「藤枝かおり」について学ばせることにより、今後のお茶の購入に繋がるのが期待できる。また、授業や製造体験で伝える内容としては、藤枝市のお茶の歴史や現状、今後の対策を学びながら実際に「藤枝かおり」を栽培している茶畑や製造工場に行くなど、お茶と直接触れ合うようにすることが重要と思われる。

「藤枝かおり」の販売を増やしていくためには、ニーズの再検討が必要と思われる。「藤枝かおり」は、口の中に広がるジャスミンの香りとまろやかなうま味に加えた優しい渋みをセールスポイントとし、洋菓子に合うという点を若い女性にアピールしてきた。しかし今回の20歳前後の学生へのアンケート調査からは、売り手と買い手の間に「藤枝かおり」に対する認識の違いがあることが明らかとなった。ジャスミンの味を感じるという人の割合は「そう思う」「まあそう思う」が合わせて32%と、決して高いとは言えない。「藤枝かおり」の味については、「非常に美味しい」「おいしい」と回答した人は27%に対し、「あまりおいしくない」「まずい」と回答した人は32%となっている。これは、ジャスミンの味・香りに対して好き嫌いの好みが分かれるお茶ということの意味する結果かもしれない。

いまの若い世代は、お茶の味の詳細が分かる人は少ない。ペットボトル茶を購入する際に味の差異でお茶を選ぶ人は少数であろう。売り手はジャスミンの香りをアピールしているが、今回のアンケート調査ではジャスミンの味・香りを感じる人は半数以下という結果だった。ジャスミンという「味」を強調するよりも、人の感性に訴える宣伝やニーズの見直しなどのマーケティング方法の再検討が今後の課題であると思われる。

「藤枝かおり」は販売ターゲットを主に20代～30代の若い女性に設定しているが、やや高めな値段を考えると、ある程度金銭的な余裕があり、お茶の味・香りを楽しむことができる30～40代の女性にターゲットを変更することが有効と思われる。実際、首都圏のコンビニのPOSデータを集計した情報 ([URL:www.posbank.jp/PBOUTDATA/HTML/T130613.pdf](http://www.posbank.jp/PBOUTDATA/HTML/T130613.pdf))によると、ジャスミンティーの購入者として成年（30～49歳）女性の構成比率が非常に高いことが報告されている。

近年、多様な飲料商品（炭酸系飲料やスポーツドリンクなど）の登場で、お茶の消費不振が続いている。生活スタイルの変化や単独世代の増加などで緑茶を急須で淹れて飲むという文化が損なわれつつある。とりわけ、若者のお茶離れが進んでいる。このような市場変化の中で、「藤枝かおり」を購入してもらうためには、継続的な宣伝活動を通じて認知度を向上させ、まずは「藤枝かおり」の存在を知ってもらうことが特に必要であろう。30～40代の女性を新たなターゲットとする検討も必要と考えられる。

公民館活動への若者の参加と地域の活性化に関する研究

静岡県立大学 経営情報学部 金川ゼミ

指導教員：教授 金川 幸司

参加学生：岡田卓巳、児玉哲哉、田口貴弘、星野遼介、山崎優里香

1. 要約

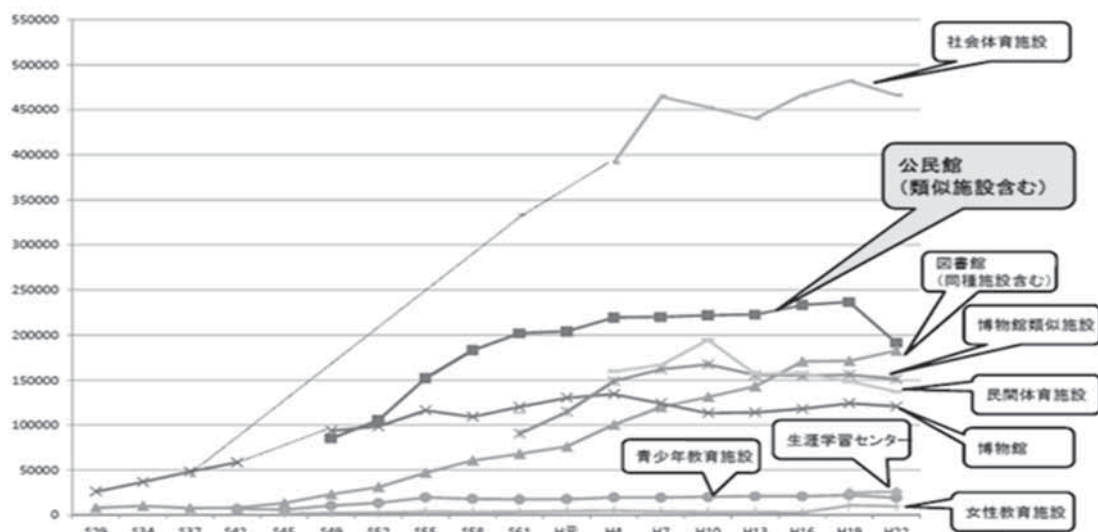
公民館の講座の現状として公民館活動に参加する世代には偏りがあり、特に大学生や20代の参加が極端に少ない。学生や若者が公民館活動、社会教育に積極的に参加したくなるにはどのような講座を企画し、開催すればよいか課題である。そこで調査として静岡県内の公民館類似施設や京都市の岡崎いきいき市民活動センターへの視察を行い、さらに若者の公民館に対するニーズを調査するために、静岡県立大学の学生に対してアンケート調査を行った。調査から得られた情報を基に公民館の講座として既存の講座の改善、新しい講座、若者が開く講座、SNSの活用の4つの提言を行う。若者の社会教育への参画は地域の活性化につながると考える。

2. 研究目的

近年、全国的に公民館の利用者数の推移は横ばいであり（図1）、袋井市においても利用者、特に若者の参加が少ない（図2）。

公民館の講座の現状として公民館活動に参加する世代には偏りがあり、特に大学生や20代の参加が極端に少ない。学生や若者が公民館活動、社会教育に積極的に参加したくなるにはどのような講座を企画し、開催すればよいか課題である。若者の社会教育への参画は地域の活性化につながると考える。そこで公民館の講座としてテーマ型の講座について提言したい。

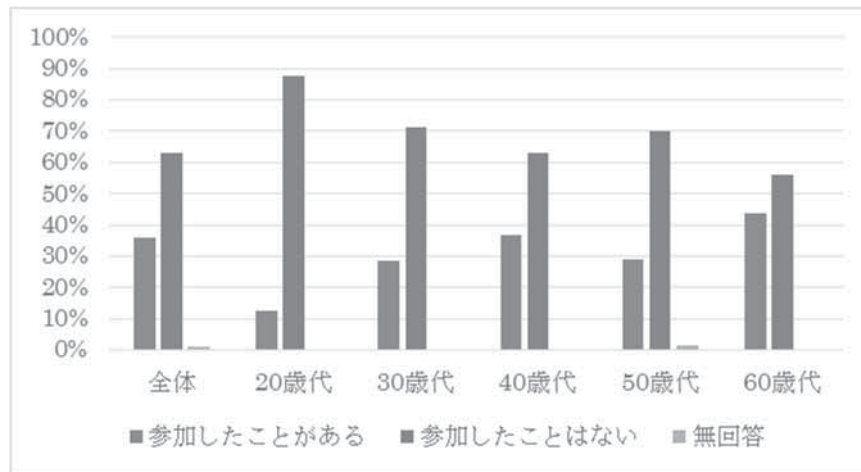
図1 社会教育施設の利用者の推移



※岩手県、宮城県及び福島県の数値は含まれない

資料 H23 社会教育調査

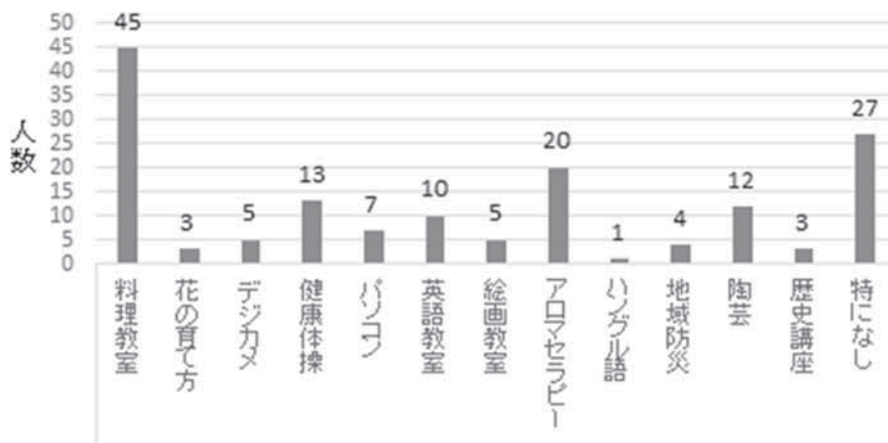
図2 年齢別に見た袋井市公民館の利用者数



3. 研究内容

若者を公民館に呼び込むためにどのような講座を行えば良いのかについて考察した。そのために実際の公民館やその類似施設ではどのような取り組みが行われているのかまた、先進的な事例を調査するために、静岡県内の公民館類似施設や京都市の岡崎いきいき市民活動センターへの視察を行った。さらに若者の公民館に対するニーズを調査するために、静岡県立大学の学生に対してアンケート調査を行った。

図3 若者が参加したい講座



4. 提言内容

調査結果から既存の講座の改善、新しい講座、若者が開く講座、SNSの活用について述べる。

(1) 既存の講座の改善点について

アンケートの結果（図3）からは、料理教室やアロマセラピーなどの講座に参加したいという意見が多く挙げられた。しかし、現状ではこれらの講座に若者はほとんど参加していない。そこでこれらの講座をテーマのある講座に改善したい。具体的には季節、イベントなどに関係なく開かれている現在の講座をクリスマス、バレンタインなどの若者が関心のあるイベントに合わせて行う。さらにパンフレットやチラシ等に若者が参加している写真や講座名を「義理チョコ、友チョコ、本命チョコを作ろう」のような若者にも受け入れられやすい名前に変更する。また、「お店の味を再現してみよう」といったように例えば、マクドナルドのポテトやスターバックスのコーヒーなど、実際に人気を集めているような食べ物の味を再現してみる。また一定の人数が集まればグループ

ごとに再現し競わせるような企画ができる可能性がある。他にも、女子限定や 20 代限定のような参加者を限定する等、現在行われている講座の改善点が挙げられる。

(2) 新しい講座の開講について

新しい講座のテーマの特徴として講座で学んだことが実生活で活かされること、若者が興味のある分野のテーマであることが重要である。大学生や 20 代を対象にするのであれば資格関係の講座、ビジネスマナーの講座などが挙げられる。さらにこれらの講座では単にビジネスマナーを学ぶだけではなく講座を通じて大学生にとっては「袋井市の企業の方と知り合える機会になり、就職活動に有利になる。」や会社員にとっては「他の企業の方と交流でき、新たなビジネスチャンスになる。」などの付加価値を設け PR していく。そして実際に参加した人たちが交流できるような講座運営が必要である。若者が興味のあることに注目して考えた講座の例として月見の里やその周辺を活用した「逃走中」がある。「逃走中」とはテレビ番組で行われている、ショッピングセンターやテーマパークを貸し切って限られた時間の中で鬼ごっこをするというもので若者の中で人気の番組である。これと似たようなことを月見の里の広い敷地を活用して行うことができる。

(3) 若者が開く講座について

視察を行った京都市の岡崎いきいき市民活動センターでは近隣の大学と共同で活動を行い施設の外装の改善といったハード面での貢献に加え、夏祭りも行っていた。さらに指定管理者団体の「音の風」は音楽をテーマに活動する NPO 団体でその特徴を活かし音楽に関するイベントを行うことで音楽に興味がある人を集めていた。袋井市でも同様に静岡県内の大学と共同でイベントや講座を開くことが可能である。大学生の積極的参加を促すために大学と交渉してその活動がボランティア活動やインターンシップとして大学の単位認定になるといったような取り組みも考えられる。

(4) SNS の活用について

SNS についてはアンケート調査の結果から LINE、Twitter、Facebook の順に利用人数が多いことが判明した。そこで Twitter と Facebook の活用について身近な例をもとに考察してみた。まず、Twitter では最近、ニュース番組の中で Twitter を利用した視聴者とのコミュニケーションやバラエティ番組で視聴者も問題に答えるといった視聴者も参加できる番組が増えている。そこで袋井市も公民館のアカウントを作成し、フォロワーに対して袋井市に関するクイズを定期的に出すクイズ形式や同様に問題を出し面白い回答をしてもらおう大喜利のようなフォロワーが参加できるような斬新な企画を作る。この取り組みが成功し広がればフォロワーの人数の増加につながる可能性がある。また、フォロワー自身に PR のキャッチコピーを考えてもらう。公民館の問題点や改善案について提言してもらおうというような取り組みを行うことで、公民館の改善や現実では距離があり近寄りづらいと感じる公民館を、ネットを通じて身近なものにしていく機会となるだろう。

Facebook については、公民館で行われている活動、講座等の取り組みの写真を頻りに更新し掲載する。アンケート調査によれば、なぜ公民館活動に参加しないのかという若者に対する問いに対して、「公民館で何が行われているか分からない」という答えが大半を占めた。このことから若者にまず公民館で何が行われているか知ってもらうことが若者の公民館活動への参加へ繋がるのではないかと考えられる。

そこで、図 4 のように目玉講座でイベントページを作成し、参加者が一目で分かる仕組みを作る。その後、公民館のスケジュールやイベント等の情報がわかるようにする等の取り組みが必要である。

図 4 Facebook の例



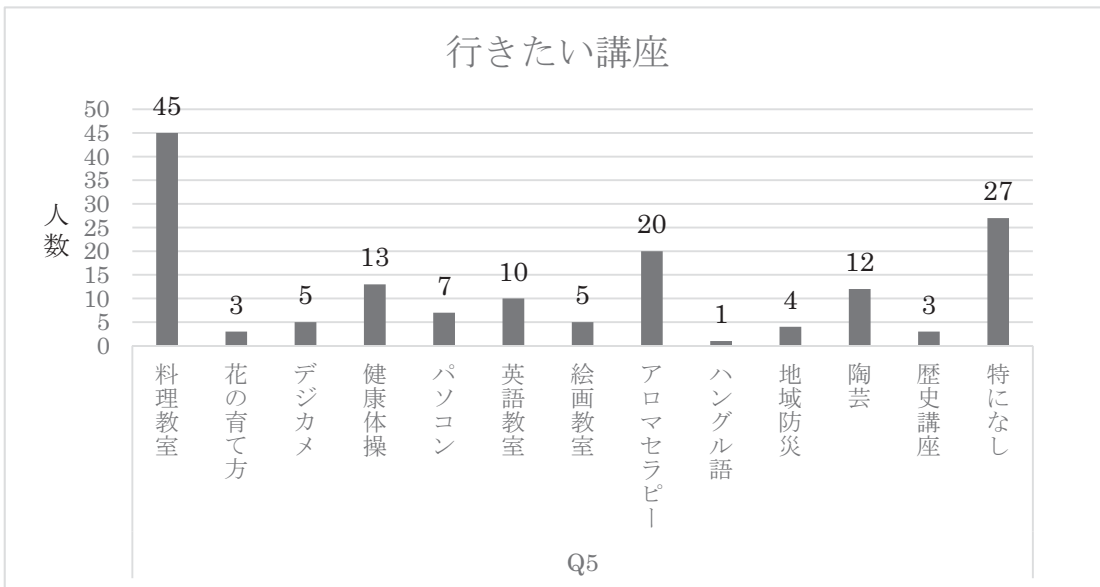
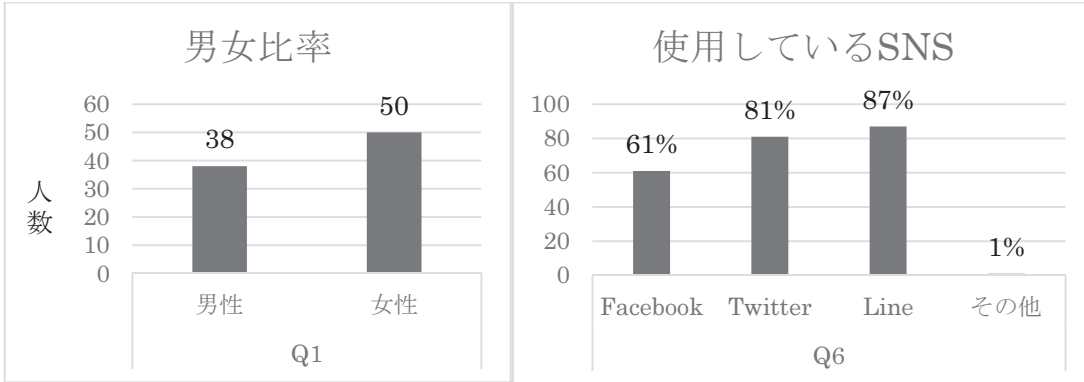
資料 筆者の Facebook より

5. 予想される地域への貢献

テーマ型講座を行うことで、今までの講座よりも若者が公民館の講座・活動に興味を持つようになり、参加する若者の増加が見込まれる。また、SNS を活用することにより若者が公民館の活動を知る機会となり、公民館との距離を縮め、若者が地域に入っていくことで世代間交流が生まれ地域の活性化にもつながることが期待される。

参考資料

アンケート結果 (静岡県立大学 学生 88 人対象 年齢 18～22 歳)



● 公民館で行って欲しいこと (自由回答) (**ゴシック体**は多く挙げられた意見)

祭り・料理教室・ものづくり講座・バザー・**お茶会**・地域防災・運動会・カラオケ・**上映会**・地域交流イベント・**フリーマーケット**・ライブビューイング・カードゲーム大会・合同コンパ・ダンス・勉強スペースの確保・コンサート、ライブ・グルメイベント・女子会の場所提供・有名人の誘致

研究課題「若者が若者を支える体制づくり」報告書

静岡福祉大学 社会福祉学部

ゼミ学生：飯塚麻帆、岩崎翼、齊藤嘉美、武田祐奈、田沢太地

指導教員 西尾 敦史ゼミ（研究室）nishio@suw.ac.jp

連携協働：静岡市こころの健康センター

1 研究の目的

静岡の地域性と若者（大学生）の視点を踏まえた次の研究を行い、望ましいあり方を提案し、その企画を先行モデル的に実践する。（1）若者が若者を支える体制づくりのための拠点の役割・機能、（2）若者のメンタルヘルスリテラシーを高めるための取り組み

2 研究の内容

1) 相互性（支え支えられる）のピアサポート、2) 「声」（Voice）を聞く、3) 「睡眠」や「食」など「生活」の中で、4) リラックスできる「場」を見つけ、5) 地域（街）の中の普通の関係性を重視する。具体的には、ゼミ研究活動の中で、つぎの調査・研究・企画・提案を行う。

(1) 若者の若者によるニーズおよびシーズ調査（生活時間、ストレス対処スキルや資源）

（例：睡眠と対人コミュニケーション・学習・仕事などとの関係、朝食習慣との関係、日常生活・地域社会の中やインターネット上にあるストレス対処資源・アプリ、人・場など）

(2) 声（Voice）を聞く（話をする）場や関係性、地域社会にある資源調査

(3) オープンで自由度が高く居心地のよい「場」の試行と提案（大学内・地域社会）

(4) 心の健康意識を高める「ストレスコーピングマニュアル」（仮称：若者による）作成

3 研究の経緯とこれまでの成果

若者（ゼミ学生）自身の成長と地域社会における若者支援・心のサポートの相互支援の可能性を広げることができないか、ゼミ活動の中で検討してきた。大学で学ぶソーシャルワークには、「解決のための資源は、対象者自らもっている」という考えがある。ストレングスマodelともいうが、本人がもっている強みに着目することで、本人の意思、主体性を尊重し、引き出していくことを重視する方法である。学生自身が日頃漠然と感じている不安やストレスそれ自身が問題解決の資源になりうることを調査研究のプロセスの中で体感しつつ、その経験を具体的な場の提案とマニュアルにすることによって地域に貢献し、心の健康意識を相互に高めることにつなげていくこと。若者による若者の「当事者研究」ともいえる。

(1) 若者の当事者研究の方法

若者が若者を支えるためのテーマには多様な側面が考えられるが、この研究活動においては、若者自身が当事者として切実に感じている問題をそれぞれが取り上げ、お互いの経験知を持ち寄りやすいテーマとしてつぎの5つの項目を切り口とした。それが「恋愛・デートDV」・「いじめ・差別」・「インターネット」・「ストレス」・「アイデンティティ」の5つである。

これらのテーマについて、担当学生を決め、以下の方法により調査・研究をすすめた。

① 問題を設定する

② 情報をつめる 1次データ(直接集める) 2次データ(新聞・文献・調査統計など)

③ フィールドワーク

④ 自身の「経験」から自分(たち)の中の「若者性」から吟味し、考察し、まとめる。

⑤ 報告会、ゼミで討議。「異見」を出し合う。編成し、組み立てる。

(2) 当事者研究の概要

研究全体のテーマは、若者が「つらいことがあっても何とか生きていける」ための助けになるものを若者自身が考え、提案し、共有すること。イメージとしては、いじめられていたり、何をやってもうまくいかない「のび太」にとっての「ドラえもん」ないし「ドラえもんのひみつ道具」は何か、こんな助けがあれば、しんどい状況があっても生き抜いていけるという視点で、そのヒントを提起することにある。

ソーシャルワークにおいては、最近、レジリエンス (Resilience) ということが言われるようになってきた。“回復力”とも“復元力”とも“弾性”とも訳されるが、従来、病気は本人の脆弱性と心理社会的なストレスによって引き起こされると考えてきたが、ストレスが加わっても、それを跳ね返す力、回復力をもった状態を表す動的な概念といえる。

医療機関や専門機関での相談や治療が必要になる以前の段階で、日常の地域社会に若者相互の「ひみつ道具」によってレジリエンスが発揮できる環境をつくることが研究の焦点となった。レジリエンスは個人力であるが、個人が生活する環境としての身近な人間関係や地域、社会にも当てはめて考えていくことができる。弾性のある関係とは、悩みを声に出すことができる、あたたかく懐の深い社会でもある。

●恋愛・デートDV●

一次データからは、誰もが恋愛の話をする（強い関心を持っている）、その悩みは家族ではなく友人に相談する。本や漫画、音楽の歌詞などに大きな影響を受けている。デートDVの認知度は低くはないが、「自分だけは絶対にDVはしない」「自分は大丈夫」という考えは危険で、大丈夫と思っている人ほど気づくことができない。「束縛」をデートDVだと思わない人もいる。

文献研究からは、男は「強くありたい、守らなければ…」、女は「か弱い、控えめで守られる存在」というジェンダー・バイアスが根底にあり、それがデートDVを引き起こしている。そこで、男らしさ、女らしさを求めすぎず、ジェンダーフリーの感覚をお互いに養っていくことが重要となる。若い時代からお互いの対等な、カッコいい男らしさ、女らしさを追求していくことで、良い関係で付き合っていける。ジェンダーを意識できるワークショップなども有効になる。

●いじめ・差別●

いじめで自殺した鹿川君事件（中学2年生、1986年当時）から考えた。遺書が残っており、いじめた側、見て見ぬふりをしてきた側のその後の証言が記録されている。いじめる側にも常に不安な気持ちがある。思春期にありがちな自意識過剰の時期に、自分の理想像と自分自身の実像とのギャップが大きく、危ない状況がある。クラスの中に閉鎖的なグループがどんどんできて、それがまたストレスになった。不安だからいっしょに行動するという。

子どもと大人との境目である中学の時代がもっとも危険性が高いように感じる。そこではお互いの付き合い方として「友だち力」が重要になる。友だち力には、不安だから「つるむ」、「友だちいないと不安だ症候群」（齋藤孝）と名付けられるような不安感覚から自由になれることも重要である。友だち力を高めるためには、環境の影響も大きい。雰囲気づくりが必要で、そのために「偏愛マップ」などのお互いに話すことができるワークショップや「アンゲーム」などのコミュニケーションゲームなども助けになる。また、見ている側（第三者）がいじめや差別を助長することもあるので、弱い側への連帯意識を養っていくことが重要と考える。

●インターネット●

インターネットは今日、生活の中でなくてはならない基礎的なインフラになっている。特に若者（10代、20代）の利用度は、パソコンやスマホを含めると200%を超える。とりわけ、ツイッターやLINEなどのSNS、動画共有サイトが大きなウェイトを占めるようになってきている。

ネット依存が問題だと指摘されているが、日常生活や人間関係にも影響を及ぼすこともある。中国・韓国・アメリカなどの方が深刻な状況がある。

ネット依存は同時に「コミュニケーション依存」「コミュニティ依存」でもある。「つながっていないと不安だ」症候群ともいえる。しかし本人は依存しているという自覚がない。さまざまな要因が考えられるが、最近では「コミュニケーション能力」が重視され強調されすぎる社会の圧力もある。「コミュカ」を持たない人間は「コミュ障」と言われたりもする。居場所を求める欲求、「承認欲求」が肥大化していることもあるだろう。

ただ、ネットをマイナスとばかり捉えないで、「いいね！」やコメントがもらえるなど、適度に承認欲求を満たしてくれるメディアでもあり、つるむ必要のないゆるい「コミュニティ」をつくり、「キャラ」を使いわけて所属し、多面的なアイデンティティをもつこともできる。ネットの良い点を活用しながら、上手に使いこなす方法を提案していく必要がある。

●ストレス●

予備調査によると、ほとんどの若者はストレスを感じている。家族、友人、バイト、サークル、就職など、詳細には調査結果を待たなければならないが、家族、特に親との関係、友だちの存在は大きく、友だちにも言えない不安や悩みを抱えるときに、ストレスが高まる。ストレスが蓄積されることは病や死に至るリスクをもはらんでいる。

ストレス解消法を聞くと、さまざまな方法があがる。人によって異なることは当然ではあるが、解消法のリストを持っておいて、取り出せるようにしておくことは必要だろう。ストレスを抱えているときのアドバイス、言われた言葉、言われたくない言葉があることも、友人の相談にのる時の必要な態度、姿勢に役立つだろう。

ストレスとは、「生命を維持するための防御反応」と定義し、「免疫」と同じようにストレスを健全な反応と考え、「免疫不全」にならないように意識化することが必要となる。「向上心」につながる、良い意味のストレスもあるという意見があった。

ストレスは「生きている限りなくならない」「かならずついてくる」と考え、それが爆発したり、キレたりすることで何かを損なわないようコントロールできるようにするために、「よいストレス」と「悪いストレス」「ほどよいストレス」を意識化し、ストレスに対処する方法（ストレス・コーピング）を考えて提案していきたい。

●アイデンティティ●

これまでのテーマは相互に関係しあい、依存しあっている。その根底にある自己に対する概念として「アイデンティティ」を取り上げた。アイデンティティは、心理学的には「自己同一性」、社会学的には「存在証明」というタームが使用される。ゼミ研究においては、自分らしさ、個性という意味を含んで、自己の「存在意義」ととらえ、その確立とそれがどのように他者から見られるか（承認されるか）に躍起になるのが人間であり、とりわけ青年期＝「若者」がその争いや抗いに必死にならざるを得ない、だからこそ危うい時期であると考えた。

中学・高校・大学と思春期の悩みの多くはアイデンティティに由来するといってもいい。自分だけの個性を發揮したい気持ちと、学校の規則や社会のルールへの反発や反抗心、比較される中で、自分の存在を否定されたり、尊重できない劣等感にさいなまれることも少なくない。そこには常に強い「承認欲求」がある。経験として「病んでる」アピールを自らしたり、友だちが発信してくることがある。「病んでる」ことを知ってほしい、かまってほしい、存在を認めてほしいというアピールから自由になることは難しい。

アイデンティティの要素を「所属」「能力」「関係」の三つ（石川准）に整理してみると、やはり上位に位置づけられる「関係」がアイデンティティにとっても大きなウェイトを占める。大学に入ると自由度が高まるというが、人とつながっていることの切実性と承認欲求（認めてもらいたい）の病から自由になる方法を考えていく必要がある。

(3) 若者の生活と意識に関する調査の実施

上記の当事者研究を深めていくために、またデータからも説明していくための、静岡県内の高校生、大学生を対象とした「若者の生活と意識に関する調査」を実施した（2015年1月）。高校生約100、大学生については約500の調査票（計600）の回収を行った。集計・分析については、2月の報告会には結果を発表し、データに基づいた説得力のある提案ができるようにしたい。

4 地域への提言・地域からの評価

課題の提起をいただいた静岡市こころの健康センターとは、10月と1月の2回にわたって意見交換会を開催し、ワークショップ的に意見を交換するなかで、若者自身が、日常生活の中で、いろいろなリスクに遭遇しながらも、またストレスを抱えながらも何かが支えになって生きていくことができるような方法を若者自身が考えていくというコンセプトを共有することができた。

地域に向けての実践はまだ行っていないが、ゴールとしてこの共同研究の成果を「ハンドブック」という形で発行したいと考えている。若者が折りにふれて手に取って、生きにくさを感じた時の解決策のヒントを見つけてもらえる小冊子にできればと考えている。

コンセプトは、「つらくても生きていくための、ひみつ道具が見つかるボクノート」である。

「ボクノート」は、スキマスイッチの『ドラえもん のび太の恐竜 2006』の主題歌。ボクノートは「僕の音」でもあるという。ドラえもん、ひみつ道具のような響きにしたかったのだそうだ。

♪ 今僕が紡いでいく言葉のカケラ 一つずつ折り重なって詩(うた)になる
キレイじゃなくなっても 少しずつだっていいんだ
ありのままの僕を君に届けたいんだ 探していたものは、目の前にあった♪

そんなふうに、僕たちの音を探して届けていきたい。

浜松市天竜区龍山地区における地域づくりの方策の研究

指導教員：静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 講師：船戸修一

参加学生：石倉達也、中込恭輔、山下貴帆（本学科3年生）

堀絵莉華、山本尚徳（本学科2年生）

1. はじめに

「地域（農村）社会学」を専門とする船戸ゼミでは、3年生のゼミ生3人とともに、2014年5月から2015年2月まで（8月は除く）週1回の頻度で浜松市天竜区龍山町（旧・龍山村）の集落に赴き、自治会長をはじめ自治会役員、地元女性、町外からの移住者、買い物困難者への移動販売を行っている商店主など、様々な地域住民の方から龍山の生活や暮らしの現状についての聞き取り調査を行った。また、この調査は、龍山地域のイベントや祭りにも、教員と学生5人で参加するという「参与観察」に基づいたフィールドワークでもあった。このように地元の集落と密接な関係性を構築し、地域住民の「信頼」を得たうえで中山間地域の集落の調査を進めるところに、ゼミ活動の特徴がある。さらに2014年12月下旬には、龍山地域における349全世帯を対象にしたアンケートを配布し、地域住民の意識や日常生活の状況についての調査を行った。一方、すでに龍山から転居された、現在20代から70代までの龍山出身者にも、アンケートを配布し、現在の龍山とのかかわりや意識についても調査を行った。

このような調査による結果分析を踏まえ、2015年2月27日（金）午後7時～午後9時30分で現地（龍山森林文化会館）において、浜松市の行政職員も招き、地域住民を対象にした報告会を開催する予定である（詳しい発表内容については最後のページを参照）。この報告会では、これまでの調査結果に基づき、龍山地域の現状を分析するだけでなく、それを踏まえて今後の龍山の地域づくりへの提言も行う。そのうえでアンケート結果や報告会での発表内容をまとめた調査報告書を3月に完成させる予定である。この報告書は、龍山地域住民全戸に配布するだけでなく、浜松市市民協働・地域政策課や天竜区・区振興課ならびに浜松市龍山協働センターにも配布し、今後の浜松市における中山間地域の政策立案や地域づくりに活かしてもらおう。このように調査によって得られた知見を地域にフィードバックすることを試みるところにも、ゼミ活動の特徴がある。ゼミ生の中には、将来、浜松市職員への就職を希望している学生もおり、こうしたゼミ活動は学生の将来設計に向けた実践的教育手法としても役立つと思われる。

以上のように船戸ゼミの活動は、「地域（農村）社会学」という専門性やフィールドワークという調査手法を活かしつつ、調査結果を地域住民や行政（浜松市）に還元するという「大学・学生連携型の地域づくり」を目指すとともに、静岡県（浜松市）の中山間地域を支える人材育成も企図している。

2. 本研究の意義と目的

現在の浜松市は、2005年7月に12市町村による広域合併をもって誕生した。しかし、

その合併市町村の中には、多くの山間部地域を抱える自治体も含まれていた。その結果、浜松市は、中山間地域を抱える「政令指定都市」となった。現在、浜松市の中山間地域は、天竜区に集中し、高齢化・一次産業の後継者不足・限界集落など深刻な過疎問題に直面している。しかし、浜松市のような大都市と合併した中山間地域では、人口数や人口密度などの地域的差違や土地の起伏や標高などの地理的差違が無視されやすく、中山間地域の独自の問題が顕在化しにくい。ここに政令指定都市における中山間地域を研究する意義がある。

そこで本研究では、その具体例として天竜区龍山地域をとりあげ、浜松市の中山間地域の現状を明らかにし、今後の地域づくりの方策を3つの論点から考察する。

3. 龍山における集落の現状と他出子の意識

これまで龍山地域は、秋葉ダムの建設・峰之沢鉱山・営林署による大規模林業など近代資本集中型の地域づくりを推進してきた。このような近代資本集中による開発を導入したため、人口の急激な増加とその後の大型資本による開発の撤退による大幅な人口減少を経験してきた。そして昨年度には、龍山第一小学校が閉校し、この地域から小中学校が消滅した。今後、より一層の人口減少が予想され、過疎問題が深刻化する可能性が高い。

しかし一方で、龍山地域では、地元出身の別居子（他出子）が頻繁に実家に戻り、あるいは近隣住民同士で生活をサポートしていることが聞き取り調査やアンケート調査から分かった。そのため、仮に独居世帯であっても、この他出子からのサポートを受け続けることができれば、すぐには集落が消滅しない可能性がある。よって、今後は他出子が頻繁に出身集落に戻り、家族だけでなく、集落の共同作業や祭りに積極的に参加することによって集落の維持につなげることが求められる。

4. 龍山における女性たちの活動がもたらす効果

昨今、地元の資源を活用して農山村でビジネスを立ち上げる農村女性の起業件数が増えている。その起業は、彼女たちの経済的自立や地域づくりの担い手になる可能性を秘めている。そこで現在、龍山で活動をしている2つの農産物加工グループについて比較分析を行った。その一つは、2002年から始まった女性の加工グループ（現在15名のメンバー）で、地元産のブルーベリーなどの農産物の加工品（ジャム・味噌・漬け物など）を製造・販売している。また食事処も経営し、ソバやうどんなどを提供し、弁当も作っている。もう一つのグループは、2008年から始まった女性の加工グループ（現在5名のメンバー）で、弁当や総菜を製造・販売している。これら2つのグループは、ともに家族の協力やサポートによって活動が成り立っていた。また定年もないため、70歳以上の女性でも年金プラスの収入になり、農山村で暮らしていく生き甲斐を創出していた。ただ前者のグループは、行政の補助を得つつ、施設を整備した経緯がある。よって、このような金銭的なサポートが縮小していった場合、自立的な経営が難しくなる可能性がある。また後者のグループは、代表者が様々な役割を兼担し、またメンバー数が少ないことから、注文を断っている状況である。そのため両者とも後継者という問題を抱えていることは否定できない。しかし、今後の龍山の地域づくりにおいて農村女性が果たす役割は大きい。

5. 移住者が龍山にもたらす効果

昨今、農山村に移り住みたいと考える都市住民が増えている。このような移住者が地域社会の資源を発見し、新たな価値を創造する可能性を秘めている。本研究では、龍山地域に移り住んだ2人を取りあげ、それぞれの特徴と地域社会とのかかわりを明らかにした。移住して10年目の前者の方は、一人住まいをしており、自治会費を支払っているが、集落の共同作業は参加していなかった。今後、集落を支える人間が減少していくことを考えると、移住者も地域社会の担い手として積極的にかかわることが求められる。一方、移住して15年目の後者の方は、家族4人で居住し、自治会長を引き受けるなど積極的に地域の活動に取り組み、地域との関わりを深めている。しかし、移住者が集落の中心的な担い手になることによって自治会の集まりや共同作業に参加する地元住民が少なくなっているという話を聞いた。このように移住者は、もともと住んでいた地元住民や共同作業への関わりに対して積極的・消極的であれ、両者の相互理解や友好的な関係性を構築することが求められる。今後の龍山の地域づくりにおいて移住者が果たす役割は大きい。

6. おわりに

以上のようなゼミ活動を通じて、ゼミ学生が実際に浜松の中山間地域や農山村集落に足を運び、地元の人たちと交流しつつ、地域の暮らしや過疎問題について理解を深めることができた。このような実体験に基づく知見は、学生にとって刺激となり、大いに勉強になるものであった。大学の講義では現実味を感じない話しも、実際の現場に赴き、現地の方から話を聞くと、リアリティのある問題として捉えられる。また聞き取り調査では、逆に地元住民が学生に龍山の地域づくりへの方向性を質問することもあり、その緊張感が学生に地域への自主的な学習態度を生み出した。さらに、調査報告会を通じて自分たちが調査・分析したことを聞き取り調査でお世話になった方々の前で発表しなければならぬため、地域とかかわることへの真剣な態度も形成させた。一方、毎週のように龍山に通い、地元行事への参加を通じて地域を学ぶ姿勢は、地元住民からも大いに歓迎された。学生は自らの提言を地域で実現できるよう、今後も引き続き地域と関わることを求められる。

以上のように学生と地元住民の協働によって成り立つフィールドワークに基づくゼミ活動は、教育活動としてだけでなく、新たな地域づくりの手法としても有効であろう。



龍山の暮らしの現状と今後の地域づくり

静岡文化芸術大学・文化政策学部・文化政策学科

船戸ゼミ「龍山調査・現地報告会」

船戸ゼミでは、1年間をかけて、浜松市の中山間地域である、天竜区龍山町(旧・龍山村)の調査をしてきました。

そもそも、この地域は、浜松市と合併するまで、県内に残る「最後の村」でした。かつては秋葉ダムの建設や峰之沢鉱山の開発などで、ピーク時の人口は1万3千人を超えていましたが、平成26年12月1日時点の人口は750人です。昨年度には、龍山第一小学校が閉校し、町内からは小中学校がなくなりました。今後、さらなる人口減少によって過疎問題が深刻化することが予想されます。

このような地域を船戸ゼミでは、龍山にある34全集落を訪ね歩きつつ、そこにお住まいの方々への聞き取りを行い、集落の現状や課題について調べてきました。また、龍山のイベントやお祭りに参加することを通して現地の暮らしや生活についてもフィールドワークを行ってきました。

さらに、龍山にお住まいの349全世帯にアンケートを配布し、現地の人たちの意識調査を行いました。また、すでに龍山から転居された、現在20代から70代までの龍山出身者にも、アンケートを配布し、ふるさとである龍山への思いや現在の龍山とのかかわりについても調査をしました。

そこで、これまでの調査結果を踏まえ、龍山居住者の現在の「家族構成」、龍山から転出した「他出子」の意識、龍山の女性グループ活動、龍山外から来る「移住者」、買い物困難者を対象にした「移動販売」、人口減少から増加する「空き屋」というテーマから、今後の龍山の地域づくりについての考察や提案を以下のような現地報告会で発表します。

龍山以外にお住まいの方々もご参加になれますので、ご興味のある方は、ぜひ、ご来場ください。

【日時】

平成27年2月27日(金) 午後7時～午後9時30分

【場所】

龍山森林文化会館(浜松市天竜区龍山町瀬尻982-2)

【報告内容】

- | | | |
|------------------------|-----------|------|
| ① ふるさとに通う子どもたちと集落のかかわり | 文化政策学科3年 | 石倉達也 |
| ② ふるさとを出た子どもたちの意識 | 文化政策学科2年 | 堀絵莉華 |
| ③ 農村女性たちによる地域活動の意義と課題 | 文化政策学科3年 | 中込恭輔 |
| ④ 移住者の意識と定住促進のための課題 | 文化政策学科3年 | 山下貴帆 |
| ⑤ 買い物支援の現状と将来像 | 文化政策学科2年 | 山本尚徳 |
| ⑥ 空き屋の現状とその利活用の課題 | 文化政策学科・講師 | 船戸修一 |

【料金】

無料

【申込み】

不要

【お問い合わせ】

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 船戸修一

Tel/Fax: 053-457-6170

E-mail: s-funa@suac.ac.jp

浜松市龍山協働センター(担当:高村)

Tel: 053-966-2111

「すその健康増進プラン」の中間評価と計画書の見直し

常葉大学 経営学部 村本研究室

指導教員：講師 村本名史

参加学生：河野 咲、生川 衛、松下幸乃、土佐谷良孝、稲葉知也

連 携：常葉大学 健康科学部 栗田研究室

要約

「すその健康増進プラン」の中間評価および計画書の見直しを目指し、裾野市の①20歳以上の市民、②幼稚園・保育園年長児保護者、③小学校5年生・中学校2年生を対象にアンケート調査を実施し、分析した。その結果、裾野市では食生活の問題改善への関心は女性で高く、精神的な疲労やストレスの軽減、定期的な歯科健診の受診、男性喫煙者の減少、若年者の運動習慣の獲得に関する取り組みが市民の健康増進にとって有用であることが推察された。

研究の目的

「すその健康増進プラン」は平成23年度に策定され、5年後の平成27年度に目標の達成状況の評価と社会情勢の変化などに応じて見直しが計画されている。この見直しでは、裾野市における効果的な健康づくり事業のあり方について、裾野市に居住する様々な年齢層の要望や状況に応じて、プランの体系やプラン推進のための役割を含めて検討されなければならない。そこで本研究では、「すその健康増進プラン」の中間評価および計画書の見直しを実施するためのアンケート調査を実施し、その分析結果から今後の健康増進計画に有用な基礎資料を得ることを目的とした。

研究の内容

裾野市民を対象として食育および生活習慣等に関するアンケート調査を実施し、居住地区、性別、年齢等の区分による分析を行った。

アンケート調査方法

対象：

①裾野市の各地区（東、西、深良、富岡、須山）における20歳以上の人口割合、年代、性別を調整して無作為に抽出（層化無作為抽出）した1,000名（以下、**成人**）

②裾野市内の幼稚園および保育園14園の年長児保護者である480名（以下、**幼保**）

③裾野市内の小学校9校（東、西、深良、富岡第一、富岡第二、須山、向田、千福が丘、南）の5年生から各1クラスを抽出した264名

裾野市内の中学校5校（東、西、深良、富岡、須山）の2年生から各1クラスを抽出した133名（以下、**小中**）

※クラスの抽出は各校に依頼

配布・回収：

アンケート調査対象施設である各園および学校へ依頼し、郵送等によって配布・回収した。

調査期間：

- ①成人：平成 26 年 9 月 19 日～9 月 30 日
- ②幼保：平成 26 年 9 月 3 日～9 月 30 日
- ③小中：平成 26 年 9 月 3 日～9 月 30 日

アンケート調査用紙の質問内容：

- ①成人：対象者の属性、健康、食生活、食育、食文化、地産地消、食の安全、運動、アルコール、喫煙、ストレス、歯科保健等に関する全 57 問
- ②幼保：対象者の属性、心配なことや困っていること、起床・就寝時刻、食事、遊び、歯磨き、相談相手、育児、喫煙等に関する全 15 問
- ③小中：対象者の属性、起床・就寝時刻、余暇、健康、疲労・倦怠感、排泄、食事、肥瘦、ダイエット等に関する全 18 問

分析：

統計処理ソフト SPSS を用いて居住地区、性別、年齢等についてカイ 2 乗検定を実施した。なお、統計的有意水準は危険率 5%未満とした。

アンケート調査結果

- ①成人：有効回収数 517 人、有効回収率 51.7%（平成 26 年 12 月 11 日現在）
居住地区：東 143 人、西 141 人、深良 59 人、富岡 122 人、須山 46 人
性別：男性 231 人、女性 278 人
年齢：20 歳代 42 人、30 歳代 55 人、40 歳代 71 人、50 歳代 86 人、60 歳代 129 人、70 歳代以上 132 人
- ②幼保：有効回収数 480 人（平成 26 年 12 月 11 日現在）
アンケート記入者：母親 461 人、父親 11 人、祖母 6 人、無回答 2 人
園児の年齢：5 歳 243 人、6 歳 229 人、無回答 8 人
- ③小中：小学校、有効回収数 264 人（平成 26 年 12 月 11 日現在）
性別：男子 134 人、女子 130 人
中学校、有効回収数 133 人（平成 26 年 12 月 11 日現在）
性別：男子 65 人、女子 66 人、無回答 2 人

分析結果：

成人を対象とした 1 変量比較結果

問 1 自分の健康状態についてどのように感じていますか。

健康である	まあまあ健康である	ふつう	あまり健康ではない	健康ではない	無回答
102	202	125	53	22	13

($p < 0.001$)

健康と感じている市民が多数であった。

問 3 適正体重に近づくように体重コントロールを実践していますか。

はい	いいえ	無回答
219	278	20

($p < 0.01$)

体重をコントロールしている市民が多数であった。

問 8-2 食生活の問題を改善したいと思っっていますか。

	はい	いい	無 回 答
	152	24	32

(p < 0.001)

食生活の問題を改善したいと思っっている市民が多数であった。

問 42 最近 1 ヶ月間に精神的な疲労やストレスを感じましたか。

じいつも感	ときどき感	あまりない	感じていない
101	253	113	43

(p < 0.001)

精神的な疲労やストレスをとときどき感じている市民が多数であった。

問 48 治療以外で 1 年に 1 回以上定期的な歯の健診を受けていますか。

受けて	受けていない	無回答
182	321	14

(p < 0.001)

定期的な歯科健診を受けていない市民が多数であった。

問 56-1 あなたのお住まいの地域の人々は、お互いに助け合っっていると感じますか。

強く思う	そう思う	どちらか	どちらか	そう思わ	まったく思わ	無回答
55	267	149	19	9	18	

(p < 0.001)

地域の人々はお互いに助け合っっていると感じる市民が多数であったが、どちらともいえない市民が 149 人 (28.8%) 存在した。

成人を対象とした男女の比較

問 8-2 食生活の問題を改善したいと思っっていますか。

	はい	いい
男性	58	15
女性	92	9

(p < 0.05)

男性に比べ、女性が多く食生活の問題を改善したいと思っっていた。

問 20 「食育」に関心がありますか。

	関心がある	かど	かど	関心がない	わから
男性	31	85	65	34	14
女性	69	138	46	8	12

(p < 0.001)

男性に比べ、女性が食育への関心が高かった。

問 38 お酒を飲みますか。

	毎日飲む	週に 5 日	週に 3 日	たまに飲む	飲まない
男性	55	23	18	58	75
女性	12	12	14	59	178

(p < 0.001)

女性に比べ、男性の飲酒頻度が高かった。

問 39 たばこを吸いますか。

	吸 い わ な	ては いい な	たが 吸っ 今	っ て い 前 吸	る っ て い 現 在 吸
男性	125			52	52
女性	254			8	14

($p < 0.001$)

女性に比べ、男性の喫煙者が多かった。

成人を対象とした居住地区の比較

問 9 ご自分の適正体重を維持できる食事の量を知っていますか。

	はい	いい えい
東地区	65	70
西地区	48	85
深良地区	26	31
富岡地区	50	69
須山地区	10	34

($p < 0.05$)

須山地区において、適正体重維持に関する食事量の認知度が低かった(77.3%)。

成人を対象とした年代の比較

問 35 運動習慣についてお聞きします。次のどれにあてはまりますか。($p < 0.001$)

	定期的な運動 を6ヶ月以上 している	定期的な運動 を が、まだ6ヶ月 たっていない	定期的な運動 を を ようと思う	これから1ヶ 月以内に定期 的な運動をし ようと思う	これから1ヶ 月以内に定期 的な運動をし ようと思う	運動を行って いないが、これ から始めよう と思っている	運動をしてい ないし、これか ら始める気 もない
20歳代	8	2	1	18	13		
30歳代	14	4	2	19	16		
40歳代	15	4	1	37	14		
50歳代	30	1	3	36	16		
60歳代	62	12	6	33	14		
70歳代以上	66	9	5	25	18		

若年者に比べ、高齢者が運動習慣を獲得している傾向が認められた。

地域への提言

アンケート結果より、食生活の問題を改善したいという要望があり、その関心は女性で高かった。また、精神的な疲労やストレスを感じており、定期的な歯科健診を受けていない市民が多数であった。さらに、喫煙者は男性が多く、若年者が運動習慣を有していない傾向が認められた。「すその健康増進プラン」の基本理念である「誰もが健康で、共に助けあうまち すその」を実現するために、以上の要望や状況に応じた様々な取り組みが必要である。

今後の計画

裾野市民を対象として実施したアンケート結果についてさらなる分析を進めると共に、「すその健康増進プラン」の後半5年間について、裾野市に居住する様々な年齢層の要望や状況に応じて、その体系(ライフステージと健康づくり分野の関係)および推進のための役割(市民・家庭、教育機関等、企業・事業所、地域・健康関連団体、市・行政機関)を含めて検討し、具体的な健康づくり事業のあり方を提案する。

地域の伝承文化に関する研究——しずおか昔話の系譜——

静岡英和学院大学 人間社会学部 古典文学ゼミ

指導教員：准教授 蔡佩青

参加学生：安藤昌平、長田まなみ、平岡健太郎

松浦和幸、松島夕佳

一、研究概要と目的

本研究の目的は、静岡県内に伝わる昔話や伝承を調査し、それを再話する形で継承していくことである。調査の対象をゼミ生の出身地や関心を持つ地域に設定し、地元の方々と積極的に関わることによって、地域に対する理解と関心を高め、地域との交流をも深めていく。また、これまで伝わってきた伝承文化を、大学生の視点から捉えなおして再話し、自ら受け継ぐことで、地元貢献を具現化する。

学生たちは各自の研究課題について、アンケート調査やインタビュー調査、文献調査などを通して、課題内容を分析・整理してレポートにまとめる。そして、各調査地にまつわる伝説を選び出し、そこに各自の調査成果を取り入れ、時代に応じた若者向けの内容として再話する。さらに、その再話した伝承を、大学の後輩や地元の方々の前で朗読する、といういわゆる口承の方法で語り継いでいく。

二、研究内容と成果

各研究課題の調査概要は次の通りである。

1. 静岡県における西行関連文献の調査（蔡）
2. 沼津市の門池公園に伝わる竜伝説の伝承過程（安藤）
3. 焼津神社の例大祭荒祭に関する意識調査（長田）
4. 県内三大峠に伝わる伝承の発生とその地理的背景（平岡）
5. 小夜中山夜泣石伝説に関する文献異同調査（松島）
6. 富士市に伝わるかぐや姫の物語と富士山との関係（松浦）

紙幅の制限により、すべての調査内容を具体的に示すことはできないが、その中で地域との連携が深い課題の調査成果を記しておく。その他の課題については、調査成果を発表する際に使用したパネルの内容を文末に掲げる。

1. 静岡県における西行伝承（蔡）

平安末期の大歌人西行（1118-1190）は、生涯少なくとも二度この静岡の地を横断したことが確認されている。西行の旅は、彼を強く慕った後世の人々によって説話化・伝説化されている。十三世紀中頃に創られた『西行物語』がその最初の完結した作品である。

『西行物語』には、天竜川で武士に打たれる事件が起きた際、悲しみを耐えられなかった同行の法師を都に追い返した、僧侶としての毅然たる西行像が描かれている。また、旅

の帰途に岡部宿で親友・西住の死に遭遇する、つらい死別に直面して涙を押さえ切れなかった人間西行も描かれている。西行の持つこの二面性は、江戸末期にその物語の発生舞台である岡部宿において、見事に融合された。すなわち、天竜川の難で登場した同行の法師と、岡部宿で客死した西住が同一視され、さらに西住を主人公として新たな伝説が創り上げられたのである。

岡部だけではなく、静岡県内では東は伊豆半島から、西は愛知県と隣接する引佐郡まで、実に多種多様な西行伝説が伝えられている。中でも、清水区宮加三に伝わる「西行筆捨池」は、雄大な富士山を眼前に西行が、歌人としての自負が屈され詠歌のための筆を池に投げ捨てたという、これまでの西行にまつわる伝承とは異なるモチーフが用いられている。また、貴重な資料として、伊東市にある城ヶ崎文化資料館にのみ伝わる「むかし西行の坊さんが」という手毬唄の譜面がある。聞き取り調査によると、この手毬唄は伝承者が残した壊れかけの音声テープから文字化したものだが、現在は唄える人も唄う人もいないという。

民俗学者柳田国男は、伝説は植物のようなもので、ある土地に根を生やして常に成長していくと述べている。静岡における西行伝承は、まさに植物のようにここに根ざして確実に成長している。

2. 沼津門池の竜伝説（安藤）

沼津市にある門池公園には灌漑用の溜池があり、そこには、不注意で無くしてしまった玉を捜しに、やむを得ず雄の竜と離れて天から降りた雌の竜が千年も住んでいたという。伝説の終盤に語られた、雌の竜はようやく玉を見つけて雨と雲を呼んで天に帰ったという結末にちなんで、昭和三十年代頃まで雨乞いの儀式が行われていた。当時、雨乞いを行う際に、藁で模した雌雄の竜を、雄は松に飾り、雌は門池に浮かべていた。

しかし、度重なる工事によって門池の貯水量が増えたことと、田圃が減少したことにより、早魃の影響が縮小して雨乞いが次第に廃れていった。と同時に、雨乞いのための竜とそれにまつわる伝説も次第に忘れ去られていく。

幸いなことに、門池の南にある門池小学校では、この竜伝説を取り上げて生徒に語り継いでいる。学校の教員に対するインタビュー調査によると、毎年のことではないが、図書館司書から竜伝説を絵にしたパネルの前で物語を聞かせているそうだ。このように、地元の子どもたちは、門池の歴史を貫く村民たちの水に対する祈願の心持ちを背景に、今では失われた民俗を伝える役割を担っている。

伝説や世間話の生成力は強い。それを伝える伝承者たちがいないという問題はあるが、大きく取り上げられないだけで未だに燻っているものがあることを、「門池の竜」を以って知ることができるだろう。



* 沼津市明治史料館が再現した藁の竜。

3. 焼津神社の荒祭と日本武尊（長田）

焼津神社で毎年八月中旬に行われる荒祭は「東海一の荒祭」と称されている。しかし、その祭りの名称には思いがけない言葉の謎がかけられている。荒祭は、実は「荒くない」のである。

本研究は、焼津神社の了承を得て荒祭が開催される際に、地元の住民、主に十代～二十代を対象に行ったアンケート調査を分析したものである。結論としては、焼津の住民たちの荒祭への理解度が決して高くないことがわかった。53名のアンケート回答者の中、毎年祭りを見に来ている人が41人もいる。荒祭りの「荒い」という言葉の意味を知っていると答えた人は18人で34%を占めているが、そのうち「荒い」とは「素朴で純粋な気持で神様に向き合う」と正答したのは2人（3.8%）しかいなかった。つまり、知っているとして「荒っぽい」など間違った意味を答えた人が30.2%もいるので、荒祭りの正しい意味を知らない人が96.2%にも達しているのである。また、焼津神社に祀られている神様が日本武尊だと認識している人は、56%を占めていて、正答できなかった人とほぼ同じ割合である。

この調査を通して、地元の住民たちですら荒祭や日本武尊についてあまり理解ができていないことがわかる。この祭りは大切な神事であり、誇るべき伝統文化である。それを次世代へと語り継いでいくために、祭りに直接参加する人も、祭りを見学する人も、祭りの本質をより理解する必要があるのではないかと思う。本調査の結果を焼津神社に伝えて、今後活かしてもらいたい。

* アンケート調査、問6「荒祭りの「荒い」の意味はご存知ですか」。

	10代 高校生以下	10代～20代 大学生	20代 社会人	30代	40代以上	合計
天照大御神			2	1		3
日本武尊（正答）	9	2	6	8	4	29
須佐之男命						0
木花咲耶姫		1				1
知らない	10	3	5	2		20

4. 峠伝承の発生



5. 夜泣石伝説のモチーフ



6. かぐや姫と富士山



三、成果発表と評価

研究課題を調査する際に、各伝承地とその関連地域の自治体、団体、個人に様々な協力を得た。とくに、静岡童話創作グループ「かしの木」に所属している大石美代子様と草谷桂子様に伝承再話の執筆指導を、元リビング新聞社朗読教室の中村宏様に伝承の朗読指導をいただいたおかげで、伝承の再生という本研究の最大の目標を果たすことができた。また、藤枝市議会議員大石信生先生、藤枝市市民文化部街道・文化課の御尽力により、岡部宿大旅籠柏屋歴史資料館で成果パネル展示会と調査報告&朗読発表会を開催する運びとなった。

それに先立って、1月下旬に校内で研究成果発表会と朗読発表会を開いた。学生一人ひとりが半年以上の時間をかけて、地域を歩き回ったり、図書館や資料館で調べたりした調査結果について、パネル発表を行い、その調査結果も含めて執筆した伝承の再話を後輩たちの前で朗読して語り継いだ。

また、実地調査において、意見交換や交流をした地域の方々からは「質問されて初めて気づいたこともあった」や「地元のことをかえって教えてもらった」、「知っているのとは違う内容の昔話も面白かった」などの声が聞こえた。同様な思いは、実際に地元を見て伝承に触れたゼミ生たちの心中でも感じていることだろう。



* 荒祭アンケート調査、焼津市
(2014年8月13日)



* 伝承再話指導、静岡英和学院大学
(2014年11月11日) 大石美代子講師



* 研究成果発表会、静岡英和学院大学
(2015年1月20日)



* 調査成果パネル展示、柏屋歴史資料館
(2015年1月28日～2月8日)

〔連携先〕藤枝市、岡部宿大旅籠柏屋歴史資料館、伊東市城ヶ崎文化資料館、静岡童話創作グループ「かしの木」、中村宏朗読教室、焼津市、焼津神社、荒祭二区組祭典委員会、沼津市門池小学校、沼津市歴史民俗資料館。

北欧発「デモクラシー・カフェ」の静岡市における実践：
若者による、市民と政治家の対話の場の創出のもたらす効果について

静岡県立大学 国際関係学部津富ゼミ
指導教員:教授 津富宏
参加学生:加生 太郎 (責任者)、岡本 智之

研究の目的

スウェーデン・クリスティネハム市で実施されている、市民と政治家がまちかどで直接対話する「デモクラシー・カフェ」を、若者の手で、ここ静岡市に創り出すことにより、市民の地域形成者としての意識の変化、さらには、市民の意見の政治に反映するための具体的な工夫の創出をもたらしするための実証実験を行う。とりわけ、若者の参加を促し、次代を担う若者の地域形成者としての意識を高める。

研究の内容

若者を含めた一般市民と、市議会議員や県議会議員などの政治家が集まり対話を行う「デモクラシー・カフェ」を、平成26年10月から平成27年1月までの4か月間で合計5回行った。実施概要は以下のとおりである。

第1回：2014年10月4日 会場：静岡市駿府公園 参加者数：19名

第2回：2014年10月18日 会場：静岡市スマイル公園 参加者数：15名

第3回：2014年11月8日 会場：浜松市野口公園 参加者数：10名

第4回：2014年11月15日 会場：静岡市 Miraie リアンコミュニティホール七間町
参加者数：9名

第5回：2015年1月17日 会場：静岡市 NPO センター 参加者数：12名

各回では開始後30分は政治家を除いた参加者のみで意見交換を行い、その後30分間程度で政治家も交えた意見交換を行った。

なお、当初の予定では合計8回の開催を計画していたが、2014年12月に選挙が行われたことを受け、デモクラシー・カフェが選挙の広報の場になることを防ぎ、また政治的な中立性を保つために選挙期間中の開催を見送った。そのため、開催回数は5回となった。

研究の成果

各回が終了した後のアンケートを基に考えると、以下のような成果があったと考えられる。

1) 市民と政治家の対等な関係の下での新しい対話の場の創造

これまで一般市民が政治家と直接会話をする機会は多くなく、参加者の中にもデモクラ

シー・カフェに参加するまでは政治家と話したことがないという人が多くいた。その状況に対して、デモクラシー・カフェは政治家と一般市民が会話をする機会を設けることができる。加えて、同じ机や菓子などを囲み飲食を行いながら対話を行うことから気軽に話すことができる雰囲気が作られ、政治家と一般市民が講演会などのような非対等な関係ではなく、対等な関係の下で対話をすることが可能になる。

2) 政治や社会について話すきっかけの提供

普段の生活の中で政治について考える機会は多くなく、それを友人や家族と話すという人はさらに少ないと予想される。これに対して、デモクラシー・カフェの参加者からは、普段考えることのない政治や社会について考える機会になったという声が多く聞かれた。また、実際に政治の現場に立っている政治家と政治の話をする中で、より具体的に現実的な話を聞き、対話を行うことが可能になっていた。

また、デモクラシー・カフェを行っていく中での課題も以下のように発見された。

1) 広い一般市民の参加の難しさ

今回、合計5回行われたデモクラシー・カフェでは一度参加した人が次回以降に参加した例が多くあり高い満足度が見受けられた反面、新規の参加者数は伸び悩む結果となった。また、参加した一般市民のほとんどは何らかの社会貢献活動に関わっている人であった。このことから、社会貢献活動に関わっていない人々の参加は、関わっている人よりも大幅に難しいことが予想される。

2) 公平で平等な対話の機会の確保の難しさ

今回のデモクラシー・カフェでは回を行うにあたり、参加者の対話の機会を均等に確保するため、グランドルールとして他の参加者への配慮を掲げ、一人が長時間発言を続けることや他者の発言を否定することをしないよう求めた。また、その遂行のために進行役もその点を重視した司会進行を行った。しかしながら実際には参加者の中でも積極的に発言する人と消極的な発言の人に分かれてしまい、意見を発する機会を十分に確保することができない場面が多くあった。また、他者の発言を否定する参加者もあり、進行役が十分に場を制御することの難しさが明らかになった。

地域への提言

県や市町村、あるいは政治家が主体となったデモクラシー・カフェを定期的かつ継続的に実施していくことを提言する。今回の実施を通して、デモクラシー・カフェが政治家と一般市民の意見交換に有効であり、また社会や政治のことを考えるきっかけになることが明らかになった。このことから、一般市民が社会や政治に参加していく仕組みの一つとして、今後はデモクラシー・カフェを行政や政治家が主体となって開催していくことが、市民意識の向上や政治参加の促進につながると考えられる。

地域からの評価

参加者のアンケートをもとにすると、参加者からは総じて高評価を受ける結果になった。特に、政治家と一般市民が気軽に対話できるという特性や若者が主体となって開催している点などが高い評価を受ける一因となっていた。また、今後の開催も要望されており、実際に島田市では来年度デモクラシー・カフェを開催することが予定されている。

参考資料



写真Ⅰ 第1回デモクラシー・カフェの様子



写真Ⅱ 第5回デモクラシー・カフェの様子

県内韓国語標識・印刷物における研究と提案 —鳥取県西部を中心とした調査との比較—

静岡県立大学 国際関係学部 小針ゼミ

指導教員：小針進（教授）

参加学生：柿山奈那、鈴木未希子、須藤将大、矢田ゆかり、渡辺知実

共同討議学生：伊藤愛、鄭珍錫、佐藤聖奈、杉山歩未、圓谷茉由、中村成寿、中村唯花、根岸拓未、福元希美香、望月郁実、吉村梨佐

1. 研究の目的

日本政府観光局（JNTO）によると、訪日個人旅行者が感じる不便・不満のトップは「外国語標識」の不足だという（『訪日外国人個人旅行者が日本旅行中に感じた不便・不満調査』、平成2009年10月）。静岡県内の観光地においても、外国語標識が目立ってきたが、十分とは言えない。とくに、この20年以上、訪日外国人観光客のトップが韓国人であるが、県内観光地の韓国語標識や観光案内印刷物（パンフレット、地図、リーフレットなど）の実態（有無、位置や表記の妥当性、言葉としての正しさ）が充実しているとはいえない。また、2020年に東京オリンピック・パラリンピック開催を控え、これから日本を訪れる外国人が増えることが予測される。なかでも、富士山静岡空港とはソウルまでの定期便が2009年から結ばれている静岡県の場合、韓国人はダイレクトに入学してくる。正しい韓国語による様々な標識が整備されることが急がれている。韓国人をはじめとする外国人が旅行しやすい静岡をアピールしていくべきだと考える。静岡空港よりも早い段階からソウル便が就航している地方空港を持つ県を選び、韓国語標識や観光案内印刷物をめぐる整備状況から、静岡県が学ぶべき点がないかどうかを検討することとした。本研究では、2001年からソウル便が就航している米子空港を抱える鳥取県西部をモデルとして調査し、静岡県内についても調査を行った。

2. 静岡県内における韓国語標識・印刷物の整備状況

平成25年度小針ゼミによる「県内観光地における韓国語標識・印刷物の問題点に関する研究」（『大学ネットワーク静岡・ゼミ学生地域貢献推進事業成果報告集』2014年2月）では、韓国語標識や観光案内印刷物をめぐる整備状況に問題が多いことが浮き彫りになった。具体的には、表記に一貫性がないもの、表記が逆であったり入力ミスがあるもの、日本語の発音をそのままハングル表記するもの、韓国語の漢字音のままハングル表記するもの、直訳からくる間違いがあるものなどが目立つなど、質的な問題である。また、量的にも、浜松や熱海などの有名な観光地の韓国語標識が多くはなかったという。

今次の調査では、前回調査では行くことができなかった静岡県中部を中心に同様の調査を行った（2015年1月）。富士駅、静岡駅、藤枝駅、菊川駅、富士山静岡空港、日本平周辺、清水エスパルスドリームプラザ、三保の松原の各地で、韓国語標識についての調査を行った。

富士、藤枝、菊川の各JR駅では韓国語標示はなく、ローマ字のみだった。静岡駅は改札がある階に韓国語の標示はなく、ローマ字のみであったが、駅周辺の地下の案内図や標識には韓国語標示があった。駅に韓国語標示がないと、目的地までの行き方がわからず、不便である。

静岡駅、藤枝駅には観光案内所があり、韓国語のパンフレットは配置されている。富士山静岡

空港は、韓国語標示、パンフレットともに充実している。案内所には韓国語を話せるスタッフもおり、全体的に充実したものとなっていた。次に日本平周辺についてだが、久能山東照宮では、韓国語標示があったのはロープウェイ乗り場のみだった。総合案内所には、韓国語のパンフレットがあるが、韓国語で案内をできる人はいなかった。清水エスパルスドリームプラザや三保の松原では韓国語標示はほとんどなく、外国語パンフレットに関していえば、ドリームプラザ内のちびまるこちゃんランドにおいて英語と中国語のパンフレットがあった。

3. 鳥取県西部における韓国語標識・印刷物の整備状況

(1) 概要

2014年12月28日～30日、われわれは鳥取県西部地区の韓国語標識・印刷物の整備状況に関する調査を行った。日本語、英語をはじめとする他の外国語を含めて、同地区の主な箇所で行ったことは、おおむね次のようことである（写真は次ページを参照）。

①皆生温泉旅館組合

皆生温泉周辺の表示板やバス停が日本語、英語、韓国語、中国語（簡体字＝中国大陸で使用）・中国語（繁体字＝台湾・香港などで使用）、ロシア語の各語で併記している。

②米子市観光協会

米子市観光協会では、観光センターの業務終了後の案内表示や観光案内地図を含めて、日、英、韓、中の各語で標示するようにしている。

③米子鬼太郎空港

米子鬼太郎空港の標示は、キャラクターのロゴを含めて、案内標示のほとんどが、日、英、韓、中（簡体字）・中（繁体字）の各語で標示されている。

④境港市観光協会

境港市観光協会の管内ではタクシー案内にも韓国語標示が加えられている。案内板も日、英、韓、中（簡体字）・中（繁体字）、露の各語で併記されている。

⑤J R米子駅構内とその周辺（12月30日）

J R米子駅は日、英、韓、中で標示されている箇所がある一方で、主要なところでは外国語は英語すらなく、最も利用者が多いと思われる韓国人向けの韓国語だけを併記されているケースもある。

(2) 鳥取県西部が整備されている背景

鳥取県西部地区の韓国語標識が整備されている背景は次のようなことが考えられる。第一に、鳥取県が韓国の江原道と友好提携（1994年）を結び20年来の交流がある点である。第二に、空（アジアナ航空）と海（DBSフェリー）による定期航路が韓国との間である点である。第三に、人口も県内再生産も全国で最も小さい鳥取県や米子市にとって外国人観光客誘致は喫緊の課題であり、外国語標識に対しても積極的に取り組んできた点である。

①江原道の友好提携

自治体国際化協会（CLAIR）は、そのホームページなどで、姉妹自治体の最良事例として、鳥取県と江原道の友好提携を紹介している（<http://www.clair.or.jp/j/exchange/>）。同ホームページによれば、a. 県、市町村、学校、民間団体等の様々な主体によるスポーツ、文化、青年等様々な分野の交流が盛ん、b. 歴史やゆかりを活かしたイベントや交流が盛ん、c. 国内最多級の韓国人の国際交流員の配置されている（おもにJET＝The Japan Exchange and Teaching

鳥取県西部(米子・境港)で見られた外国語標示板

2014年12月調査



米子市内の標示板やバス停は日、英、韓、中(簡体字)・中(繁体字)、露の各語で併記が多い



米子観光案内図や米子空港内は日、英、韓、中(簡体字・繁体字)の各語で標示されている



境港のタクシー案内には韓国語標示も



日、英、韓、中(簡体字・繁体字)、露の併記が多い



JR米子駅は日、英、韓、中で標示されている箇所がある一方で(左)、外国語は英語すらなく、最も利用者が多いと思われる韓国人向けの韓国語だけを併記されているケースもある(右)

Program 参加者)、d. 高校での韓国語教育が充実している、e. 県民に対して韓国の歴史や文化・韓国語などを学ぶ機会を設けている、f. 北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミット(鳥取県、江原道、中国吉林省、ロシア沿海地方、モンゴル中央県の5地域が参加)へ参加している——などの特徴があるという。

さまざまな行事の際には、江原道からの参加が一般的になっている。たとえば、全都道府県が持ち回りで実施している全国規模の行事、たとえば「全国生涯学習フェスティバル」、「国民文化祭」の開催自治体が鳥取県になった際などは、江原道から参加してもらったという(小針進による片山善博・前鳥取県知事へのインタビュー。小針進『日韓交流スクランブル』大修館書店、2008年)。また、友好提携は鳥取県・江原道レベルだけでなく、米子市と東草市(江原道)といった市レベルでも結ばれている。

②韓国との定期航路

米子鬼太郎空港とソウル(仁川国際空港)を結ぶ、米子—ソウル便が、2001年4月2日から就航している。米子・ソウル便は月間搭乗者数(2355人、平成26年10月期)が、静岡・ソウルのそれ(4786人、同期)よりも少ない場合が多いものの、週3便を維持している(静岡・ソウル便は2014年12月から週5から週3に減便)。鳥取県(59万人)の人口規模が、静岡県(380万人)の6分の1以下であることを考えると、大健闘しているといつてよい。

いっぽう、境港、韓国の東海港、ロシアのウラジオストク港を結ぶDBSクルーズフェリー(国際定期貨客船)が2009年6月から就航している。鳥取県のホームページ(<http://www.pref.tottori.lg.jp/116803.htm>)によれば、境港—東海港便の一航あたりの平均411人で、境港からソウル首都圏へ24時間以内に貨物を届けることが可能になるなどの経済活動に役立っているほか、観光交流、スポーツ交流、青少年・学校交流などの活性化に一役かっているようだ。

③外国語標識に対する自治体の取り組み姿勢

鳥取県のホームページによれば(http://db.pref.tottori.jp/yosan/26Yosan_Koukai.nsf/)、「観光案内標識の外国語表記事業」として2300万円(平成26年度)を計上している。鳥取県が韓国語標識に力を入れ始めたのは、平成12～13年度頃であった。これは、米子—ソウル便の就航が決まった平成13年度までに整備を必要とするためだ。また、平成24年度には鳥取県西部の主要観光地のひとつであり、DBSフェリーや米子空港付近にある「水木しげるロード」の外国語標識の整備を行った。そして、鳥取県の西部地区は国の「外国人旅行者の受入環境整備事業」における地方拠点と位置づけられている。平成24年度に整備したまんが王国関連の「水木しげるロード」の案内看板では英語表記の他に韓国語、中国語も併用表示している。国、県、市町村で連携して既存標識の点検をする運びで、改修に向けた取り組みも平成26年度の予算から実施している。

4. 静岡県のための提言

われわれが鳥取県西部を調査してまず驚かされたのは、韓国語標識の細かさである。たとえば、米子市の主要観光地である皆生温泉では、交差点ごとに方向指示の標識がたっており、それらすべてに韓国語、中国語、ロシア語の言語標記がされていた。これにより、外国人観光客が道に迷うことなく、観光を楽しむことが期待できるだろう。

また、同じく県西部である境港市の水木しげるロードでも、こうした細かい方向指示の外国語

標識だけではなく、水木しげるロードの代名詞でもあるアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」のデザインと一緒に、韓国語標識が多数あった。こうした標識は、韓国人観光客の旅行を快適にするだけでなく、日本の文化に対する印象にも好影響をもたらし、さらなる観光客増加を期待できる一つの要因となるのではないかと考えられる。

静岡県中部の観光地を例にあげると、今回県内調査した日本平周辺や、世界遺産に指定された三保の松原における韓国語標識はあまりなかった。鳥取県西部の取り組みのように、細かく配慮された言語標識や、印象に残る言語標識は、今後の静岡県の外国語標識に対する一つの参考になるのではないかと考えられる。

外国語のパンフレットに関していえば、鳥取県西部には韓国語だけでなく、他の外国語のパンフレットも充実していた。静岡県内は、静岡空港や静岡駅などでは外国語のパンフレットが配置されているが、まだ外国語のパンフレットがないところや、観光客が見えるところにパンフレットを設置していないところが存在するのが現状である。鳥取県西部においては、外国語のパンフレットがほとんどの観光案内所で誰でも取れる位置に設置されていた。静岡においても、ぜひ外国語のパンフレットの充実とともに、それを目立つところに設置してはどうだろうか。

民間においても、意識の違いが見られる。静岡では日本語のものしか見受けられなかった観光タクシーについてのパンフレットが、鳥取県では韓国語のものもあった。お土産屋の試食のところに、韓国語で味の説明が書いてあったり、どんな小さな標識にも韓国語標識が書かれていたり、公の機関と個人の両方が外国人観光客に細かいところまで配慮しており、鳥取県西部は外国語標識に対する民間の意識も高いと感じた。

前述したように、鳥取県や米子市は姉妹提携している韓国側との自治体交流も盛んだからこそ、地域全体で、韓国人旅行者を受け入れる体制が整っている側面もあるのだろう。静岡県は忠清南道との友好関係を進めているが、正式な提携には至っていない。静岡県のホームページによれば (http://www.pref.shizuoka.jp/kikaku/ki-130/j_sister.html)、市レベルでは、藤枝市が楊州市と、御前崎市が蔚珍郡と、それぞれ2009年8月に提携を結んでいるだけで、政令都市である静岡市も浜松市も韓国側都市との姉妹提携がない。姉妹提携による自治体間交流が活性化されるべきだろう。

観光庁によると、都道府県別延べ宿泊者数は東京、北海道、大阪について静岡県は全国第4位である。しかし、都道府県別外国人延べ宿泊者数は全国第11位である(2014年7月～9月宿泊旅行統計調査)。したがって、外国人旅行者にとって静岡の知名度は高くない。

2020年には東京オリンピックを控えている。川勝平太知事は、東京オリンピック・パラリンピックの事前合宿やプレ大会の県内誘致を本格化させる考えを明らかにしている。外国人選手や外国人旅行者が静岡を訪れても快適に過ごせるように、多様な言語の表記とパンフレットを作っておく必要があると考える。

また、静岡県観光協会が出している「おもてなし日本一パーフェクトガイド」というものがあるが、そこでは英語、韓国語、中国語の簡体字、繁体字で様々なシーンで利用できる言葉を提供している。プリントアウトしてお客様に渡すことができるようになっているため、観光施設にとっては大変便利である。このような素晴らしいサイトがあるのににもかかわらず、それを生かしていないのではないだろうか。飲食店や宿泊施設、観光施設にこのサイトを積極的に宣伝し、外国人観光客へのサービスの質を向上させる必要があろう。

中山間集落に残る古民家、古茶樹などの地域資源を活用した交流人口拡大策に関する研究

静岡産業大学情報学部 堀川ゼミ

指導教員:教授 堀川知廣

参加学生 4年生:塩野フィリップ陽、鈴木大地、安藤 智、

安倍 大気、井出 雄昇、佐藤 飛翔、

中西 颯、深澤 和慶、山脇 健司、若

杉 慧、宮崎 翔也

3年生:天野 慎一郎、水元 孝祐、米良 誠人

14名

[要約]

江戸末期から明治・大正にかけ良質茶の産地で栄えた島田市伊久美二俣地区を研究対象とし、古民家に宿泊し、「百年番茶」製法の確立と古い酒樽材を活用した囲炉裏づくりを行った。「百年番茶」は、天日乾燥(石油等エネルギー使用を最小限にし)で、子供たちの体験学習に利用できるよう、1日で茶摘みから製茶ができる見通しが得られた。囲炉裏は酒樽古材の特徴を活かした「ここにしかない」ものを比較的短時間で作ることで、子供たちの囲炉裏作り体験も、地域の活性化に活用できると考えられた。「百年番茶」は市民を対象とした試飲でも比較的好評で、新しいブランド茶として活用できると考えられた。

[研究の目的]

本研究は、学生自らが地域に深く入り込み、地域の住民と協働し、より魅力的な地域づくりや活性化策を考えることを目的としている。具体的には、中山間地域集落である島田市伊久美二俣地区を対象地域とし、空き家となっている古民家屋敷での宿泊体験や、百年以上前に植えられた在来種茶を活用した「百年番茶」づくり、古い酒樽材を再利用した囲炉裏作りなどを通して、地域資源を活用し、都会の子供たちが楽しめる地域づくりの提案を目的とした。

[研究の内容]

1 主な調査研究計画

8月18日(月) 伊久美二俣地区の調査計画づくり(学内で実施)、借用する古民家屋敷(西田邸・空家)で宿泊・生活するための日用品の準備

8月19日(火) 地元住民の西野恭正氏から、二俣地区の歴史、茶業の概要の講義を受けた後、二俣地区に残る古民家を調査。昭和初期の酒醸造用大樽古材を使った囲炉裏作り。

8月20日(水) 在来茶園(樹齢100年以上)の茶葉を使った「百年番茶」製造。蒸製、茹で製、釜炒り製の3種類の番茶づくり。茶の天日乾燥時間を利用して囲炉裏作り

8月21日(木) 囲炉裏作り。「百年番茶」仕上げ作業、静岡新聞社取材対応
伊久美地区活性化策の検討

10月25日(土) 「百年番茶」試飲調査 於静岡産業大学情報学部 シンポジウム会場

11月9日(日) 「百年番茶」試飲調査 於藤枝市生涯学習センター 全国お茶サミット会場

2 伊久美二俣地区の歴史・古民家調査・「百年番茶」製造研究・酒樽材を使った囲炉裏製作

(1) 伊久美二俣地区の歴史と古民家調査

二俣地区の住民である西野恭正氏の案内で二俣地区を歩きながら、二俣の歴史と明治から昭和初期にかけて建設された古民家等を学んだ。



合宿した西田正鋭氏宅：大正期に建築、平屋60坪ほど、(6部屋+DK+土間+風呂など)、数年前から空き家



二俣地区の古民家を訪問・調査。写真は明治21年建築の袋井昂邸(現在家族が居住)

(2) 「百年番茶」の製法研究(製法と製造に要する時間の研究)

供試した茶葉：8月20日、樹齢百年以上の在来種の茶葉を枝ごと切り取り原料茶とした。

製法：①煮製：茶葉1kgを大釜で約10分煮る⇒直径1.2mの竹ざるに広げ天日乾燥(5時間)⇒棚式熱風乾燥機で乾燥(1時間)⇒大釜で仕上げ乾燥・火入れ(20分)

②蒸製：大釜に掛けた蒸籠に茶葉1kgを蒸す⇒直径1.2mの竹ざるに広げ天日乾燥(5時間)⇒棚式熱風乾燥機で乾燥(1時間)⇒大釜で仕上げ乾燥・火入れ(20分)



摘み取った茶を大釜で煮る



天日で乾燥



仕上げ乾燥(火入れ)

*「百年番茶」づくりを子供たちの一日体験イベントとして実施するには、茶の摘み取りから完成・試飲まで6時間程度で終了するようにしたいが、今回の製造日のように、夏の暑い晴天の日においても、天日乾燥5時間では十分な乾燥ができなかった。しかし、今回の

試験製造の結果を踏まえると、天日乾燥と棚式熱風乾燥を組み合わせれば、4時間ほどで「百年番茶」が完成できることが分かった。

(3)「百年番茶」の試飲調査結果

試飲の印象	人数(%)	コメント
好き	45(48%)	さっぱりして懐かしい味。「百年番茶」のストーリーが面白い。今の時代に合っている。やさしい味でごくごく飲めそう。これから出番のある茶。煎茶を違う味で驚いた。
普通	43(46%)	飲みなれれば飲みやすい。番茶は初めて飲んだが意外とおいしい。香りがもう少し欲しい。麦茶よりいい。
それほどでも	6(6%)	匂いが好みでない

(4) 初期の酒樽材を用いた囲炉裏作成

子供たちが二俣地区に体験イベントで訪れた時、学習や昼食に使うことができるような囲炉裏製作を行った。囲炉裏の材料は、昭和3年に作られた酒の醸造用樽(廃材)を利用し、地元の大工棟梁大塚隆氏に工作方法を学びながら作成した。囲炉裏の大きさは180cm×95cm×高さ50cm、テーブル部分と足を取り外して持ち運びができるようにした。中央部には45×60cmの穴を空け、炉にはバーベキューの炉を用いることができるようにした。椅子も樽廃材で作製、180×30cm×高さ30cmで子供が利用できるようにした。作成した囲炉裏は二俣地区にある旧酒販売所(現在空き家)においておき、地元住民もイベントなどに利用できるようにした。



野積みの樽廃材を選別 棟梁大塚隆氏に作成方法を学ぶ 完成した囲炉裏

3 地域への提言

「百年番茶」、今回作成した囲炉裏、二俣の古民家や自然など地域資源を活用した活性化策として、参加学生が提案した主なものは以下のとおり。

- ・二俣地区で作ることができない茶として「百年番茶」の知名度を上げ、子供たちや観光客が番茶製造体験や古民家での生活体験ができるよう、大学生と住民が協働して企画を作る。
- ・「百年番茶」づくりは思ったより簡単。短時間で茶摘みから試飲まで一日でできるように製造時間を短縮し、お土産に「百年番茶」を持ち帰れるようにすれば、差別化した体験学習になる。
- ・酒樽の古材を使った囲炉裏を作る子供ツアーを計画する(囲炉裏を作るのは思ったより簡単)。自分の作った囲炉裏を二俣地区に来れば使えろと思えば、また来たいとも思うのでは。

- ・「百年番茶」は生産量が少ないので、ブランド化して高級路線でいくこともできる。地元ならではの創作料理を味わい、囲炉裏端で番茶を飲むツアーも面白い。
 - ・住民が減る二俣地区を、歴史ある街としてPRし、空き家となっている古民家は子供たちの社会学習ができる場として活用する。都市住民の宿泊施設として活用することもできるのでは。
 - ・かつて茶で栄えた山里、豊かな自然、古民家を映画のロケ地として広報する。
 - ・農学系や地域活性化を学ぶ大学生の合宿の場とする。自治体や大学が林間学校施設を作るより、古民家を活用したほうが、地域の暮らしを肌で知ることができる。
- * 今後も、参加学生が二俣地区の住民と交流を持ち、提言実現を図っていく。

静岡新聞(平成 26 年 8 月 22 日)に「百年番茶」づくりと囲炉裏作りが紹介された。



100年前製法で番茶作り

静岡産大生 夏期講義 里山活性化策考える 島田

島田市伊久美二俣地区で夏期集中講義を受けている静岡産大の学生12人は最終日の21日、同区の古民家で、100年前の製法を再現した番茶を完成させた。

古民家を活用した里山の活性化策を考える「地域デザイン演習」(堀川知廣教授)の一環で、19〜21日の計4

お手製のいろりを囲み、番茶作りをする学生ら(島田市伊久美二俣地区)

日間の集中授業。同地区の樹齢100年を超える茶葉を利用して、昔の人々が自家用に製造していた番茶作りに挑戦した。

摘んだ茶葉を大釜でゆでたり、蒸し器で蒸したりして1日天日干しした後、いって香り付けを行った。試飲した学生らは、ゆでた場合と蒸した場合の味の違いに驚いた。酒だるの廃材を再利用して「いろり」も復元した。

「自然の中で生きる」とはどういうことか学び、田舎を盛り上げる策を柔軟に考えてほしい」と学生に期待する堀川教授。今後は番茶

作りやいろりを生かした里山体験プログラムを実施していく予定だという。若杉慧さん

浜松市に残る徳川家康公に関する物語の資産化プロジェクト

静岡大学 情報学部 杉山岳弘研究室

指導教員：准教授 杉山岳弘

参加学生：縷沢奈穂美、犬塚健吾、米山莉江、渡邊なつき、吉田彩華、萩野一平、李森（りみょう）、遠藤涼子、福井春風、江崎みのり、野口菜摘、向江拓馬、阿慶田眞子、鈴木祥子

1. 要約

徳川家康公に関する物語の資産化、市民が誇りに思えるストーリーの定着を目標に、昨年度から浜松商工会議所と連携して、商品開発に役に立つ家康公の物語にまつわる物語のデータベースとかわら版を作成してきた。本プロジェクトでは、毎月のかわら版の公開とデータの更新を行った。かわら版の更新期間は2014年の4月から毎月発行しており、さらに2015年の3月までの発行を予定している。データベースの更新は、73件追加され現在123件の家康公に関する物語が公開されている。

2. 研究の目的

目的は、徳川家康公の物語にまつわる商品やサービスを通じて、浜松市民に、家康公についての歴史に基づく正しい知識を獲得してもらい、誇りを持ってもらうことである。浜松市は徳川家康公との縁が深いにも関わらず、敗戦のイメージが強く、市民の家康公に関してのイメージがあまりよくないと言われている。しかし、歴史をみてもみると、浜松時代の家康は、弱小大名でありながら挑戦者として苦境にも諦めることなく厳しい戦いを勝ち抜いた闘将であり、誤った見方がなされていることが分かる。そうしたイメージを一新するために浜松 闘将家康プロジェクトが進められている。2015年は徳川家康公顕彰400年という記念の年であり、家康公を中心とした観光振興を目指している。本プロジェクトでは、この目的の実現に向けて、徳川家康公に関する物語の資産化として物語のデータベースの公開とかわら版の発行を行っていく。

3. 研究の内容

徳川家康公に関する資産化のため、物語の収集及び調査、データベース化、かわら版とWebページの作成を行った。データベースのシステム (<http://www.legend-ieyasu.info>) は昨年度にすでに完成しており、今年度は物語のデータベースの追加を行った。ここでは主にかわら版の制作について述べる。

(1) 家康公の物語に関する情報源

家康公の物語に関する情報収集では以下の文献を情報源として、さらに現地での取材を行い、静岡戦国プロジェクト実行委員会の鈴木厚夫氏および浜松観光ボランティアガイドの会の森島堅一氏により情報提供を受けた。著作権者にはデータベースおよびかわら版への掲載許可を取ってある。

文献名	発行	著者
家康の愉快的な伝説 101 話	遠州伝説研究協会	御手洗清
浜松の伝説 上・下	ひくまの出版	渥美実

取材先は、以下の通りです。

取材先	取材日	対応者	掲載号
株河合巖商店	2014/3/16	河合氏	2
グランドホテル浜松	2014/3/17	古賀孝幸氏	2
浜松八幡宮	2014/3/20	桑島氏	3
五社神社 諏訪神社	2014/3/21	鈴木勇人氏	8
(有)アナウンスクラブ	2014/3/24	白井康子氏	2
信康まつり	2014/11/3		9
光明寺	2014/11/24	光明寺住職	9
龍潭寺	2014/11/15	武藤全裕氏	10、11
浜松城	2015/1/13	森島堅一氏	11
浜松市博物館	2015/1/15	久野正博氏	11

(2) かわら版の制作

かわら版の1号から12号までの内容について簡単にまとめる。内容は表1に示す。作成したかわら版は、

Web ページ : <http://www.legend-ieyasu.info/tousyou/kawaraban/index.html>

で公開と紙媒体での配布を行っている。

かわら版の内容としては、特集コーナーに加え、家康公にゆかりのある場所への取材を行う「闘将家康物語発掘団」、浜松観光ボランティアガイドの方のコラム記事「家康人に聴け!」、家康公に関するイベントや出来事を紹介する「闘将ニュース」、家康公の食事に関するエピソードを紹介する「家康公の食卓」がある。

(3) かわら版の配布

予算によって印刷したかわら版を、各号40部ずつ、浜松市内の了解のとれた「静岡大学浜松キャンパス」、「浜松市中央図書館」、「浜松市役所文化財課」、「浜松城」、「浜松観光コンベンションビューロー」、「浜松商工会議所」に置いてもらい、配布を行っている。

また、以下の家康楽市などのイベントの浜松商工会議所のブースで、楽市を訪れた方へのデータベースの紹介やかわら版の配布を行った(図1)。

平成26年度4月26日、27日 家康楽市 in 浜松出世城 春の陣(浜松城公園)

平成26年度10月18日、19日 大阪ノ陣合戦祭り(大阪城公園)

平成26年度10月25日、26日 家康楽市 in 浜松出世城 秋の陣(浜松城公園)



図1:家康楽市の様子

4. 研究の成果

成果としては、資料として残っている浜松の家康公にまつわるエピソードをかわら版として、まとめることができた。また、家康公とゆかりのある場所に取材に行き、資料化されていない貴重なエピソードもまとめることもできた。

5. 地域への提言

徳川家康公というと、「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」に代表されるような我慢強い武将、策略家の狸親父といったイメージが先行してしまっている。また、浜松での三方原の戦いに負けたというイメージが強く、市民の一般的な感情としても家康公に対して誇りを感じている人はあまりいない。そこで、「闘将家康かわら版」や「浜松 闘将・家康プロジェクト～天下取り挑戦伝説～」を通して、浜松時代(29～46才)の徳川家康公を、浜松市民が抱く三方ヶ原の戦いの「負」のイメージから、史実に基づいた天下取りに向け勇敢に挑戦する姿へ転換していきたいと考えている。

6. 地域からの評価

地域からの評価として、メディアの掲載については、静岡新聞（2014年5月21日夕刊一面）への掲載、フリーペーパー「オーバーゼア」（2014年9月1日発行第41号、2014年12月1日発行第42号）への掲載、浜松商工会議所で発行している広報紙「Newing」（2014年5月～2015年3月2号から11号※10号へは掲載されていない）への掲載がされた。またフリーペーパー「静岡時代」への掲載も予定している。さらに、かわら版とデータベースのWebページのアクセスとしては、2014年4月から2015年1月までで、7,169のページビューがあった。

表1: 闘将家康かわら版の内容

号数	発行月	内容
1	4	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 徹底検証! 家康公、浜松時代の真実とは? ・こちら闘将家康物語発掘団 ～浜松城下町の巻～こんなところに家康公が!? ・闘将ニュース 闘将家康物語集ついに公開!
2	5	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 浜松 闘将・家康プロジェクト、新商品・サービス速報! 商品開発に役立つ家康公の伝説も併せてご紹介 ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
3	6	<ul style="list-style-type: none"> ・特集【空想問答】家臣に直撃!遠江進出の裏側!! ・こちら闘将物語発掘団～浜松八幡宮の巻～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
4	7	<ul style="list-style-type: none"> ・特集【空想座談】「三方ヶ原の戦い」車座会議 ・こちら闘将物語発掘団～犀ヶ崖の巻～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
5	8	<ul style="list-style-type: none"> ・特集『空想闘将ブログまとめ～武田氏との激闘こぼれ話～』 ・家康公の食卓 ～素麺の巻～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
6	9	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 家康公、大躍進の秘密を探れ!! ～一躍、有力大名へとの上昇が家康公の底力とは!??～ ・家康公の食卓 ～3匹の魚の巻～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
7	10	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 秀吉公・家康公、天下人2人の駆け引き ・家康公の食卓 ～「家康公の強い意志が生んだ不思議な栗」の巻～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
8	11	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 家康公の人生に信長公の姿あり! ・こちら闘将物語発掘団 ～五社神社 諏訪神社の巻～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん ・闘将ニュース 浜松城の在り方を考えてみよう!!
9	12	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 開運! 浜松時代の家康公の出世を助けた!? スポットを紹介 ・こちら闘将家康物語発掘団～信康まつりの巻～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
10	1	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 あなたはいくつ知ってる!?浜松に眠る家康公の伝説 ・こちら闘将家康物語発掘団 ～ 龍潭寺の巻 前篇 ～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
11	2	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 家康公にゆかりのある物を求めて、浜松市博物館・浜松城に潜入! ・こちら闘将家康物語発掘団 ～ 龍潭寺の巻 後篇 ～ ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん
12	3	<ul style="list-style-type: none"> ・特集 徳川家康公顕彰四百年事業を紹介する ・家康人に聴け! 浜松観光ボランティアガイドの会 森島堅一さん

旧湯ヶ島小学校を利用した天城山周辺における自然環境資源の有効活用

静岡大学 理学部 生物科学科 徳岡研究室

指導教員： 准教授 徳岡徹

参加学生： 齋藤圭太、 由井秀範、 石田卓也、 高島惇、 中森秀典、 渡邊誠太

1. 研究目的

伊豆半島天城山は富士箱根伊豆国立公園に含まれ、大規模な照葉樹林と落葉広葉樹林が広がる素晴らしい自然環境をもっている。この自然環境を最大限利用して、人材育成や地域と大学の連携を強化することを目的として研究を行った。

伊豆半島の中心部にある天城山は日本百名山にも数えられ、東の万二郎岳、遠笠山から西の天城峠までの連山を指している。この天城山は標高こそ最も高い万三郎岳で1400メートルあまりであるが、標高800メートル以上に大規模なブナ林が発達し、それ以下にはアカガシを中心とした照葉樹林が広がっている。また、天城山は20～80万年前の噴火活動によって形成された成層火山であり、万三郎岳の西に位置する皮子平火口がおよそ3200年前に噴火して北麓にかけてなだらかな斜面を形成している。これらの自然環境は植物学、生態学、地球科学を学ぶ上で非常に価値ある教材であると考えられる。

天城山の西端にある天城峠にほど近い、伊豆市湯ヶ島地区（旧天城湯ヶ島町）にはこの地区の協力を得て静岡大学理学部天城フィールドセミナーハウスが設立されている。このセミナーハウスでは天城山の自然環境を活かして理学部の学生向けに野外実習などが開講されて利用されてきた。一方、湯ヶ島地区にあり、作家井上靖も通った湯ヶ島小学校は天城小学校に統合され、平成25年4月に閉校となった。この跡地は新たな文化施設として活用する計画であるが、具体的な活用方法は決まっておらず、伊豆市湯ヶ島地区地域づくり協議会を中心として、その有効活用の方法を模索していた。そこで、この地区の豊かな自然環境を利用し、大学生や地域住民の方々が生物学や地球科学を学べる施設として有効利用する方法を静岡大学理学部の本研究室と湯ヶ島地区地域づくり協議会が連携して研究することとした。

2. 研究内容

このような取り組みを始めるために、伊豆市湯ヶ島地区地域づくり協議会と打ち合わせを重ねた。まず一年目の本年度は野外での自然観察会を2回開催し、旧湯ヶ島小学校跡地の活用として植物標本庫の整備とともに植物学を紹介する展示物の作製を行った。

1) 自然観察会 1 (10月4日実施)「秋の天城の自然観察会」

伊豆市道の駅「天城越え」から天城峠までの踊り子歩道を歩きながら秋の植物を観察する自然観察会を実施した。参加者の募集は伊豆市役所観光経済部と市役所天城湯ヶ島支所に協力していただき案内の資料配布を行い、また伊豆日日新聞の記事(9月25日)による告知によって参加者の募集をおこなった。徳岡研究室の学生もガイドとして参加するため、コース沿いの植物の標本作製やその生態などを事前に詳しく調べた。当日は二十数名の参加者があり、道の駅に集合した後、踊り子歩道を通って天城峠へ向かった。途中で何回も止まりながら、植物の様々な形態や最新の植物分類体系などについて話した。また、逆にヒサカキをサカキとして用いていたことや、ヤマハンノキをワサビ田の日除けに利用していたことなどを参加者の方に教えていただいた。最後に天城峠のブナ林を観察して帰路についた。終始和やかに植物の観察を行い、研究室の学生や湯ヶ島地区の方々と楽しく交流できた。



道の駅「天城越え」で集合



天城峠のブナ林

2) 自然観察会 2 (11月9日実施)「皮子平噴火の痕跡を観察しよう」

静岡大学理学部石橋秀巳講師を招き、天城山皮子平で約3200年前に起こった巨大噴火の跡を観察した。参加者の募集は1回目の自然観察会と同様に行った。また、石橋研究室の学生もガイドとして同行してもらった。皮子平は天城山の最深部にあたる場所であるため、伊豆森林管理署から許可を頂き、借り上げバスで入林した。途中、バスを降りて皮子平噴火の初期に降り積もった火山灰の層や溶岩が冷えて固まった黒曜石なども観察した。更に進んで、皮子平噴火の溶岩源流部を歩き、過去に起こった巨大噴火を感じる事ができた。



皮子平噴火の溶岩を観察



平成 26 年 11 月 12 日付 伊豆日日新聞

3) 展示物の作製

伊豆市観光経済部と連携して旧湯ヶ島小学校跡地の有効活用を研究してきた。実施した自然観察会を拡大発展させ、サイエンス・カフェのような講座の実施も検討している。また、校舎跡に植物標本庫や天城山の植物を紹介するスペースとして活用することを検討している。その準備として天城山の植物標本(さく葉標本、液浸標本や樹脂標本など)の作製を行った。また、標本の作製方法を紹介する展示物を作製した。

3. 研究成果

二回にわたる自然観察会は概ね好評であった。参加者からは、普段と違う角度から植物や岩石を見ることができ一味違った観察会であったことや、身近にあるにも関わらず見ることができなかった天城の魅力を確認したなどの感想があった。地元の方々と直接触れ合うことで、伊豆固有の植物の呼び名やその利用方法、現地の方しか知らない珍しい植物群落の情報などを得ることができ、今後の研究に活かされそうであった。また、研究室の学生も実際に自分がガイドとして活躍することで、違う角度から植物や岩石を見ることができ、自分の専門分野への意欲が高まったようであった。

4. 今後の地域への貢献

自然観察会の実施と旧湯ヶ島小学校跡地の有効活用のための検討を通して、大学と地域の連携をより深めることができた。これらの活動を更に発展させ、来年度以降、定期的に自然観察会やサイエンス・カフェ伊豆を開催することとなった。

障害者の就労を支える地域づくり

—就労支援事業所が運営するカフェの地域社会とのインクルージョンのあり方を考える—

静岡福祉大学 社会福祉学部 前川ゼミ

指導教員：助教 前川 有希子

鈴木エリカ・青島 成美・飯塚美紗樹

江戸 希・曾根 美耶・成岡 千湖

1. 要約

障害者総合支援法の理念として、「障害の有無にかかわらず国民が相互に人格と個性を尊重し安心して暮らすことのできる地域社会の実現に寄与すること」とある。障がいのある人が就労支援を受ける喫茶・飲食店を「福祉カフェ」と名づけ、地域社会の認知を高めたことを考えた。今回、福祉カフェマップを作成し、本学学生や大学祭で来場者に配布した。学生からの感想や意見をうけるとともに、福祉カフェからの評価を受けた。知ることが障がい者への偏見を除去することの第1歩である。

2. 研究背景

障がいのある人が、自分の能力を発揮することができる地域の取り組みに興味を持った。

本学のある焼津市では、障がい者就労支援事業所の授産製品の1つ、地域文化である魚河岸生地製の手提げ袋が新成人へのお祝いの品とされている。この手提げ袋は、丁寧な縫製で品質が良く、地域社会でも広く愛用されている。さらに、海外からの購入希望もあると聞き関心を持った。平成25年のゼミ活動で就労支援事業所が運営する喫茶店に出向き、障がいを持った方の接客を直接受けた。障がい者の就労支援は室内で黙々と作業を行うイメージがあったが、喫茶のサービスを通じて障がい者と関わったことから興味を持った。

1) 先行調査

(1) 静岡県障害のある方の実態調査報告書、静岡県健康福祉部障害者支援局

(平成25年3月) 回答者5052人 回収率50.5%

(2) 「障害福祉に関するアンケート調査」報告書、浜松市

(平成23年5月) 回答者2933人 回収率53.7%

【自分が住んでいる街が、障害のある人にとって安心して暮らせるところだと思うか】の回答として、「安心して暮らせるところだと思わない」、「心のバリアフリー化・障害に対する理解」が求められている。「みんなに障害を知ってもらいたい、知的障害のある人は見た目にはわかりにくく、どうしても普通に見られてしまうことが多いため、会話の内容についていけない」

【就労に関すること】では、働きたいが働いていない人が多い。「自分に合ったできそうな

仕事を提供してほしい」「精神疾患を理由に会社側が復職を許可してくれない」「このまま福祉施設や作業所で働きたい」と就労への意欲を見ることが出来る。しかし、「偏見が復職を遅らせる」、「低収入が長期化している」と将来への不安な声が上げられている。

(3) 障害に関する県民福祉意識調査報告書 社会福祉法人静岡県社会福祉協議会

平成回答者 705 人 回収率 35.3%

障害者への偏見の多くは、「対象者との相互作用がなく無知なるがゆえの偏見」である。障害者に出会う、コミュニケーションする、共に作業を行う、などの行為をへて意識を変える取り組みが求められる。

2) 事前調査

「障がいのある人が働く事業所名鑑」(平成 26 年 3 月)より、喫茶飲食サービスを提供している 52 事業所を把握し、アンケート調査を依頼した。そのうち、21 ヶ所の事業所から回答があった。

結果の概要

- ①地域への広報活動に差がある。
- ②ターゲットとする客層が明確にない。誰でも来て欲しい。
- ③障害を特別視しない、一般社会のルール指導を行なっている。
- ④各事業所ごとに雰囲気作りやメニューを工夫し、力を入れている。

障がいのある人が関わるカフェを「福祉カフェ」とし、多くの方に知って欲しいと考えた。

3. 研究目的とその内容

事前調査より、福祉カフェは地域からの認知を得ることが困難と感じていることを把握した。障がいを持つ人が関わるカフェが地域社会で共存するための支援が必要と考えた。本研究は、各地域にあるカフェの魅力を知ること。その地域に共存するための広報手段としてカフェマップ製作とマップを活用した広報活動を行うことを目的とした。

- ①本研究に理解を得た 19 事業所を対象に訪問調査を実施した (7 月から 9 月)
- ②得られた情報からマップを作製した (9 月から 11 月)
- ③大学祭及び授業で配布して意見を聞いた (11 月から 12 月)

4. 研究成果

図 1、2 のように福祉カフェマップを制作した。カフェマップの表紙のイラストは、障がいのある人を支援するイメージである。障がいのある人がお客さまと交流することにより、よろこびや達成感をもたらす自信につながる事例があることを知った。事業所が、地域の休耕畑を借り受け野菜等を栽培する。(写真 1) 地域活性の様子を知った。この事業所が展開する「宙(そら)とぶかぼちゃ」は、車椅子の利用者も栽培や収穫ができるよう立体栽培をしている。平成 26 年度静岡県授産製品コンクール静岡県社会福祉協議会会長賞を

受賞された。さらに収穫した農作物を材料にしたスイーツをお菓子やジャム、惣菜に調理し、材料の生産から加工・販売まで手がける6次産業を展開することで地域との共存を図る取組みを見た。障害者就労支援事業所とは、障害のある方と地域とを結びつけるために訓練をする場所と考えることができる。

この事業所の製品を、大学祭ではサークルのメンバーと販売した。(写真2) また、マップの配布時には、説明をして受け取っていただいた。関心をもち、その場で開いてくれる人もいた。話をきいて、初めて知ったという方もいた。



写真1 「宙(そら)とぶかぼちゃ」



写真2 いもあんパンケーキ

5. 地域への提言

障がいのある人が働く目的は、1つに自分のできることを身につけ能力を活用すること、2つに収入を得ること、3つには人とつながることができることと考える。しかし、地域と共存し理解を得ることは容易ではない。就労支援事業所と地域とが上手く連携していくために、周囲の障がいのある人に対する理解と共に、心のバリアフリー化を取り除かなければならないと考えた。そのためには、就労支援事業所のメンバーは、外に、地域に出ていくことである。先行調査より、「会う機会がある人→話す機会がある人→活動する機会がある人の順に、偏見が低くなる」とある。会う機会をつくるためにも、まずは存在を知ってもらうことである。

我々は、介護福祉士資格取得の学習を積み上げてきた視点から、高齢者との関わりを持つことを考えた。福祉カフェの事業所で、高齢者のサロン活動や介護予防として農作業を一緒にできないだろうか。また、喫茶のノウハウを介護施設へ出前して、要介護高齢者や介護職員との関わりを重ねることも可能かと考える。積極的に接客する姿を見て働くことに対してやりがいを持っている。また、働く上で彼・彼女たちは達成感を感じ喜びや自信へとつながっていることがわかった。障がいのある人であるから、高齢者に話しかけることや一緒に行動することができるのではないかと。

人が人を気にすることは当然のことである。障がいを持っているからと存在を無視するのではなく、就労支援事業所が運営している店舗の商品にも注目してもらい。授産製品の質の良さや、障害者の努力の結晶であることを知って欲しい。

6. 地域からの評価

将来、静岡県が障がい者の就労に対して取り組んでいくべき点として、まず生活環境を視野に入れていかなければならない。「周囲の障がい者への理解」「心のバリアフリー化」を改善していくことである。また「障がいのある人の働く場の確保」や「生活、訓練の場として必要な福祉施設の整備」を設けるためにも行政からの支援が必要であると感じた。また我々が作製した「福祉カフェ」のマップのように、より広く周囲に知ってもらうために、情報発信者の協力が必要であると評価を受けた。カフェの認知度が高まると、障がい者に対する偏見や先入観が薄くなり、暮らしやすい地域社会になるであろう。カフェは地域の居場所となり、障がいを持つ人は地域貢献ができる人材になる可能性がある。



図1 福祉カフェマップの表紙

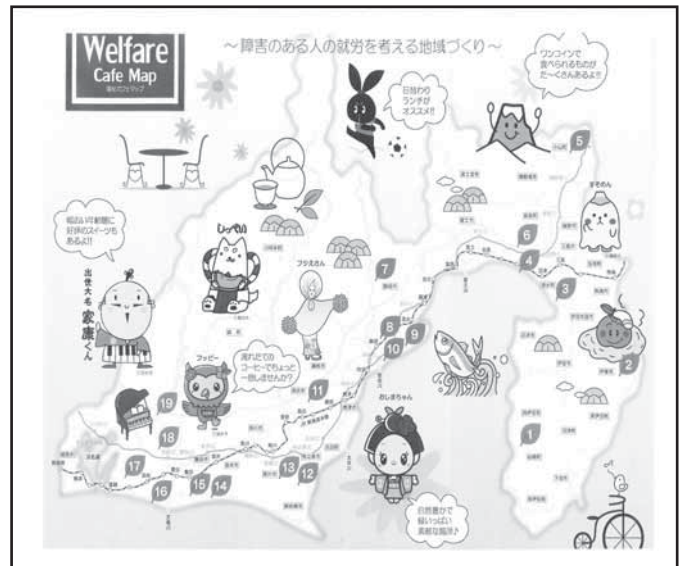


図2 福祉カフェマップの内容

各地のゆるきゃらを載せている



写真3 「すわろう」での聞き取り



写真4 「ともの店」 見学

リーフ茶拡売のためのマーケティング策 ～高級茶を用いた新商品、新流通、新プロセスの研究～

指導教員	静岡理科大学 総合情報学部人間情報デザイン学科 准教授	三原康司
参加学生	静岡理科大学 総合情報学部人間情報デザイン学科 4年	浅田知規
	静岡理科大学 総合情報学部コンピュータシステム学科 4年	相場聖弥
	静岡理科大学 総合情報学部コンピュータシステム学科 4年	萩原良介

研究概要

本研究室では農産物のマーケティング・システムに関する調査研究を行っている。本研究では、リーフ茶拡売のための方法を商品・流通・プロセスの3方向から提案した。ひしだい製茶株式会社と山崎製茶協同組合の訪問調査から得た情報を基に考察した結果、「冷凍した緑茶は、解凍した後も味は変わらない」という仮説を立てるに至った。その仮説を検証するため、試飲実験を行った。実験の結果、袋井茶（一般茶）、きら香（高級茶）ともに急須と冷凍戻しの「味」「色」「濃さ」に関してはほとんど有意差がなかった。このことからお茶を冷凍しても急須で入れたお茶と同等のお茶が飲めることがわかった。これらの分析から、「お茶をカップ等に入れ冷凍販売することが可能ではないか」「1杯分ごとに小分けした冷凍パックのお茶をEコマースで販売することが可能でないか」ということが明らかとなった。しかし、香りに関しては評価が低かったため、冷凍した際に香りを落とさないようにすることが今後の課題である。

1. はじめに

袋井市には、クラウンメロン、袋井茶、袋井米という3つのブランド農産物がある。三原研究室では、これらの農産物のマーケティング・システムに関する研究を進めている。その中で本年度は、リーフ茶拡売に関する調査研究を行ってきた。その調査結果の一つとして、「緑茶を冷凍した場合、その後解凍したものは味に変化があるかどうかは知られていない」ということがわかった。すなわち、リーフ茶を入れたものを冷凍販売することができれば急須で入れる際の手間のかかる過程を省略できるので、拡売につながるのではないかと仮説を立てた。そこで本研究では、その仮説を検証するために試飲実験を行い、リーフ茶拡売の可能性を見出すことを目的とする。

2. 研究方法

まず、リーフ茶に関する文献・先行研究から、現在のリーフ茶のマーケティングに関する問題点・課題などを調査する。その調査では不明確な点・疑問点などを、実際にリーフ茶製造・販売に従事している生産者・製茶業者に訪問インタビュー調査を行い、不明確な点・疑問点に関して検討を行う。これらの文献・先行研究調査と訪問インタビュー調査の検討からリーフ茶のマーケティングに関する仮説を立てる。その仮説を検証するための試飲実験の分析・考察を行うことにより、リーフ茶拡売のためのマーケティング策を策定・提示する。

3. 調査・実験結果

1) 文献・先行研究、訪問インタビュー調査結果

リーフ茶の保存方法・輸送方法に関して、これまでの研究では良いとされる方法は提示されているが、「これが最良（ベスト）である」とされる方法は見出されていないことがわかった。特に高級茶では、急須を用いて、おいしく飲む方法と言われている方法に従って飲むことを前提として販売されており、「冷凍で輸送・販売する」、「粉茶にして販売する」等の検討は行われていないことがわかった。

これらの調査研究結果から以下の仮説をたてた。

「冷凍した緑茶は、解凍した後も味は変わらない」

2) 仮説検証のための試飲実験

文献・先行研究、訪問インタビュー調査からたてた仮説を検証するために、以下に示す手順で試食実験・分析・考察を行った。

- (1) 仮説検証のための実験内容の検討・決定
- (2) 試飲実験
- (3) 結果分析
- (4) 考察

(1) 仮説検証のための実験内容の検討・決定

仮説は以下に示す。

「冷凍した緑茶は、解凍した後も味は変わらない」

この仮説を検証するための実験を行った。以下に実験内容を決定した検討項目を示す。

◆緑茶に対する感応に関して人間の視覚、嗅覚、味覚の三つが重要であると考えた。（本実験において聴覚・触覚との関連性は低いと判断し、聴覚・触覚データの収集は除外した）

◆これからの緑茶マーケットを大きくするために重要な年代は若者であると考え、被験者は比較的緑茶に馴染みの薄い 20 代前半を対象とした。

以上の検討の結果、次項で示す実験を行った。

(2) 試飲実験

- ・日時 : 2014 年 12 月 10 日 16:20~18:00
- ・場所 : 静岡理工科大学 教育棟 3 階 308 講義室
- ・被験者 : 20~22 歳の大学生 男 15 人、女 5 人 合計 20 人
- ・実験対象茶 : ・きら香 ・袋井茶
- ・実験内容 : 実験 1~3 : きら香と袋井茶をそれぞれ急須、冷凍戻し、お茶プレス（粉末茶）の 3 種類の方法で入れ、温かい・常温・冷たいの状態を用意する。これを色、味、香り、濃さの 4 項目に対して、8 段階の評価をしてもらう。好感度が高い場合は高得点とする。

(3) 結果分析

1. 結果のまとめ

表1 きら香（常温）の入れ方別合計得点評価結果

12色A	12色B	12色C	12香A	12香B	12香C	12味A	12味B	12味C	12濃さA	12濃さB
3	4	6	7	2	6	5	4	5	2	2
6	7	5	6	3	7	3	2	6	4	5
7	7	8	8	6	8	6	6	8	6	6
5	5	8	7	4	7	3	3	5	5	6
6	6	4	6	4	5	4	5	7	4	6
5	7	4	7	6	5	6	7	5	5	7
7	7	5	5	7	6	8	7	5	3	4
6	6	5	4	5	6	2	4	6	6	5
7	6	6	5	5	6	5	6	8	4	5
7	8	5	6	4	7	6	7	5	4	3
6	7	5	6	7	6	6	6	5	6	5
7	7	8	5	4	7	6	5	7	2	4
7	7	6	6	6	7	6	6	6	6	6
7	7	6	7	3	5	6	4	3	7	3
6	6	4	7	5	6	2	2	4	6	4
4	6	2	5	5	2	3	4	2	2	5
2	3	3	3	4	4	1	2	4	3	3
7	7	5	1	2	5	2	1	1	3	3
5	7	5	5	4	7	3	3	4	2	2
4	6	5	6	4	6	4	5	6	6	4
114	126	105	112	90	118	87	89	102	86	88

A：急須、B：冷凍戻し、C：茶プレッソ

2. 分析・考察

急須と冷凍戻しの得点データを、各お茶別、実験項目別に比較した。

2-1 合計点による比較分析

図1～4は各お茶別の項目別評価合計点の比較グラフである。

このグラフから、急須で入れたお茶と冷凍戻しのお茶では見た目や味に関してほとんど変わらないという結果がわかる。

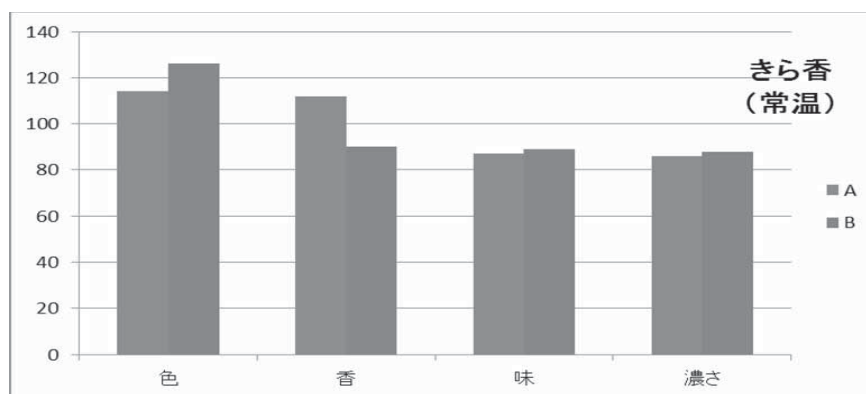


図1 きら香（常温）の入れ方別合計得点比較

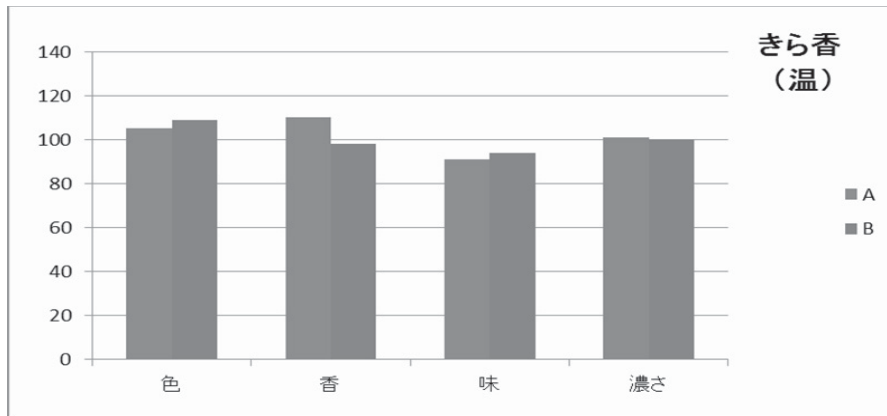


図2 きら香 (温) の入れ方別合計得点比較

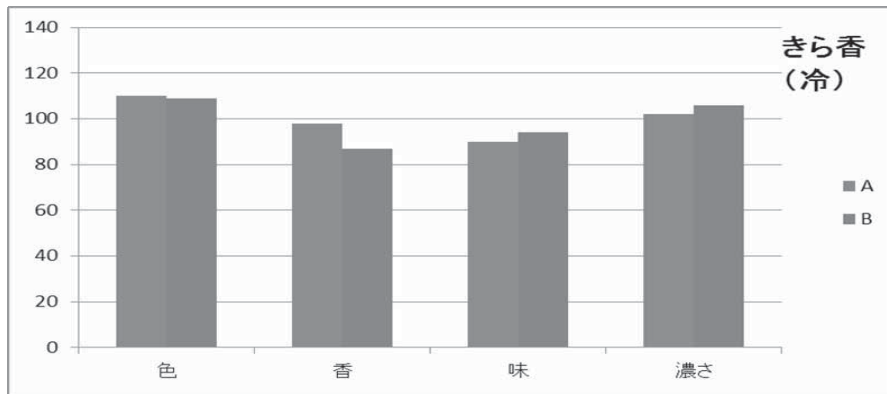


図3 きら香 (冷) の入れ方別合計得点比較

2-2 t検定による有意差の確認

ここではAを急須、Bを冷凍戻しとし、有意差がある項目とない項目に分けた。有意確率5%未満を有意であるという基準とした。

表2 急須と冷凍戻しの項目別t検定結果 (有意差なし)

○実験1、2、3のA (急須) とB (冷凍戻し) の分析		
袋井茶 (常温) 味	袋井茶 (常温) 色	袋井茶 (常温) 濃さ
きら香 (常温) 味	きら香 (常温) 濃さ	袋井茶 (温) 味
袋井茶 (温) 濃さ	袋井茶 (温) 香り	きら香 (温) 味
きら香 (温) 色	きら香 (温) 濃さ	きら香 (温) 香り
袋井茶 (冷) 味	袋井茶 (冷) 色	袋井茶 (冷) 濃さ
袋井茶 (冷) 香り	きら香 (冷) 味	きら香 (冷) 色
きら香 (冷) 濃さ	きら香 (冷) 香り	

表3 急須と冷凍戻しの項目別t検定結果 (有意差あり)

○実験1、2、3のA (急須) とB (冷凍戻し) の分析
きら香 (常温) 色
きら香 (常温) 香り
袋井茶 (温) 色

この結果から、急須のお茶と冷凍戻しのお茶では「味」「色」「濃さ」の項目でほとんど違いがないことが明確化された。

(4) 考察

- ・ 香り以外は有意差がないので、お茶を冷凍しても味や見た目、濃さは問題ない。
- ・ 冷たい状態では香りにも有意差がなかったため、冷凍戻しのお茶に適しているのではないか。
- ・ 袋井茶ときら香で比較したとき、袋井茶の方が有意確率で大きく差が出たため、きら香は冷凍茶に適しているのではないか。
- ・ お茶を冷凍すると香りが落ちる。
- ・ 香りをどうするかが問題。

4. 結論

ーリーフ茶拡売のためのマーケティング策ー

袋井茶、きら香ともに急須と冷凍戻しの「味」「色」「濃さ」に関してはほとんど有意差がなかった。このことからお茶を冷凍しても急須で入れたお茶と同等のお茶が飲めることがわかった。

例えば、この結果を考慮すると、高級茶を手軽に飲むマーケティング策として以下のような策が考えられる。

- ・『ワンカップ冷凍高級茶』 お茶をカップ等に入れ冷凍した商品
- ・『高級茶冷凍パック』 1杯分ごとに小分けした冷凍パック商品

これらの新商品をeコマースで販売することによる高級茶の拡売が可能となると考えられる。

実際の商品化にあたっては、香りを維持する方法が課題である。

以上

機能性成分を活用した冷凍マグロ廃棄部分の高度有効利用に関する研究

東海大学 海洋学部 落合研究室
連携ゼミ：静岡理工科大学 吉川ゼミ
指導教員：教授 落合 芳博
参加学生：篠原 愛実（代表）

【要約】冷凍マグロをチェーンソーで裁断する時に生じる削りかす（引き粉）の食用としての有効利用を図るため、スープと「つみれ」の試作を行うとともに、成分、品質、安全性についての検討を行った。

【目的】静岡県のマグロ水揚量は日本一である。しかし、冷凍マグロを解体する際に出る切りくず(引き粉)は、現在利用されずに廃棄されている。貴重な資源を無駄なく利用し、有効利用の面でも日本一を目指す。そこで本研究では、引き粉の食用としての利用方法について検討した。

【材料および方法】2014年4月10日および2014年7月10日に静岡中央卸売市場にて採取した冷凍メバチの引き粉（図1）をフリーザーバックに小分けにし、 -80°C にて保存した。流水中で解凍後、試料として用いた。まず、試料の一般成分分析を、常圧加熱乾燥法、灼熱灰化法、ソックスレー抽出法、ケルダール法を用いて測定した。次に、色調と臭気の変化について測定を行った。次に、商品化を目指して引き粉と野菜などを煮込んだ様々なスープや、引き粉を使ったつみれ（魚団）の試作を行い、官能評価を5段階評価にて実施した。つみれの破断強度の測定も行った。さらに、引き粉、エキス、スープに含まれる遊離アミノ酸含量の測定も行った。また、ヒスタミン中毒の可能性について検討するため、市販キットを用いてヒスタミン濃度の測定を行った。

【結果および考察】引き粉の一般成分は、水分が68.2%、脂質が0.1%、たんぱく質が3.2%という結果になり、ほとんどが水分であった（図2）。色調については、 L^* 値は0日目に30.9、3日目では35.1に上昇した（図3）。一方、 a^* 値は0日目に21.4だったが、3日目には5.5と大きく減少した。 b^* 値は0日目に14.1で、3日目には9.3と減少した。外観は0日目には赤色を呈していたが、3日目には全体が茶色に変色した。臭気は冷蔵0日目には-89だったが、1日目には24、2日目は33、3日目には59と上昇した（データ省略）。次に、引き粉からスープ（図4）とつみれ（図5）を調製した。引き粉やスープの遊離アミノ酸分析の結果、抗酸化作用をもつアンセリン(Ans)、肝機能改善作用を示すタウリン(Tau)が多く含まれていた。また、スープにはストレス抑制効果がある γ アミノ酪酸(GABA)もわずかながら存在した（図6）。旨味や甘味に関係するグルタミン酸(Glu)やグリシン(Gly)も多く含まれていた。官能評価の結果、調製したスープは洋風のもの、つみれはスープカレーの具材としての使用が好まれた（図7）。引き粉の生臭さや食感の悪さが課題となったが、炒めるなどの調理方法、香草類の使用によって評価が改善した。また、つみれは小麦粉などのつなぎのみでは弾力が出なかった。そこで、ゲル化剤(味の素アクティバTG-AK)を添加したつみれを試作した。その結果、破断強度はゲル化剤無添加で113g、0.5%添加で142g、1%添加で155gであった（図8）。破断凹みはゲル化剤無添加で5.0mm、0.5%で5.2mm、1%添加で5.5mmだった。添加5%および10%のものも作成したが、苦味が

強かったため、1%添加が好ましいと判断された。官能評価においても、ゲル化剤の添加により評価が大幅に改善された（図9）。一方、ヒスタミン濃度は、0日目には1.6 ppm、1日目には2.3 ppm、2日目には4.1 ppm、3日目には4.4 ppmと若干増加したが、いずれも中毒発症レベル(100ppm)以下であった（図10）。

【研究成果】これまで、肥料などにしか利用されていなかった冷凍マグロの引き粉を用いて、健康機能性成分に富み、かつ美味しいスープと、歯ごたえのある「つみれ」を作ること成功した。

【地域への提言】引き粉のスープとつみれを製品化し、静岡産のグルメとして積極的に発信していただきたい。静岡県がマグロの水揚げ量だけでなく、有効利用の面においても日本一であることをアピールしていただきたい。

【地域からの評価】静岡市場の関係者からは、スープとつみれの風味や食感について高い評価を得ている。引き粉の生成過程において、まれに小さな金属片が混入する可能性があることを指摘されたため、スープについては全く問題ないが、つみれについては原料の裏ごしを慎重に行うことで対処していきたい。



図1. 引き粉

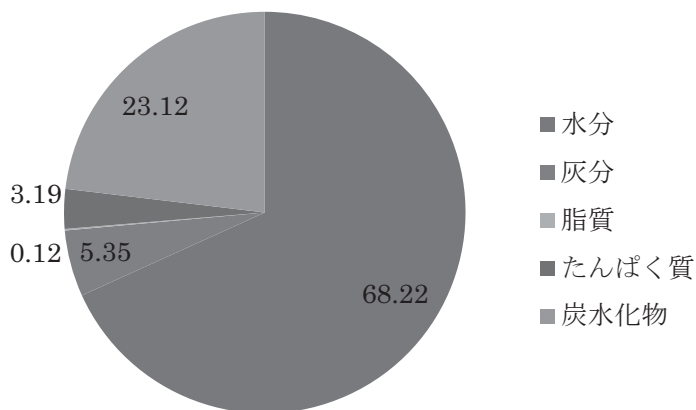


図2. 引き粉の一般成分.

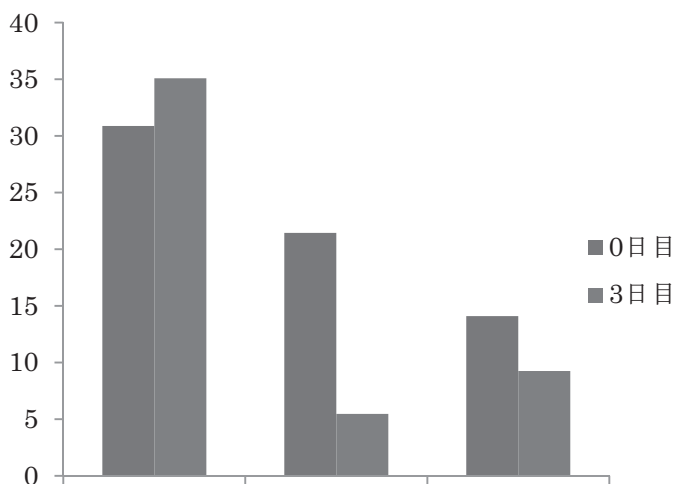


図3. 解凍後、冷蔵中における引き粉の色調変化.



図4. 引き粉から調製したスープ.



図 4. 引き粉から調製した
つみれ.

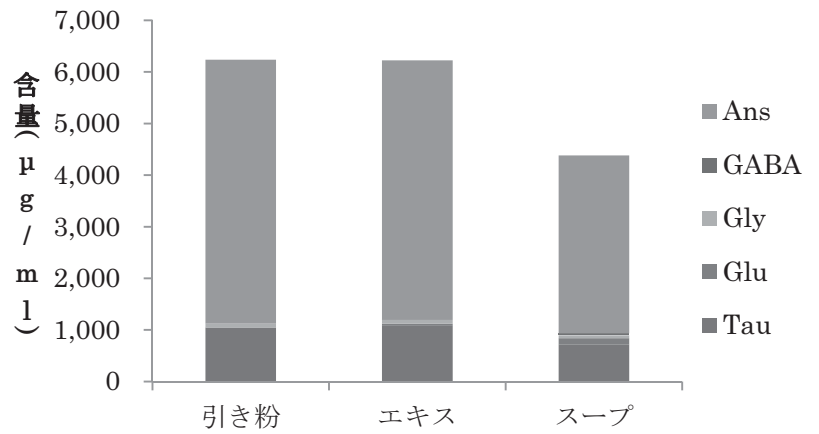


図 6. 遊離アミノ酸組成.

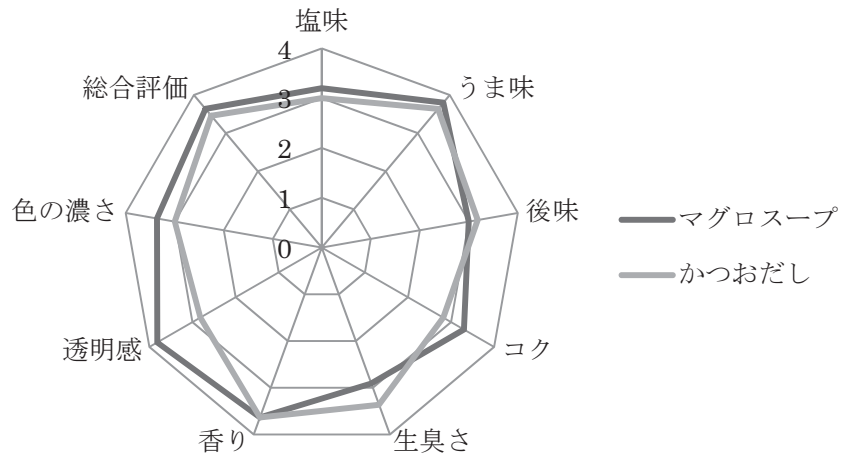


図 7. スープの官能評価結果.

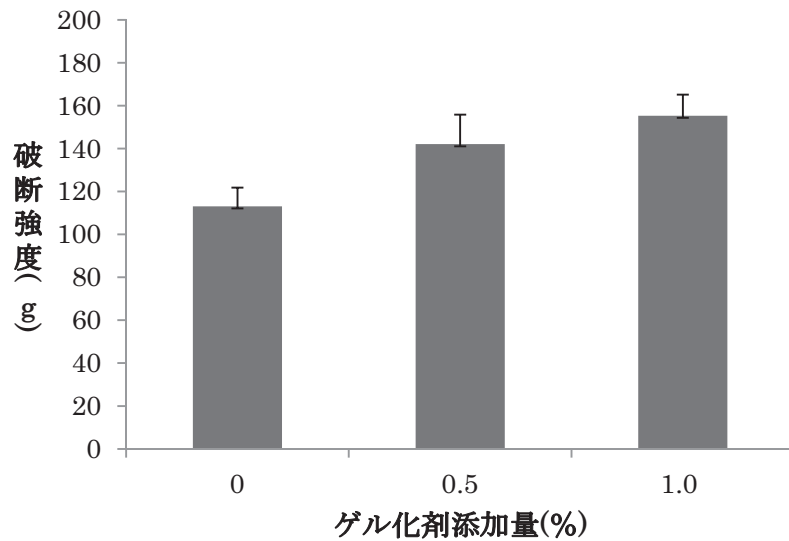


図 8. ゲル化剤添加による「つみれ」の物性改善
($n=3$).

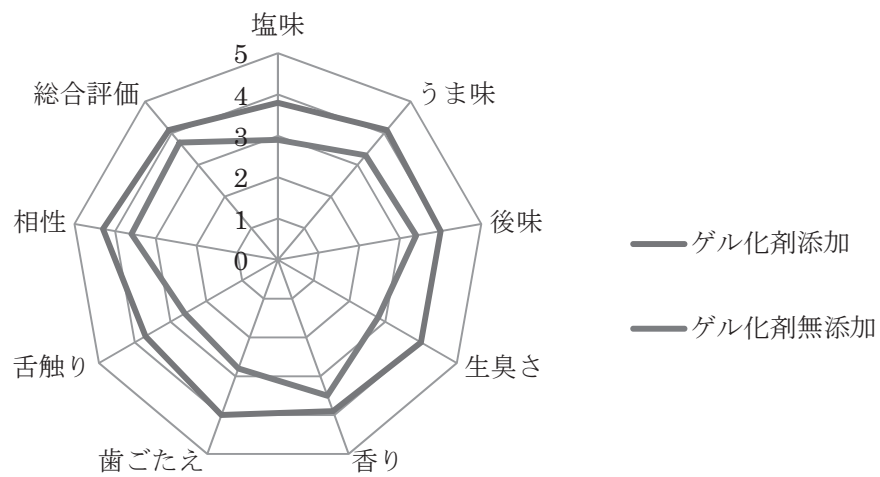


図 9. つみれの官能評価結果.

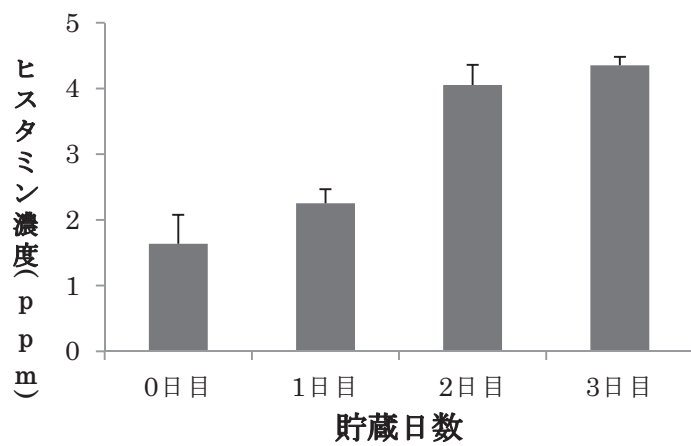


図 10. 引き粉の冷蔵中におけるヒスタミン濃度の変化 ($n=3$).

参加型世代間交流による高齢者・学生の相互効果と過疎地域活性化に及ぼす影響の検討

常葉大学 健康科学部 杉井ゼミ・渡部ゼミ・青田ゼミ

指導教員：准教授 杉井たつ子（代表）、教授 渡部洋子、准教授 青田安史

参加学生：熊切（学生代表）、勝呂、森下、菊池、杉本、瀧詰、池村、尾崎、増田

協力学生：安倍、加藤、山口、木下、増澤

要約

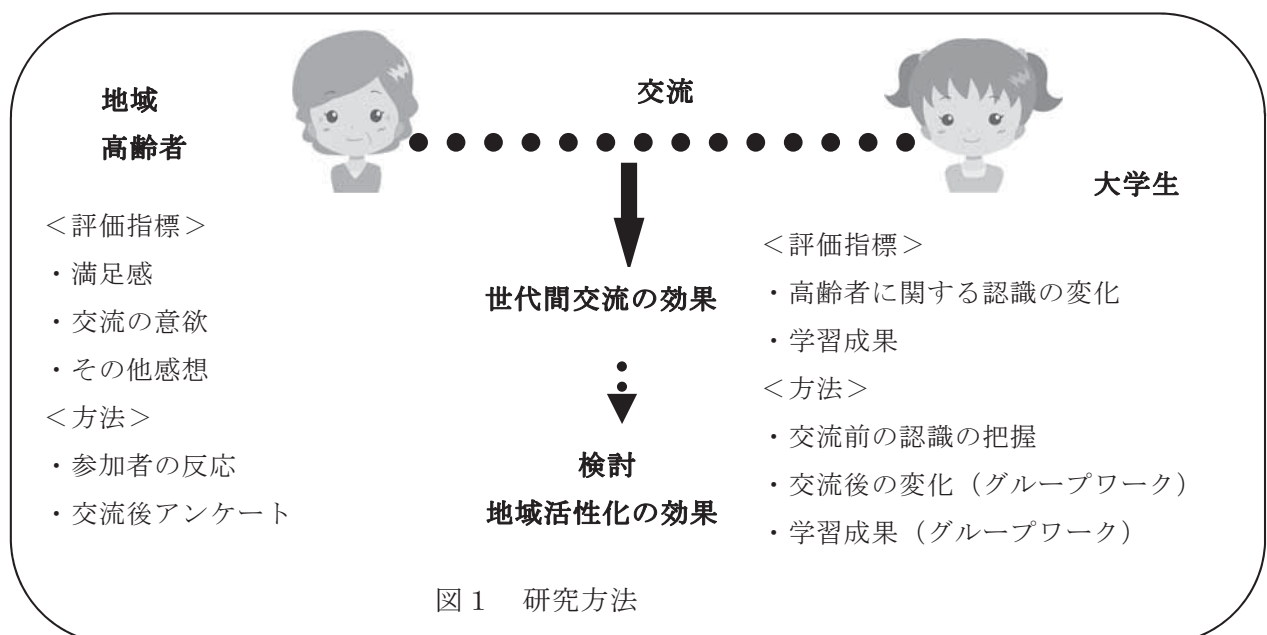
若者の流出と高齢化が進行する過疎地域において、大学生と地域高齢者による世代間交流を実施した。交流をとおして、大学生は高齢者のもつ能力や活力を確認し、高齢者のイメージを高め、理解を深めることができた。医療従事者を目指す学生にとって、貴重な体験となった。また、高齢者から認められることで意欲的になり、自分たちが地域に貢献できることを学んだ。地域の高齢者は、接する機会の少ない大学生との交流をとおして、元気になったことを実感したと回答している。後期高齢者が多い過疎地域では、ともすると日常生活のマンネリ化や固定的な人間関係になりやすく、若い大学生との交流は良い刺激となった。今回は、単発的な実施で限界はあるが、過疎地域と大学生との交流事業は、相互に効果があることが認められた。

I. 研究目的

世代間交流をとおして、学生が得られた学びと、高齢者に及ぼす健康面での影響について分析し、世代間交流の効果的な手法を検討する。

II. 研究方法

本学の看護学科・静岡理学療法学科の学生が川根本町高郷地区の「ふれあい・いきいきサロン」に参加し、高齢者と交流する。交流会は、学生が教員の助言のもと、参加者全員が参加できるよう工夫し、準備した。世代間交流の効果について、高齢者と大学生の立場から分析した。その効果を踏まえ、地域活性化に及ぼす効果について考察した。（図1）



Ⅲ. 研究活動の概要

1. 世代間交流事業の開催

月 日 2014年11月7日
会 場 川根本町高郷地区集会所
参加者 高齢者34名、学生9名、教員3名
内 容 自己紹介・手遊び・ゲームなど



交流会の様子 静岡新聞 2014. 11. 8

2. ゼミ学生の活動

- 1) 学生ミーティング・交流会準備 7回
①10/15 ②10/21 ③10/28 ④11/4 ⑤11/5
⑥12/2 ⑦1/25 実人員14名、延人員60名参加（当日参加できなかった学生を含む）
- 2) 研究打合せ 3回 ①8/29 ②10/7 ③1/27

Ⅳ. 研究結果

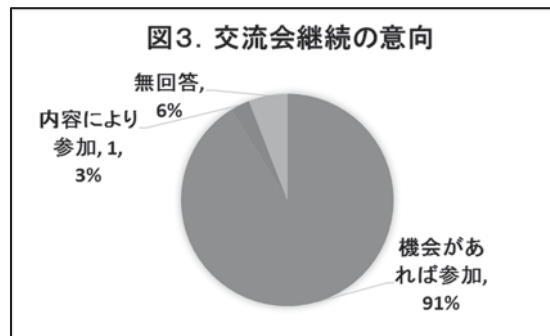
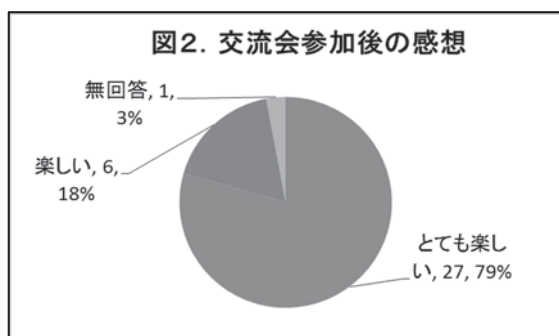
1. 地域高齢者から見た世代間交流事業の評価

参加者（地域の高齢者他運営ボランティア1名を含む）34名に、交流会実施後にアンケート調査を実施した。なお、参加者の属性は次のとおりであった。

性別：男性2名、女性24名、不明8名

年齢：60歳代1名、70歳代9名、80歳代13名、90歳代3名、その他1名、不明7名

1) 交流会の感想と継続の意向



2) 大学生と交流した感想

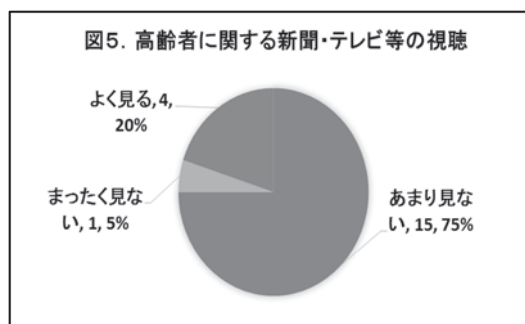
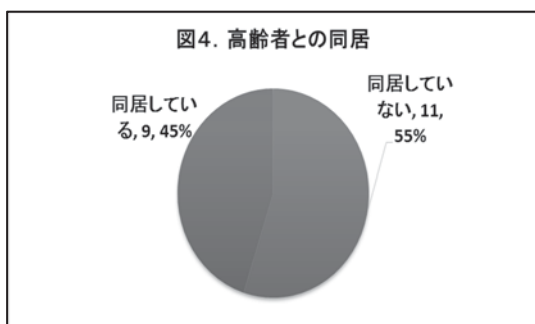
感想では、楽しかった・おもしろかった9名、若さのパワーをもらった・若くなった気分がした9名、交流して嬉しかった3名、元気になった3名が多かった。（複数回答あり）

2. 大学生から見た世代間交流事業の評価

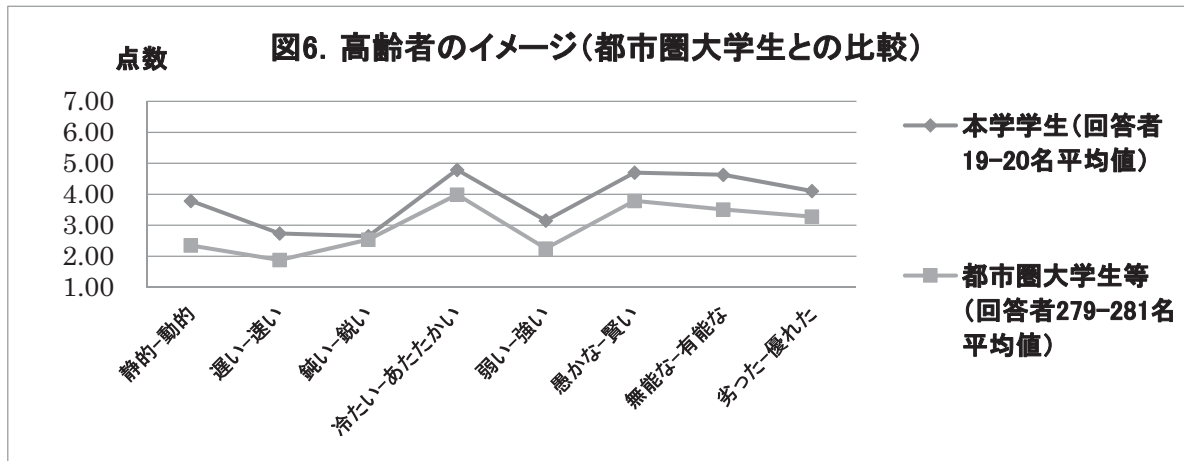
1) 交流会参加前の学生の状態

交流会に参加する前に、学生に高齢者との関わりと関心及び高齢者に関するイメージについてアンケート調査を匿名で実施した。なお、調査には多く利用されているMD法を活用した。

① 日常の高齢者との関わりと関心



②高齢者のイメージ



2) 交流をとおして変化した高齢者のイメージ

交流会参加後に学んだことや感想を書き、グループワークをとおしてまとめた。

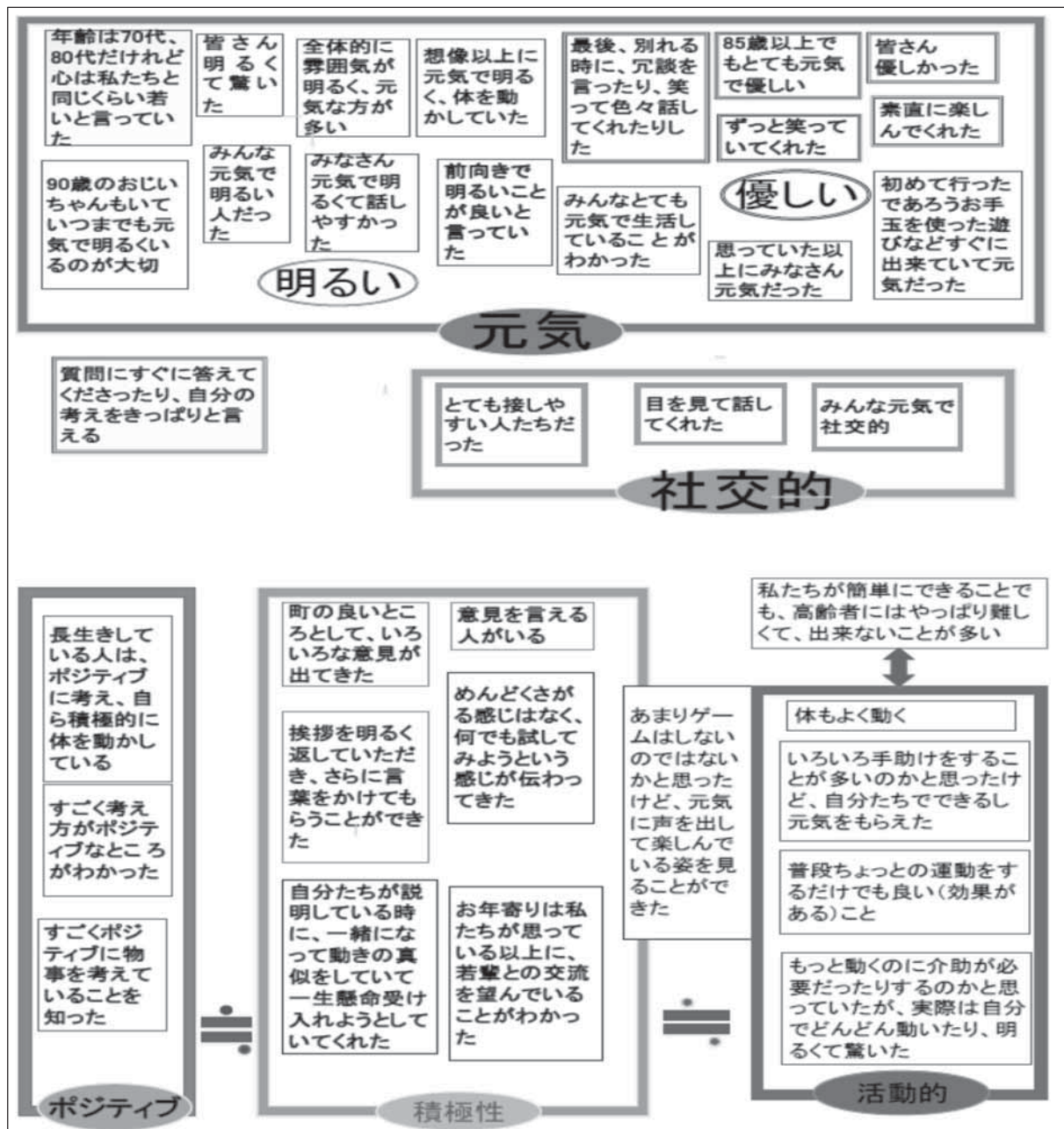


図 6. 交流をとおして変化した高齢者のイメージ

3) 交流をとおしての学生の変化

参加した学生の所感の中から、学生の変化について抽出した。高齢者との交流をとおして、高齢者の理解や交流に関する意欲的な意見が出た。

- ・(参加前は)あまり乗り気ではなかったが、笑顔に癒され、行ってよかったと思えた。
- ・もっと自分の祖父や祖母と話がしたいなって感じた。
- ・もっと深く心理や考え、気持の面などを理解していくように努める必要があると思った。
- ・元気を与えに行ったつもりが、逆に元気をもらった気がする。

また、学生自身が交流をとおして高齢者から励ましや知識を得ていた。

- ・これからがんばって物事をしていかないといけないと思った。
- ・教えることより教えてもらうことが多かった。

V. 研究成果と考察

世代間交流は「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」と定義されている²⁾。多くの地域で意義を認められて実践されている反面、客観的な評価が課題となっている³⁻⁵⁾。今回は単発的な開催であり、短期的効果ではあるが、大学生と高齢者の世代間交流における効果を考察する。

1. 過疎地域の高齢者に及ぼした効果

大学生との交流について、参加した高齢者は「楽しかった」と回答し、継続開催を希望している。全国的調査でも、高齢者の約6割が若い世代との交流を望んでいることが報告されており⁶⁾、過疎地域の高齢者の多くは若者との交流を望んでいることが明らかとなった。

地域の高齢者は、大学生との交流をとおして「若さ」を感じ、自分も元気になったと実感したことを回答している。高齢化が進行している過疎地域では、大学生と交流する機会はほとんどなく、日常と異なる教室の雰囲気が高齢者にとって良い刺激になったと考える。

参加する高齢者には、主体的に参加できるよう⁷⁾、地域の良いところを発表する役割を担ってもらった。交流会でいきいきと学生の前で発表することをとおして、自信や満足感を感じることに繋がったと考える。

2. 大学生に与える影響

参加した大学生の半数以上は高齢者と同居しておらず、高齢者に関する関心は低い状況であった。看護学生のもつ高齢者観については、一般の大学生よりも低いことが多くの先行研究で指摘されており⁸⁾、参加前に匿名アンケート調査により把握した。

学生(当日参加できなかった学生を含む)は、都市圏大学生・短大生の高齢者イメージ¹⁾と比較して、肯定的なイメージを持っていた。今回の世代間交流をとおして高齢者と交流することで、さらに、高齢者の肯定的イメージが多くなったことが確認できた。先行研究においても、実習などで看護学生が高齢者と実際に関わることをとおして、肯定的イメージが多くなることが指摘されている⁹⁻¹⁰⁾。交流をとおして、地域で生活する高齢者のたくましさを感じ、能力を実感して、高齢者の理解が深まったことが確認できた。

また、自分たちの訪問や企画が高齢者に受け入れられ、喜ばれた体験をとおして達成感を感じ、高齢者を理解する意欲につながっている。大学生にとって、世代間交流は有効な体験学習となることが示唆された。

VI. 地域への提言

世代間交流が大学生と地域の高齢者の両者にとって好影響があることが認められた。本学は、地元出身者が多い特徴があることから、大学生が地域に関する関心を高め、魅力を感じることで、地域で活躍する若い人材を育成することが期待できる。大学生は地域の資源であり、大学における世代間交流事業を活性化していきたい。

また、世代間交流が地域高齢者の健康寿命を延伸することの効果は期待できるのではないかと予想されている¹¹⁾。特に、高齢者の割合が高い過疎地域において、高齢者と大学生の世代間交流を定期的に開催することは、高齢者の日常生活を活性化する機会をつくることで、地域活性化の効果は期待できる。今後、交流事業を継続的に実施し、長期的な評価を行いたい。

謝辞

本研究にあたり、御協力をいただいた川根本町の職員の皆様に感謝いたします。

<参考文献>

- 1) 高橋一公. 将来像としての「老人観」の測定(1) 一般的老人イメージのSD法とテキストマイニングによる分析を通して. 東京未来大学研究紀要, 2012 ; 5 : 61-72
- 2) 藤原佳典. 世代間交流における実践的研究の現状と課題 老年学研究の視座から. 日本世代間交流学会誌, 2012 ; 2(1) : 3-8
- 3) 村山陽, 藤原佳典, 安永正史, 他. 日本版世代間交流行動尺度の作成. 日本世代間交流学会誌, 2011 ; 1(1) : 27-37
- 4) 大場宏美, 藤原佳典, 村山陽, 他. 世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度開発の試み. 日本世代間交流学会誌, 2013 ; 3(1) : 59-65
- 5) 名嘉一幾, 徳丸定子. 世代間交流プログラム実践及び評価の検討 客観的評価としてのストレス度測定の導入. 日本家政学会誌, 2012 ; 63(2) : 51-60
- 6) 内閣府. 平成 26 年版高齢社会白書 : 34-35
- 7) 田渕恵, 権藤恭之 . 高齢世代が若年世代からポジティブなフィードバックを受け取る場面に関する研究. 日本世代間交流学会誌, 2011 ; 1(1) : 81-87
- 8) 今井雪香, 片岡万理, 柳田泰義. 老人イメージに関する調査(2) 看護大学生と一般大学生との比較. 神戸大学発達科学部研究紀要, 1998 ; 6(1) : 225-233
- 9) 岡本麗子, 榊原千佐子, 小堀ゆかり, 他. 老年看護学における看護学生が捉えた高齢者イメージの変化 2年次から3年次の分析を中心に. 北海道文教大学研究紀要, 2011 ; 35, 65-74
- 10) 張平平, 大塚眞理子, 辻玲子, 他. 看護学生と地域高齢者との世代間交流がもたらした成果 文献研究を通して. 埼玉県立大学紀要, 2013 ; 15, 43-51
- 11) 草野篤子, 藤原佳典, 村山陽. 地域を元気にする世代間交流. 公財) 社会教育協会. 2013
- 12) 中井孝章(編). 福島カヤ子, 大西田鶴子. 世代間交流実践の展開. 大阪公立大学共同出版会. 2013

富士ブランド認定品を活用した観光振興プランの策定

常葉大学 経営学部 大久保ゼミ 3年

指導教員：教授 大久保あかね

参加学生：鈴木真衣子、大石純、竹内寛也 他

1. 要約

2013年度からゼミで取り組んできた富士市の観光振興に関して、本年度は富士ブランド認定商品に対するモニタリング調査と認知度調査、出張ビジネスパーソンに対する消費行動調査、四日市工場夜景視察を実施した。その結果から、富士市の観光振興策として居酒屋バスの運行、工場夜景ツアーの商品化、ストーリーのあるお土産開発の3つのプランを提案する。

2. 研究の背景と目的

私達大久保ゼミ3年は、2013年度から富士市の観光振興を考えてきた。富士常葉大学（常葉大学富士キャンパス）は、富士からバスで20分と、市街から離れていて、大学生と街との接点が少なく、それまで富士市について知る機会が乏しかった。しかし、富士市に通う大学生として、富士市をもっと知りたいと思ったことがこの取り組みのきっかけである。

そこで初めに、1年生に富士市について知ってもらうことを目的とした工場夜景ツアーを自主企画・運営して、富士市の新しい魅力を探る方法を考えた。このツアーを実施したことで、富士商工会議所青年部（富士工場夜景倶楽部）から2月の定例会の参加を呼び掛けてもらうこととなった。このように地域と繋がったことも、ゼミ活動と研究の励みになっている。

さらに2014年4月には、富士商工会議所から富士ブランドパン・スイーツ部門を活性化させたいとの依頼も受けた。富士ブランドとは、富士商工会議所が富士市にある素材などを活かした特産品を認定し、地場産業の活性化や全国への発信を目的とした活動である。私達はこの工場夜景と、富士ブランド認定品を組み合わせた観光振興プランを検討することにした。

富士市は産業都市であり、観光のイメージが乏しい。しかしその反面、出張ビジネスパーソンが多いという特徴がある。したがって観光プランはターゲットを出張ビジネスパーソンに設定し、富士市の重要顧客であるビジネスパーソンの満足度を上げることを目的とした。

3. 2014年度の研究活動

本年度は以下のようなスケジュールで、研究に取り組んだ。

5月 「富士ブランド」パン・スイーツ部門のモニタリング調査

7月 出張ビジネスパーソンを対象としたアンケート調査

→富士ホテル旅館組合様にご協力いただき、

8月 富士商工会議所でインターンシップに参加

→富士ブランド第11期認定審査会のアシスタントを担当し、審査の様子を学んだ

10月 第2回 富士山紙フェア（有）フジビジネス様との合同ブース出展

→来場者を対象に「富士ブランド」の認知度調査を実施

11月 富士山麗アカデミック&サイエンスフェアのポスターセッションに参加

（有）フジビジネス様との商品開発打ち合わせ

1月 四日市工場夜景視察ツアー

→四日市商工会議所、四日市観光協会、まると四日市地域ブランド実行委員会と交流

4. 富士市の抱える課題の整理

富士市の人口は253,297人であり、産業別就業者の比率は、第一次産業が2.6%、第二産業が41.4%、第三次産業が56.0%と図1のとおりである。産業面では、地下水を利用した製紙産業が盛んであり、製紙工場数は日本一である。市内での紙・板紙類の総生産量は日本全体の11.6%あまりを占め、特にトイレットペーパーは321,925t、全国比率31.5%で生産量日本一を誇る。このように、富士市は産業都市であり、観光都市のイメージとは程遠い。

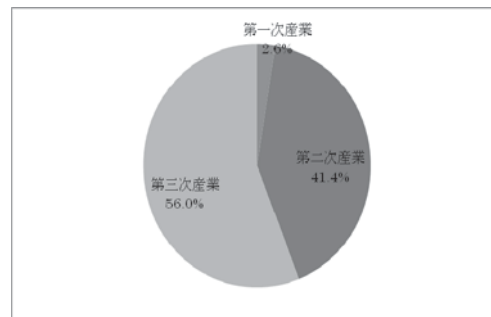


図1. 富士市の産業別人口比率

しかし、富士市の宿泊客は60万1,524人（延べ人数：平成24年度静岡県発表）で、その大半が出張ビジネスパーソンといっても過言ではない。出張ビジネスパーソンは、富士市のホテルにとって「大切な顧客」である。つまり富士市は出張ビジネスパーソンの「もてなし」エキスパートな街にするべきではないだろうか。そのためには、ビジネスパーソンは富士市の観光客とし満足度を高める努力が必要となる。

このことから、富士市の課題は、①産業都市の歴史から観光のイメージが薄い、②富士市の宿泊客60万人の大半は出張ビジネスパーソンと推測できる、③法人契約が多く、個々の宿泊客の行動が把握できていない、の3点に集約されることが分かった。

5. 課題解決のための調査

以上の3つの課題を確認し、解決に導くヒントを得るために3つの調査と1回の先進地視察を実施した。

1) 富士ブランド認定品「パン・スイーツ部門」のモニタリング調査

目的：大学の後輩に吉原商店街を知ってもらい、富士ブランドの種類や味、魅力を知るため

方法：吉原商店街で富士ブランドのスイーツを商店街マップと富士ブランドパンフレットを

使った「買いに行く」「試食する」オリエンテーリング・イベントを開催し、10項目で評価表にチェックを入れながら試食し、その結果をレーダーチャートで整理した。

調査の結果：

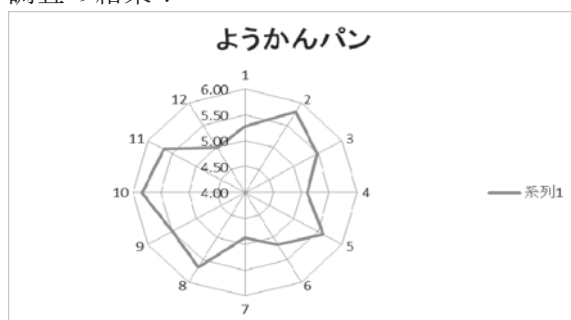


図2. 「ようかんパン」の評価

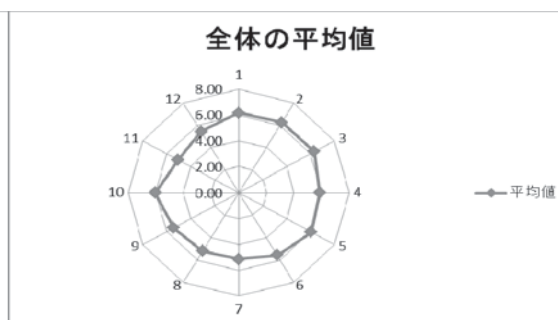


図3. モニタリングした商品の評価平均

結果の考察：富士ブランドのスイーツは「富士市民に愛されているお菓子」である一方、販売場所が限定されているなど、「富士市民以外にはアピールが弱い」ということが分かった。

2) 出張ビジネスパーソンの消費行動調査

目的：富士市に出張などで来訪したビジネスパーソンに対して、滞在中の消費行動（食事やお土産など）、富士市のイメージなどのアンケートをし、富士市における滞在の満足度向上や富士市への再訪のきっかけを探る。

方法：質問紙による調査①（留め置き法）

協力者：ホテル・旅館組合加盟館 24 件

調査期間：7 月末まで（夏休み前）

配布数：2000 枚（回収枚数 192 枚）

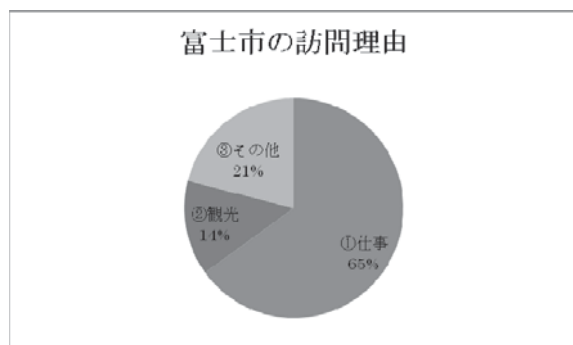


図 4. 富士市の訪問理由割合

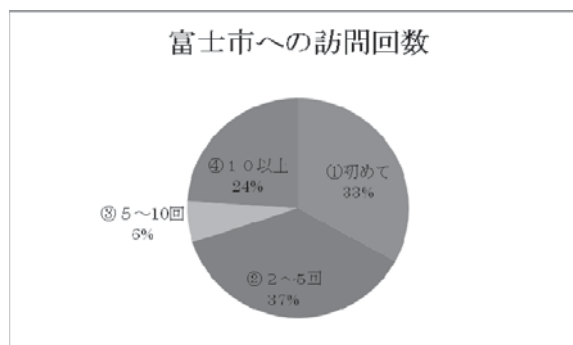


図 5. 富士市への訪問回数割合

調査結果・考察：富士市のイメージについてのアンケートの結果、「自然環境が良い」や「なじみがある」の回答が最も多く、回答者が頻繁に富士市に訪れていることが予想される。さらに、富士市への滞在日数の半数以上が3泊以上であること、訪問回数も3分の2以上が3回以上、4分の1が10回以上の来訪となり、リピーターが多いことがわかる。

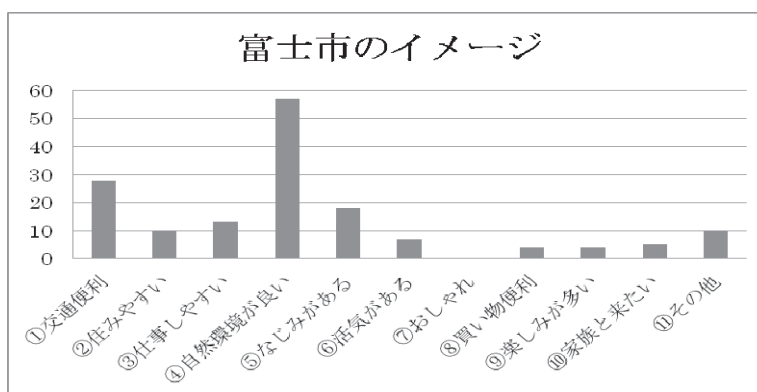


図 6. 富士市のイメージ

3) 紙フェアにおける富士ブランド認知度調査

目的：富士市の人々がどのくらい富士ブランドを知っているか認知調査を行い、出張土産を買ってもらうためのヒントを探る。

方法：①質問紙による調査②紙フェアにおける参加者への認知調査（対面調査）

協力者：富士商工会議所、有限会社フジビジネス他

回収枚数：195 枚

調査結果：富士ブランドを知っている人は全体の6割で、店舗や広告・新聞で見たという人が多かった。富士ブランド商品で何が好きかを調査したところ、ランキング5位以内に3つも「榊田子の月」の商品が入っていたことが分かる。お土産として持っていく商品も田子の月の商品という答えが大半であった。

結果の考察：富士ブランドは、富士市ではある程度認知されているものであることが分かった。しかし、富士ブランドと知られている商品は偏りがあった。また、どの商品が富士ブランドなのか分かりにくいという意見があった。また、土産にするには日持ちするものがないことも、「土産といえば田子の月」という回答に結び付いていると推察される。

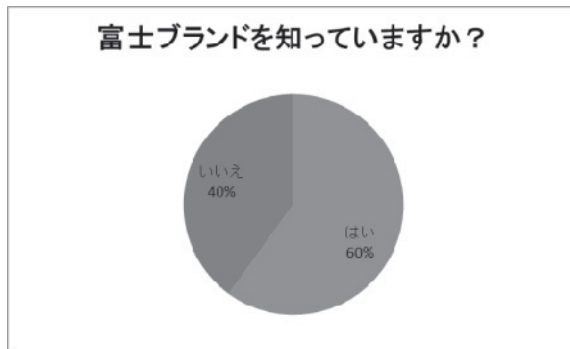


図 7. 富士ブランドの認知度

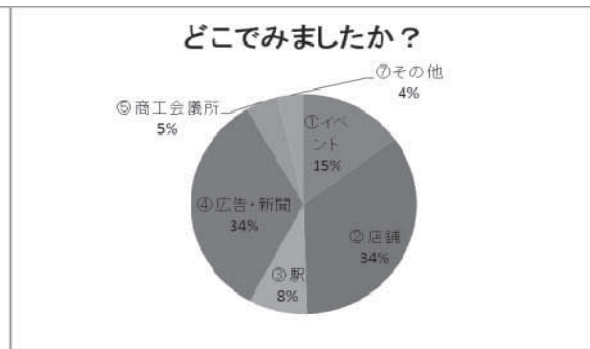


図 8. 富士ブランドを認知した場所



写真 1. 調査風景①



写真 2. 調査風景②

4) 先進地視察 四日工場夜景ツアー

目的: 富士市と産業構造などが類似し、工場夜景の先進地である三重県四日市市を訪問した。

四日市市と富士市との共通点は、産業都市、過去の公害のイメージ、港の存在、地域ブランド認定品の存在などが挙げられる。また富士市とは異なる「工場夜景を海上・陸上・上空から立体的に」体験をすることで富士市の発展へのヒントを探ることを目的とした。

方法: 1月23～24日に四日市工場夜景視察バスツアーを実施した。

調査結果: 四日市と富士の工場夜景の似ている点や学ばなければならない点があった。

四日市ブランドは積極的に様々なイベントに参加しているなど、四日市の取り組みから学ばなければならない事を多く発見できた。また製茶業も盛んである点も富士市と類似していることが、現地視察を通じた発見であった。

結果の考察: 四日市市と富士市にはいくつも共通するところがあり、中でも過去の公害は今でも良くないイメージとして残っているという事実があった。この悪いイメージを払拭していくために工場夜景や観光ツアーで新たなイメージを作っていきたいとの言葉があった。富士市でも同じ取り組みが有効ではないかと感じた。また、四日市と富士市は工場夜景や四日市ブランド等、類似した取り組みも多いことが再確認できたことで、これまで以上に協力関係を築いていくことが、富士市の工場夜景、富士ブランドの成功に繋がると確信した。

以上の3つの調査と1回の先進地視察から富士のお土産、富士ブランドと富士山と工場夜景を観光資源にしたいという思いを強くした。

6. 地域への提言

富士市に出張するビジネスパーソンの満足度を上げるために2つの方向性を考えた。

- 1) 富士市での出張滞在中の「楽しみ」を作る
- 2) 富士市で出張土産を買ってもらう

この2つの方向性を検討することで、ビジネスパーソンにとって富士市への出張が楽しいものとなり、富士市での消費が増え、富士市に誰かを連れて来たくするように方向づけたい。

富士市の観光資源は、(1)本当に大きい富士山、(2)好況な地場産業と産業による工場夜景、(3)美味しい水と豊かな自然環境、(4)充実した居酒屋&焼肉屋の多さ、である。これを重要顧客(出張ビジネスパーソン)の視点で以下のように組み立て直すことが有効と考える。

- ①美味しい夕食と工場夜景のエンターテイメントで重要顧客の滞在中の満足度をあげる
- ②思わず買いたくなる、話したくなる土産を開発、重要顧客を媒介した富士市のPRをする
- ③仕事以外でも家族や彼女を連れて来たくするような自慢の「ネタ」を教えファンにする

これらによって、重要顧客の消費を増やし、富士市のファンをつくりたい。そのための提案として以下の3つの提案を考えた。

提案① 居酒屋バスの運行

市内のホテル・旅館と居酒屋や焼肉屋を定期的に循環するバスを運行させ、出張ビジネスパーソンが、一人でもおいしい食事を楽しめるシステムを作る。

目的：市内交通網が乏しい富士市での移動手段を確保して、夕食需要を喚起

期待される効果：出張ビジネスパーソンの夕食プランを豊かにする。

地域の住民や、出張ビジネスパーソン同士の新たな出会いも期待できる。



写真 3. 岳南鉄道のイベント風景



写真 4. 富士山と工場夜景

提案② 工場夜景の商品化

富士山を背景にした工場夜景と、工場の中を通る岳南電車から見る立体的な夜景を体感するツアーを企画。大都市圏からは一泊が必要な距離なので、夜景を眺めた翌朝に田子の浦港で、朝採れたてのシラス丼を食べるなど翌日のエンターテイメントとセットで商品化することも可能である。

目的：ビジネスパーソンに仕事以外のエンターテイメントを提供できる。

期待される効果：富士市の新たな魅力に触れ、誰かに話し、連れて来たくになる。

協力体制：富士工場夜景倶楽部、商工会議所青年部

提案③ ストーリーのあるお土産開発

静岡の土産といえば「うなぎパイ」が定着しているが、富士市では富士ブランド認定品をお土産として持ち帰って欲しい。富士市民からの「愛され度ランキング」など、認定品にストーリー付けを行った商品を組み合わせるなど新パッケージ土産品を提案したい。

目的：富士ブランドの新しい販売方法を開拓し、商品を通して富士市の情報(土産話)をご自宅や会社に持って帰ってもらう。

期待される効果：富士市の情報が会社や自宅にお土産と届く。

富士市にとっては、ビジネスパーソンの消費アップも期待できる。

協力体制：富士商工会議所富士ブランド認定委員会、(有)フジビジネス



写真 5. 紙フェアでのセット販売提案



写真 6. 富士ブランド商品

7. 地域からの評価

2015年1月に視察に行った四日市商工会議所から以下のようなメッセージをいただいた。

学生の取り組みについて自分の学生時代には出来なかったことだったので、感心するとともに、勉強になりました。また、地元の経済や、地元を愛する心を活性化するためには学生たちの新しい感受性やセンスが必要なので、これから積極的に話し合う機会を設けて若い意見を取り入れた街づくりができることを期待しています。

今回の活動の延長で、富士商工会議所から次年度のふるさと納税者への特典である「富士ブランド詰め合わせセット」の依頼をいただいた。商品内容として検討しているのは、簡易トイレやウェットタオルを含む『防災いざという時セットA・B』、富士のお茶とスイーツがなんもやしらすの佃煮など、お茶に合う商品を中心とした『富士市のお茶うけセット(甘党・辛党)』、酢味噌やぼん酢、食べるラー油などの『ドレッシング食べ比べセット』、苗木と鉢カバーキットの組み合わせで『苗木&紙紐ハンドメイドセット』など6種を考案中である。

8. 成果

昨年からの活動や研究成果だけで、富士市の観光振興に対して貢献できたとは言えない。しかしながら今日までの活動によって、多くの人と繋がりをもつことができた。それによって、富士市民ではない私達ゼミ生が工場夜景や富士ブランドについて知ることができたのは勿論、就職活動の相談やプライベートで映画を一緒に見に行ける社会人の友達を作ることができた。富士市で出会った皆さんは、富士市をとにかく愛していることがわかり、自分達も「自分の地元や地域を変えるために行動しなければ」という気持ちが強くなっていった。

活動を通して、若い世代が自ら様々な人と繋がり、活動していくことで、地域が盛り上がるきっかけになる可能性を感じた。これこそが、私たちが今できる一番の地域貢献ではないであろうか。この事に気づくことができたことが今日までの活動の成果だと言える。

謝辞

一連の活動を通して、富士商工会議所様、富士工場夜景倶楽部様、(有)フジビジネス様、四日市商工会議所様、四日市観光協会様、まるごと四日市地域ブランド実行委員会様をはじめ、多くの皆様にご協力、ご教示いただいた。ここに改めて深く感謝申し上げます。

地域社会と南米日系人の連携による地域活性化と多文化共生の推進

名称：日本大学国際関係学部福井ゼミナール

指導教員：教授 福井千鶴

参加学生：3名 塩澤奈々 望月沙紀 深井満梨恵

1. 実施事業概要と成果概要

1) 実施概要

本事業は、南米において日系人の生産する産物と静岡県内企業及び日本大学国際関係学部（福井ゼミ）の産学連携により地域企業と南米日系人の活性化の支援を目的に推進した事業である。実施した内容は、ブラジル国パラ州トメアス移住地（アマゾン地帯）のトメアス農業協同組合のジュース工場で搾汁され生産された、アマゾン・トロピカルフルーツ果汁のピューレ、及び、ジャムを使用し、日本には無いアマゾンフルーツを生かし、地域企業により珍しいお菓子の開発を行った。これに加えコロンビア産のフルーツ素材と特産コーヒーを生かしたお菓子の開発も併せて行った。開発した商品は、お菓子店の店頭で販売すると同時に、食品関係のイベントに参加し、会場において展示試食会を行い、アンケート調査を実施した。また、福井ゼミ内で開発の検討会、開発商品の試作と評価などを行い商品化に向けプロジェクトの推進を行った。

2) 開発商品と助成事業の成果

アマゾンのトロピカルフルーツ素材を使用したスイーツの開発について種々検討した結果、時流に乗り話題性のある「焼きドーナツ」と万人に好まれる「フィナンシェ」の開発を進めることとした。また、ゼリーとドライフルーツを使用したスイーツの開発も行うこととした。本助成事業で推進する産学連携プロジェクトに「レマンの森洋菓子店」（小内社長・伊東市八幡野）、「クルールクレール洋菓子店」（有賀社長・三島市松本）の協力が得られることになった。

① 焼き菓子の開発

● 「レマンの森」洋菓子店（伊東市八幡野）との連携プロジェクト

開発商品について協議を行った結果、トロピカルフルーツ素材を生かした「焼きドーナツ」と「バームクーヘンの応用製品」を開発することとした。

トロピカルフルーツのアサイー、マラクジャ、クプアス、グアバを使用し、商品の開発と試作を行い、マラクジャとクプアスを応用した焼きドーナツ、グアバとクプアスを使用したバームクーヘンを市販製品とすることとした。また、アサイーを使用した焼きドーナツは話題性を考慮しイベント用に使用することとした。また、コロンビア特製コーヒーとコロンビア産ベリーを使用した焼きドーナツの開発も行った。

● 「クルールクレール」洋菓子店（三島市松本）との連携プロジェクト

開発商品について協議を行った結果、トロピカルフルーツ素材を生かした「フィナンシェ」と「焼きドーナツ」及びドライフルーツを応用したスイーツを開発することとした。

トロピカルフルーツのアサイー、マラクジャ、クプアス、グアバを使用し、商品の開発と試作を行い、マラクジャとクプアスを応用したフィナンシェと焼きドーナツを市販製品とすることとした。また、ドライフルーツを使用した洋菓子の試作を行った。

② 成果概要

・開発を地域企業と連携で推進し、ブラジル・アマゾンのトロピカルフルーツ素材、コロンビアのフルーツ素材と特産コーヒーを使用して開発した焼きドーナツとクーヘンのお菓子は店頭で販売することを可能にし、好評であった。

ブラジル産フルーツの香り 「伊東クーヘン」誕生

伊東版 2014年07月01日



完成したバウムクーヘンを紹介する小内さん（左から2人目）と日大の学生たち

■日大生と「レマンの森」協力

伊東市八幡野のレマンの森洋菓子店（小内正敬さん経営）と日本大国際関係学部の学生たちが協力して、ブラジル産のトロピカルフルーツを使ったバウムクーヘンを生み出した。使用したフルーツは赤道直下のトメアスで日本人移住者が生産した「クプアス」と「グアバ」。小内さんは「出来は上々。いつかブラジルの人たちに食べてもらいたい」と胸を張った。

学生たちは同学部の福井千鶴教授のゼミで南米の日系人社会について学んでいる。その一環で、ブラジル産フルーツを活用した商品開発にも取り組んでおり、これまでにまんじゅうやクッキー、ケーキなどを試作した。今回、福井教授が応援したことをきっかけにゼミの学生が伊東市と連携して商品開発に取り組むことになったという。

伊豆新聞記事

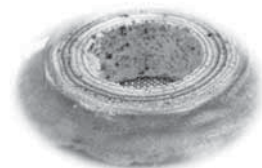
名し「レマンの森」洋菓子店店頭で販売した。イツアーノはブラジル・イトゥ市の市民の呼び名でもあり、かつ、イトゥ市を代表する有名サッカーチームの名称でもある。2014.6.30「伊東クーヘン・イツアーノ」発表試食会開催（右写真）。

・伊東特産の新商品「伊東クーヘン・イツアーノ」が生まれたことにより、伊東市佃市長にゼミ生、洋菓子店の社長とともに新特産品が誕生したことを報告した。この報告が地元紙の記事となり話題を呼んだ。



また、成果物を地域及び東京ビッグサイト等のイベントで展示し試食会を行い、産学連携による地域活性化推進のプロジェクトの成果を広くアピールすることができた。

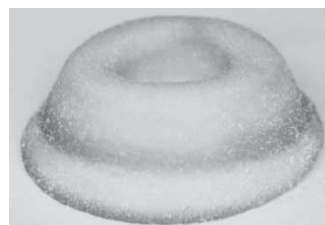
・伊東市の洋菓子店との連携では、伊東市とブラジル国サンパウロ州イトゥ市との友好都市交流が2014年5月に成立したことにより、友好都市交流に関連した記念商品の開発を推進した。伊東市と伊豆半島の特産物を生かしたクーヘンの開発を行い、イトゥ市の名由来する「伊東クーヘン・イツアーノ」と命



伊東クーヘン・イツアーノ

・日大国際関係学部福井教授が佃伊東市長を訪問した折り、伊東市特産のニューサマーオレンジの風味を生かした「うめえら酎」（東海自動車株式会社・伊東市）を使用したイトゥ市との友好交流記念ボトルの提案をしたところ、佃市長が直ぐにその提案を取り入れ記念ボトルが誕生し市販された。記念ボトルの発売開始時期をブラジル・ワールドサッカー日本チームの試合日に合わせ行ったため大きな話題を呼んだ。

この「うめえら酎」を使用した、ニューサマーオレンジの風味豊かな焼きドーナツ「うめえら」をレマンの森店で開発・販売し好評であった。



うめえらドーナツ

③ 開発の動機

◆ 福井ゼミの研究課題

福井ゼミでは南米社会、南米の日系人及び日系人社会を研究課題に取り上げ、かつ、南米の日系人と地域社会を連携した産学連携による地域活性化の推進を実践活動プロジェクトとして推進している。

・アマゾン産トロピカルフルーツの採択

ブラジルのアマゾン地帯にあるトメアス日本人移住地を訪問した折り、トロピカルフルーツの生産とジュース加工が日系人の手により行われ、日本に冷凍ピュレ状にして輸出されていることを知った。日本では、店頭に出回らないためアマゾンのフルーツについて余り知られておらず、珍しい果物が多いことを知り、南米と連携した産学連携のプロジェクトとして、トメアス日本人移住地産トロピカルフルーツに注目し、地域企業の活性化に応用することとし採択した。また、コロンビアにも日系人社会があり、かつ、熱帯系のフルーツと特産のおいしいコーヒーが存在することとコロンビア大使館の協力が得られることからコロンビア産の素材も生かし開発を進めた。

2、ゼミ活動について

福井ゼミ内では、開発する商品の検討会と連携企業との試作、開発した成果物の評価と新開発のトロピカルフルーツ素材を生かしたゼリーの試作と試食会を開催し、評価会を行った。（2014.12.10 福井ゼミクリスマス会にて）参加者約 80 名余、福井ゼミ生約 70 名（2, 3, 4 年生）、伊東国際交流協会会長と幹部の皆さん、東京農工大山田講師とブラジルからの研修生 5 名。



アンケート調査実施

ゼミ内で、これまで開発した商品の評価を基に、今後の開発商品について検討会を行い、ドライフルーツを応用した商品開発が望ましいとの結

論になり、ドライフルーツを応用したお菓子のサンプルを集め試食会を行った。また、トロピカルフルーツとドライフルーツ及び地域の特産品を生かした特徴のあるお菓子の開発を推進し、地域活性化に資することとした。簡易型のドライフルーツ製作器を使用しドライフルーツの試作を行い、本事業の成果を応用した新商品開発を推進することとした。

3. イベントへの参加

助成事業による成果発表と産学連携プロジェクトの推進について広く周知するため、次のイベントに参加し、試食とアンケート収集、アマゾンの森再生支援のため開発した商品を活用し寄付集め（収益金の寄贈）を行った。

- 1) 2014.9.28 伊東国際交流協会主催 異文化理解講座
- 2) 2014.11.14 東京ビッグサイト・アグロビジネスフォーラム
- 3) 2014.11.23 三島フードフェスティバル
- 4) 2014.11.28 富士山麓アカデミック&サイエンスフェア
- 5) 2014.11.29 富士市環境フェア



三島フードフェスティバル
福井ゼミナールブース



東京ビッグサイト
福井ゼミナールブース

4. ブラジル・トメアス日本人移住地の訪問；

地球環境保護の観点から世界的に注目を集める森を再生しながらのアグロフォレストリー農法でトロピカルフルーツとピューレの生産地であるトメアス日本人移住地を訪問（2014.8.16～8.23）し、プロジェクト推進の意見交換を行い、今後、お互いに連携しながらプロジェクトの推進を行うこととなった。

5. まとめ

本事業の助成を受けたことにより、南米の日系人が生産する優れた産物と地域の特産品を生かし、静岡の地域企業との産学連携により新しい商品の開発ができたことで、地域的话题を生む大きな成果を得ることができた。また、ドライフルーツを応用した新商品開発と開発の準備が整えられたことにより、さらなる地域活性化推進に寄与する次期プロジェクト推進の道が開けたことに感謝を申し上げる次第である。

以上

ワークショップ型学習における「学びのきっかけ」の探索的検討 —学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究—

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 土倉ゼミナール

- ・ 【指導教員】 准教授 土倉英志
- ・ 【ゼミ学生】 丹 元希（ゼミ長）、青木伊織、井上由季乃、太田早耶、五明秀平、シュレスタ・サジャニ、中村弥未、藤田若菜（以上、地域共創学科2年）、伊東優太（ゼミ長）、今野文博、薩川涼弥、鈴木仁海、中村和喜、松原 溪（以上、地域共創学科4年）

要約

筆者らはサイエンスカフェの企画・運営を行う実践研究に取り組んだ。本論では、参加者の学びの特徴を明らかにするために、イベント終了後に実施したアンケートの分析を行った。学びのきっかけとして、話題提供の内容はもちろん、ほかの参加者との語り合いが重要であることが示された。ただし、初対面の他者との語り合いは敷居が高い。しかし、アイスブレイク、グループワーク、カフェ、ファシリテーションを工夫することで対話しやすい雰囲気を創出しうることが確認できた。

1. はじめに

筆者らは一年を通じてサイエンスカフェの企画・運営を行ってきた。また、サイエンスカフェに取りくむだけでなく、サイエンスカフェというワークショップ型のイベントを通じて生じる学びに関する調査研究にも取り組んだ。本論ではその成果を報告する。

2. サイエンスカフェとは何か

サイエンスカフェとは「1997年以降に英国、フランスで始まった試みで、コーヒーやビールを片手に気やかな雰囲気、研究者と市民が一緒になって科学技術をめぐる話題について語ろうとする取り組み」である（中村，2008，p31）。サイエンスカフェでは、専門家が一方的に科学技術に関する知識を市民に提供するのではなく、専門家と市民が相互的な関わりを通じて科学技術に対する理解を深めることが目指されている。

土倉ゼミでは2013年度からサイエンスカフェに取り組んでいる。その特徴は（1）大学生が、（2）大学ではない場所で、（3）科学にあまり興味がない人も参加してみたいくなる、サイエンスカフェを実施することを目指している点にある（詳細は土倉（2014a）、土倉ゼミナール（2014）を参照されたい）。なお、2014年度の話題提供のテーマは心理学、募集対象は一般の方（高校生以上）であった（表1）。

表1. 2014年度のサイエンスカフェの概要（全6回）

日程	時間	開催場所	テーマ	責任者	参加者
8/6(水)	14:00~16:00 (120分)	浜松市富塚協働センター	動物にもこころはあるのか？ こころの中の天使と悪魔	松原 薩川	11
8/10(日)	14:00~16:00 (120分)	浜松市富塚協働センター	ウソ？ホント？恋愛の実体 アニメで学ぶ家族の心理	中村(和) 鈴木	15
12/3(水)	14:00~15:30 (90分)	ゲンゴロウの家	人のこころとお金の話	丹・五明	13
12/10(水)	17:00~18:30 (90分)	ガルーダ	ファッション心理学	青木・シュレスタ	11
12/13(土)	11:00~13:00 (120分)	珈琲館ブルックリン	一目惚れの心理	中村(弥)・太田	12
'15/1/21(水)	16:00~17:30 (90分)	Cats-café(浜松南店)	Make up! No!と言えないあなたのための心理学	井上・藤田 今野	16

3. サイエンスカフェにおける学びの重要性

近年、「ワークショップブーム」(荻宿, 2012) や「ワークショップバブル」(中原, 2013) が指摘されている。しかし、ワークショップにかかわる人びとに生じる学びは十分に検討されていない。こうした問題意識のもと、土倉ゼミナールではサイエンスカフェにかかわる人びとの学びを検討することにも取り組んできた。本論では「参加者の学び」に焦点をあてて報告する(サイエンスカフェにかかわる人びとに生じる学びには「企画・運営者である大学生の学び」という側面もある。これについては土倉(2014b,c)を参照されたい)。

4. 参加者の学びの特徴、学びのきっかけ、学びをうながす要因の探索的分析

サイエンスカフェの終了後、参加者に自由記述を含むアンケートに回答してもらった。参加者の学びの特徴を明らかにするために、回答をKJ法(川喜田, 1967)に準じる手続きを用いて、ボトムアップにカテゴリにまとめていった。

まず「話題提供がおもしろかった、勉強になった」というカテゴリが得られた(表2)。

表2. 「話題提供の内容が勉強になった」カテゴリの回答例

- ・ 新しく知れたことが多かったので、そこが楽しいと感じました。(8/10 S.K-6)
- ・ 普段知ることが出来ないことを知ることができて面白かった。(8/10 G.K-6)
- ・ 心理学について良く学ぶことが出来た。奥が深くとても楽しかった。(12/13 O.S-2)

《凡例》

- ・ (8/10 A.N-2) の表記は、8月10日に参加したA(苗字)N(名前)さんの設問2に対する回答を示す。
- ・ 下線は筆者らによる強調。[]は筆者らによる補足。
- ・ なお、記述内容は意図を損なわないように注意して簡略化した部分がある。

心理学の話題提供を聞き、新しいことを知った、学んだという回答が得られた。このカテゴリには、話題提供の全体的な内容に関するもの、個々のトピックに関するもの、様々な回答が含まれた。

ただし、参加者が学んだり、楽しさを感じたのは話題提供の内容にとどまらない。「他者の話を聞いてよかった」というカテゴリが得られた(表3)。これは、一緒のテーブルになった参加者との会話やふれあいがよかったというものである。

表3. 「他者の話を聞いてよかった」カテゴリの回答例

- ・ 初めてあった人と話をすることが新鮮でした。(8/10 W.H-1)
- ・ 人との交流もしやすいし、考えさせられた。(8/10 I.K-6)
- ・ 色々な人の意見を聞くことができ、楽しかった。(8/10 W.N-6)
- ・ 話し合いなどをして、さまざまな意見を聞いて良かった。(12/13 O.R-2)

初対面の人と飲食をともにしながら話をすることは日常生活では稀であり、これが新鮮だったことが確認できる。また、参加者同士の会話、他者からいろいろな意見を聞けたことに楽しさを感じたことがわかる。ほかにも、ふだん話をしないようなトピックについて話をすること、ふだん交流をもたない年代と交流することがよかったといった回答もみられた。

他者の話を聞くということは、自分の話をするということでもある。「自分のことや自分の考えを語ることのおもしろさ」といったカテゴリが得られた（表4）。

表4. 「自分のことや自分の考えを語ることのおもしろさ」カテゴリの回答例

- ・ 自分の事 [を] 話すのは心地よい快感があった。そんな場をいただいて感謝。自分を話すって面白い。[自分の考えを] 出すのは勇気がいるけど、たまには語りたいたいと感じた。 (8/6 H.N-6)

上記で「勇気がいる」と述べられているように、自分のことを話すのはおもしろい一方で、特有のむずかしさももっている（表5）。

表5. 「自分のことや自分の考えを語ることのむずかしさ」カテゴリの回答例

- ・ 集団の中で自分の思いを発言したりすることには少なからず勇気が必要・・・以下略 (8/6 S.M-1)
- ・ 知らない人と初見なのできっかけがないと話し出せない方もいるように感じた。 (8/10 I.K-5)

おもしろさとむずかしさが同居する初対面の他者との語り合いを可能にした要因は何だろうか。アイスブレイク（表6）、グループワーク（表7）、カフェという場（表8）、イベントの雰囲気（表9）を挙げることができる。

表6. 「アイスブレイクがよかった」カテゴリの回答例

- ・ 最初はテーブルに見知らぬ人ばかりで戸惑いましたが、アイスブレイキングが効果的ですぐに打ち解けました。 (8/6 S.T-5)
- ・ アイスブレイク（導入）の際に、だまし絵を取り入れたのは非常によかったと思います。初対面の人とも、動物の絵であればどこに動物の絵があるか一緒に探すことによってすぐに打ち解けやすくなりました。 (8/10 W.T-2)

アイスブレイクが効果的に作用したことが確認できる。アイスブレイクについては「だまし絵クイズ」や「うそつき自己紹介」などを取り入れた。ただし、イベントによってはアイスブレイクを設けないこともあった。筆者らの実感として、アイスブレイクを行った回と行わなかった回で、イベントの雰囲気が違った印象がある。この点については、ビデオデータの分析も含めて、今後詳細な分析を行いたい。

グループワークがよかったというカテゴリが得られた（表7）。参加者に、より積極的にイベントに参加してもらうために、クイズを取り入れたり、おもちゃのお金でショッピングを行ったり、模造紙にカードを貼り付けたり、お面に化粧をするなど、創意工夫に富んだワークを準備した。これがほかの参加者との距離を

縮めたり、イベントに積極的に参加してもらうのに効果的だったことがわかる。

表7. 「ワークがよかった」カテゴリの回答例

- ・ グループワークが楽しかった。 (8/6 H.K-1)
- ・ ゲーム (ワーク) が多く設けられていたこと [が印象に残っている] (8/6 T.N-3)
- ・ [印象的だったのは] ワーク。大人になって、このような体験をなかなかできないので。 (12/3 O.S-3)

イベントの雰囲気については、会場となったカフェに関するカテゴリ (表8)、企画・運営・ファシリテーターを担当した筆者らゼミ生の雰囲気 (表9) に関するカテゴリが得られた。

表8. 「イベントの雰囲気がよかった (カフェ)」カテゴリの回答例

- ・ おいしいケーキ、飲み物などがあり、とてもアットホームな雰囲気で楽しかったです。 (12/3 M.M-1)
- ・ 場所もおしゃれなカフェで素敵だなと思いました。 (12/13 M.A-2)
- ・ お店にもプライベートで来たいと思いました。 (12/13 A.N-2)

表9. 「イベントの雰囲気がよかった (学生)」カテゴリの回答例

- ・ 学生さんたちがみんなで出迎え、もてなしてくれたり、支援してくれたりとても良い雰囲気であれしかった。 (8/6 H.K-1)
- ・ 学生の皆さんが楽しく進めてくれてとてもリラックスできました。 (8/6 S.H-6)
- ・ 一緒にいる学生スタッフの方が明るく話してくれたので、テーブルの雰囲気が打ち解けられてすごく助かりました。 (8/10 A.N-4)

アイスブレイク、グループワーク、カフェという要因は、いずれも注意深く準備を行ったものであり、それが功を奏したことが参加者の感想から確認することができた。また、イベントでは、各テーブルに学生のファシリテーターがつくようにしたが、対話しやすい雰囲気づくりに役立ったことがわかる。

そのほかに「自分のことをとらえなおす」カテゴリが得られた (表10)。このカテゴリには、自分のことや自分の考えをとらえなおすきっかけになったという回答がまとまった。話題提供を聞いたり、あるテーマについて周囲の人びとの意見を聞いたり、自らも意見を述べるなかで、新たな気づきが得られたことがわかる。その対象が自分の考え方や日常生活にも及ぶことも注目される。

表10. 「自分のことをとらえなおす」カテゴリの回答例

- ・ 普段深く考えないことを見直すいいきっかけになりました。 (8/10 W.N-2)
- ・ 当たり前のようなことでも考えることで新しい気づきがあることを知ることが出来た。 (8/10 G.K-6)
- ・ 普段深く考えてなかったことを考えられて楽しかった。 (12/10 I.N-2)

5. まとめ

本論では、参加者の学びの特徴を明らかにするために、イベント終了後に実施したアンケートの分析を行った。学びのきっかけとして、話題提供の内容、他者との語り合いが重要であることが示された。また、とくに初対面の他者との語り合いは敷居が高いものであるが、アイスブレイク、グループワーク、カフェ、ファシリテーションを工夫することで対話しやすい雰囲気を創出できることがわかった。本論の分析はイベント全体をまとめたものであり、各回に行った話題提供、アイスブレイク、グループワーク等に応じて、参加者の感想は異なっている。こうしたイベントの特徴と参加者の感想の関連などの詳細は今後分析を行ってきたい。

さいごに、サイエンスカフェへの参加をうながす／阻む要因について述べておきたい。第3回のサイエンスカフェはふだん子育て支援も行っているカフェで実施した。そのため、このカフェにはふだんから子ども連れの女性客も多く来店している。そこで、このときには子ども連れの方も参加しやすいように、大学の保育士養成課程で学んでいる学生に子どもの保育に協力してもらった。イベント時は参加者のテーブルのすぐ後ろに子どもたちが遊べるマットと玩具を用意し、養成課程の学生に対応をお願いした。これにより育児で多忙な方でも、気軽に参加できるように配慮した。結果として、参加者に喜んでいただくことができた。イベントに興味関心をもっていても、参加を阻む要因があることを実感するとともに、それを取り除く工夫の大切さを感じた。「市民との対話」を重視するサイエンスカフェであるからこそ、こうした点に配慮しながらイベントを企画していく必要があるだろう。

謝辞

本研究の一部は浜松市と浜松学院大学の連携事業として行われました。ご協力いただいた浜松市の職員のみなさま、浜松市富塚協働センターの森下正強所長に記して感謝いたします。また、サイエンスカフェの実施にあたっては、開催場所を提供してくださったカフェの関係者の皆様、参加者募集のお手伝いをしてくださった教職員や学生のみなさまをはじめ、多くの方々にご協力いただきました。あらためて御礼申し上げます。

引用文献

- 荻宿俊文 2012 インTRODakションーワークショップの現在, 荻宿俊文・高木光太郎・佐伯胖(編) 2012 ワークショップと学び1—まなびを学ぶ, 東京大学出版会, Pp1-22.
- 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために, 中央公論新社.
- 中原淳 2013 プレイフルラーニングの旅へ出かけよう, 上田信行・中原淳 2013 プレイフル・ラーニング, 三省堂, Pp12-16.
- 中村征樹 2008 サイエンスカフェ—現状と課題, 科学技術社会論研究, 5, 31-43.
- 土倉英志 2014a サイエンスカフェの創作プロセスの検討—2013年度のゼミナールの報告, 浜松学院大学教職センター紀要, 3, 31-54.
- 土倉英志 2014b サイエンスカフェの企画・運営は学生にどのような学びをもたらすのか—「消去された痕跡の復元」という学び, 日本発達心理学会第25回大会発表論文集, 88. (ラウンドテーブル「文化」と「学び」について考える—文化的活動への参加と学び, 配付資料)
- 土倉英志 2014c サイエンスカフェの企画・運営を通じて達成される学び, 日本認知科学会第31回大会発表論文集, 29-30. (ワークショップ 学習を再定義する—歴史と協働の中の学びへ, 配付資料)
- 土倉ゼミナール 2014 学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究, 平成25年度ゼミ生地域貢献推進事業成果報告書, 31-35.

平成26年度

ゼミ学生地域貢献推進事業 成果発表会

ふじのくに地域・大学コンソーシアムでは、地域の課題解決に取り組むゼミ学生の活動を支援する「ゼミ学生地域貢献推進事業」(静岡県補助事業)を実施しています。

このたび、学生・大学・行政関係者、地域の方々との意見交換、地域への情報発信を目的として、今年度事業に採択された20件のゼミ学生による成果発表会を開催します。

日時

平成27年

2月23日(月)

10:30 ~ 16:00

会場 静岡県総合研修所 もくせい会館 富士ホール
(静岡市葵区鷹匠3-6-1)

定員 学生・大学・行政関係者、一般県民など
(150名)

参加費 無料 事前申込み不要 当日直接会場へお越しください。
公共交通機関をご利用ください。
●JR静岡駅北口から徒歩で約15分
●しずてつバスで、JR静岡駅北口5番・6番乗場から乗車し
「水落町もくせい会館入口」下車



主催 ふじのくに地域・大学コンソーシアム

発表大学 ●静岡英和学院大学 ●静岡県立大学 ●静岡産業大学 ●静岡大学 ●静岡福祉大学
●静岡文化芸術大学 ●静岡理工科大学 ●東海大学 海洋学部 ●常葉大学
●日本大学 国際関係学部 ●浜松学院大学 (ゼミ名・内容は裏面に記載)



一般社団法人 ふじのくに地域・大学コンソーシアム

〒420-0839 静岡県静岡市葵区鷹匠 3-6-1 もくせい会館 2F 電話番号: 054-249-1818

ホームページ: <http://fujinokuni-consortium.or.jp>

平成26年度 採択事業

発表順については、
ホームページをご確認下さい

静岡英和学院大学

短期大学部 安ゼミ

焼津市の観光振興に関する調査研究

静岡県立大学

経営情報学部 西野ゼミ

「人口減少の要因と定住人口の拡大策」の調査・研究・提案

静岡県立大学

経営情報学部 ユンゼミ

(連携ゼミ 静岡産業大学 情報学部 金ゼミ)

藤枝らしい特徴あるお茶を強みとする産地づくり

静岡県立大学

経営情報学部 金川ゼミ

公民館活動への若者の参加と地域の活性化

静岡福祉大学

社会福祉学部 西尾敦史ゼミ

若者が若者を支える体制づくり

静岡文化芸術大学

文化政策学部 船戸ゼミ

浜松市天竜区龍山地区における地域づくりの方策の研究

常葉大学

経営学部 村本ゼミ

(連携ゼミ 常葉大学 健康科学部 栗田ゼミ)

「すその健康増進プラン」の中間評価と計画書の見直し

静岡英和学院大学

人間社会学部 蔡ゼミ

地域の伝承文化に関する研究—しずおか昔話の系譜—

静岡県立大学

国際関係学部 津富宏ゼミ

北欧発「デモクラシー・カフェ」の静岡市における実践：若者による、市民と政治家の対話の場の創出をもたらす効果について

静岡県立大学

国際関係学部 小針ゼミ

県内観光地における韓国語標識・印刷物の問題点に関する研究

静岡産業大学

情報学部 堀川ゼミ

中山間集落に残る古民家、古茶樹などの地域資源を活用した交流人口拡大策に関する研究

静岡大学

情報学部 杉山岳弘研究室

浜松市に残る徳川家康公に関する物語の資産化プロジェクト

静岡大学

理学部 徳岡研究室

旧湯ヶ島小学校を利用した天城山周辺における自然環境資源の有効活用の研究

静岡福祉大学

社会福祉学部 前川ゼミ

障害者の就労を支える地域づくり—就労支援事業所が運営するカフェの地域社会とのインクルージョンのあり方を考える—

静岡理工科大学

総合情報学部 三原研究室

静岡茶の差別化と新たな茶製品・茶サービスの企画

東海大学

海洋学部 落合ゼミ

(連携ゼミ 静岡理工科大学 理工学部 吉川ゼミ)

機能性成分を活用した冷凍マグロ廃棄部分の高度有効利用に関する研究

常葉大学

健康科学部 杉井ゼミ

(連携ゼミ 渡部ゼミ)

参加型世代間交流による高齢者・学生の相互効果と過疎地域活性化に及ぼす影響の検討

常葉大学

経営学部 大久保あかねゼミ

富士ブランド認定品の活用による観光活性化プラン策定

日本大学

国際関係学部 福井千鶴ゼミ

地域社会と南米日系人の連携による地域活性化と多文化共生の推進

浜松学院大学

現代コミュニケーション学部 土倉ゼミ

ワークショップ型学習における「学びのきっかけ」の探索的検討—学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究—

一般社団法人 ふじのくに地域・大学コンソーシアム

〒420-0839 静岡県静岡市葵区鷹匠 3-6-1 もくせい会館 2F 電話番号：054-249-1818

ホームページ：http://fujinokuni-consortium.or.jp

平成26年度ゼミ学生地域貢献推進事業成果発表会

次第

日時：平成27年2月23日（月）10:30～16:00

場所：静岡県総合研修所もくせい会館 富士ホール

- 10:30 開会
- 10:30～11:15 発表・質疑応答（Aグループ）
1. 静岡英和学院大学 短期大学部 安ゼミ
 2. 静岡県立大学 経営情報学部 西野ゼミ
 3. 静岡県立大学 経営情報学部 ユンゼミ
(連携ゼミ：静岡産業大学 情報学部 金ゼミ)
 4. 静岡県立大学 経営情報学部 金川ゼミ
- 11:15～12:00 発表・質疑応答（Bグループ）
5. 静岡福祉大学 社会福祉学部 西尾敦史ゼミ
 6. 静岡文化芸術大学 文化政策学部 船戸ゼミ
 7. 常葉大学 経営学部 村本研究室
(連携ゼミ：常葉大学 健康科学部 栗田研究室)
 8. 静岡英和学院大学 人間社会学部 蔡ゼミ
- 12:00～13:10 <休憩>
- 13:10～13:55 発表・質疑応答（Cグループ）
9. 静岡県立大学 国際関係学部 津富ゼミ
 10. 静岡県立大学 国際関係学部 小針ゼミ
 11. 静岡産業大学 情報学部 堀川ゼミ
 12. 静岡大学 情報学部 杉山岳弘研究室
- 13:55～14:40 発表・質疑応答（Dグループ）
13. 静岡大学 理学部 徳岡研究室
 14. 静岡福祉大学 社会福祉学部 前川ゼミ
 15. 静岡理工科大学 総合情報学部 三原研究室
 16. 東海大学 海洋学部 落合研究室
(連携ゼミ：静岡理工科大学 理工学部 吉川ゼミ)
- 14:40～14:55 <休憩>
- 14:55～15:40 発表・質疑応答（Eグループ）
17. 常葉大学 健康科学部 杉井ゼミ
(連携ゼミ：渡部ゼミ、青田ゼミ)
 18. 常葉大学 経営学部 大久保ゼミ
 19. 日本大学 国際関係学部 福井ゼミ
 20. 浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 土倉ゼミ
- 15:40～15:50 まとめ
- 15:50 閉会

【交流会】16:00～17:00 出席者による意見交換

主催：一般社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム

運営協力：NPO法人静岡時代

一般社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム

420-0839

静岡市葵区鷹匠 3-6-1 静岡県総合研修所もくせい会館

電話 054-249-1818